得三は豫て斯くあらむと用意したる、弓の折を振上ぐれば老婆はお藤の手を扼りぬ。はつしと撲たれて悲鳴を上げ、「あゝれ御免なさいまし、御免なさいまし。と後へ反り前へ俯し、悶え苦しみのりあがり、紅蹴返す白脛はたはけき心を亂すになむ、高田駄平は醉へるが如く、酒打ち飲みて居たりけり。

十三　走馬燈

無慙やなお藤は呼吸も絶々に、紅顏蒼白く變りつゝ、苛責の苦痛に堪へざりけむ、「ひい、殺して下さい殺して。と、死を決したる處女の心。よしや此儘撲殺すとも、隨ふべくも見えざれば、得三殆ど責倦みて、腕を擦りて笞を休めつ。老婆はお藤を突放せば、身を支ふべき氣力も失せて、はたと僵れて正體無し。

得三は、といきを吐きて高田に向ひ、「御覽の通りで仕樣がありません。式作法には無いことだが、お藤の手足をふん縛つて、さうして貴下に差上げませう、喃、お錄、其が可いぢや無いか。「其が好うございます。其後は活すとも殺すとも、高田樣の御存分になさいましたら、ねえ旦那。といへば得三引取つて、「ねえ高田樣。駄平は舌舐ずりして、「慾にも得にももう迚もぢや哩。左

樣して貰ひませうよ。「では證文をな。「うゝ、承知、承知。爰に恐しき相談一決して、得三は猶豫無く、お藤の帶に手を懸けぬ。娘は無念さ、恥かしさ。あれ、と前褄引合して、蹌踉ながら遁げむとあせる、裳をお錄が押ふれば、得三は帶際取つて屹と見え。高田は扇を颯と開き、骨の間から覗いて見る。知らせにつき道具廻る。

さても得右衞門は銀平を下枝の部屋に誘引つ、「此室に寢さして置きました。と部屋の戸を曳開くれば、銀平の後に續きて、女房も入つて見れば、こはいかに下枝の寢床は藻脫の殼、主の姿は無かりけり。「呀。「おや。「これは、と三人が呆れ果てて言葉も出でず。

銀平は驚きながら思ふやう、亭主は飽迄探偵と、我を信じて疑はねば、下枝を別の部屋に藏して、我を欺くべうも無し。之は必ず八藏が何とかして便を得て、前に奪ひ出だせるならむ。さすれば我は此家に用無し。長居は無益と何氣無く、「これは、怪しからん。不圖すると先刻遁失せた惡漢が小戻して、奪ひ取つたかも知れぬ、猶豫する處で無い。僕は直ぐに搜しに出るといはれて亭主は極惡げに、「飛んだことになりました、申譯がございません。「なあに貴下の落度ぢや無い、僕が職務の脫心であつた。いや然らば。と言ひ棄ててとつかは外へ立出でて雪の下へと引返せば、とある小路の小暗き處に八藏は隱れ居つ、銀平の來懸るを、小手で招いて、「おい、此處だよ。」

お藤は得三の手籠にされて、遂には帶も解け廣がりぬ。こは悲しやと半狂亂、犇と人形に抱き

附きて、「おつかさん！と血を絞る聲。世に無き母に救を呼びて、取り縋る手を得三がもぎ離して捻ぢ上ぐれば、お錄は落散る腰帶を手繰つてお藤を縛り附け、座敷の眞中にずる〳〵と、髷を掴んで引出し、押しつけぬ。形怪しき火取蟲いと大きやかなるが、今ほど此室に翔り來て、赫々たる洋燈の周圍を、飛び廻り、飛び狂ひ、火にあくがれて居たりしが、ぱつと羽たゝき火屋の中へ逆さまに飛び入りつ、煽動に消える火とともに身を焦してぞ失せにけり。

颯と照射入る月影に、お藤の顏は蒼うなり、人形の形は朦朧と、煙の如く仄見えつ。靈山に撞く寺の鐘、丑滿時を報げ來して、天地寂然として、室內陰々たり。

斯りし時、何處ともなく聲ありて、「お待ち！と一言呼ばはり叫びぬ。

思ひ懸けねば、得三等、誰そやと見廻す座敷の中に、我々と人形の外には人に肖たらむ者も無し。三人奇異の思ひを爲すうち、誰が手を觸れしといふこと無きに人形の被すらりと脫け落ちて、上藤の顏顯はれぬ。啊呀と顏を見合す處に、いと物凄き女の聲あり。「無法を働く惡人等、天の御罰を知らないか。左樣いふ婚姻は決してなりません。」

幕の內なる泰助さへ、此聲を怪しみぬ。前にも既に說ふ如く、此人形は亡き母として姉妹が慕ひ齊眉物なれば、宇宙の鬼神感動して、假に上藤の口を藉りかゝる怪語を放つらむと覺えず全身粟生てり。況して得三高田等は、驚き恐れつ怪しみて、一人立ち、二人立ち、次第に床の前へ進

み、熟と人形を凝視つゝ三人は少時茫然たり。

機こそ來たれ。と泰助が、幕を絞つて顯はれたり。名にし負ふ三日月の姿をちらと見せるとおもへば、早くもお藤を小脇に抱き、身を飜へして部屋を出でぬ。洵に分秒電火の働き、一散に下階へ駈下りて、先刻忍びし勝手口より、衝と門內に遁れ出づれば、米利堅產種の巨犬一頭、泰助の姿を見て、凄まじく吠え出せり。

南無三、同時に轟然一發、頭を覗つて打出す短銃。

幸ひ狙ひは外れたれど泰助は稍狼狽して、內より門を開けむとすれば、跫然たる足音門前に起りて、外よりも又內に入らむとするものありけり。

泰助蒼くなりて一足退れば、轟然たり、短銃の第二發。

いとも危ふく身を遁れて、泰助は振返り、屹と高樓を見上ぐれば、得三、高田相並んで、窓より半身を乘出し、逆落しに狙ふ短銃の彈丸は續いて飛來らむ。爾時門の扉を開きて、つッと入るは銀平、八藏、連立ちて今歸れるなり。

流石の泰助も度を失ひぬ。

短銃の第三發轟然。

十四　血の痕

質探偵の銀平が出去りたる後、得右衛門は尙不審晴れ遣らねば、室の内を見廻るに、疊に附たる血の痕あり。一箇處のみか二三箇處。此處彼處にぽた〳〵と溢れたるが、敷居を越して緣側より裏庭の飛石に續き、石燈籠の邊には斷えて垣根の外に又續けり。こは怪やと不氣味ながら、其血の痕を拾ひ行くに、墓原を通りて竹藪を潛り、裏手の田圃の畦道より、南を指して印されたり。

一旦助けむと思ひ込みたる婦人なれば、此儘にて寐入らむは口惜し。この血の跡を慕ひ行かば其行先を突留め得べきが、單身にては氣味惡しと、一まづ家に立歸りて、近隣の壯佼の究竟なるを四人ばかり語らひぬ。

各々興ある事と勇み立ち、讀本でこそ見たれ、婦人といへば土蜘蛛に緣あり。さしづめ我等は綱、金時、得右衛門の賴光を中央にして、殿に貞光季武、それ押出せと五人にて、棍棒、鎌など得物を携へ、鉢卷しめて動搖めくは、田舍茶番と見えにけり。

女房は獨り機嫌惡く、由緒なき婦人を引入れて、蒲團は汚れ疊は臺無し。鷄卵の氷のと喰べさせて、一言の禮も聞かず。流れ渡つた洋犬でさへ骨一つでちん〳〵お預はするものを。加之横須

賀の探偵とかいふ人は、茶菓子を無錢でせしめて去んだ。と苦々しげに呟きて、あら寢たや、と夜着引被ぎ、亭主を見送りもせざりける。

得右衛門を始めとして四人の壯佼は、茶碗酒にて元氣を養ひ一杯機嫌で立出でつ。惜しや暗夜なら松明を、點して威勢は好からむなど、語り合ひつゝ畦傳ひ、血の痕を踏んで行く程に、雪の下に近づきぬ。金時眞先に二の足踏み、「得右衛門もう歸らうぜ。と聲の調子も變になり、進み兼ねて立止まれば、「是さお主は何うしたものだ。と言ひ勵す得右衛門。綱は上意を承り、「親方、大人氣無い、廢止にしませう。餘所なら可いが、雪の下はちと、なあ、おい。と見返れば貞光が、「左樣だとも〳〵、もう彼是十二時だらう。といふ後につき季武は、「今しがた靈山の子刻を打つた、此から先が妖物の夜世界よ。と一同に逡巡すれば、「えゝ、弱蟲めら何のこれたかが幽靈だ。腰の無い物なら相撲を取ると人間の方が二本足だけ强身だぜ。と口にはいへど己さへ腰より下は震へけり。金時は頭を掉り、「なに鬼や土蜘蛛なら、糸瓜とも思はねえ。「己もさ、狒々や巨蛇なら、片腕で退治て見せらあ。「我だつて天狗の片翼を斬つて落すくらゐなら、朝飯前だ。「此處にも狼の百疋は立處に裂いて棄てる强者が控へて居ると、口から出任せ吹き立つるに、得右衛門はあてられて、「豪氣々々〳〵、其口で歩行いたら足よりは達者なものだ。さあ行かうかい。といへばどんじりの季武が、「處が、幽靈は大嫌否さ。「辨慶も女は嫌否かッ。「宮本無三四は雷に恐れて震へ

たといふ。「遠山喜六といふ先生は、蛙を見ると立竦みになつたとしてある。

「金時此に於てか幽霊が大禁物。「綱も則ち幽霊には恐れる。といはれて得右衛門大きに弱り、此ま〻歸らんは餘り腑甲斐無し、何卒して引張り行かむ。はて好い工夫はおつとある。「何だ。一所に交際つて呉れたら、翌日とは言はず歸り次第藤澤(宿場女郎の居る處)を奢つて遣るが、と言へば四人顔見合はせ、「なるほどたかの知れた幽霊だ。「此中に人を殺したものは無いから、まづ命に別條はあるまい。「むゝ、背負て呉れがちと怪しいが、「まゝよ行かうか、「おう。「うむ。と色で纏まる壯佼等、よしこの都々逸唱ひ連れ、赤城の裏手へ來たりしが、此處にて血の痕途斷れたり。

得右衛門立停つて四邊を見廻し、「皆待つたり。此家は何うやら、例の妖物屋敷らしいが、はてな。して見るとあの婦人も化生のものであつたか知らん。道理で來てから歸るまで變なことづくめ。しかし幽霊でも己が一廉の世話をして遣つたから、空とは思ふまい。何の故だかあの婦人は、心から可愛うて不便でならぬ。今ぢや知己だから恐しいとも思はぬ哩。おい、おらあ、一番表へ廻つて見て來るから、一所に來い。といへども一人として應ずる者無し。「そんなら待つて居ろ、どれ、幽霊に逢うて來ましよ。と得右衛門唯一人、板塀を廻つて見えずなりぬ。

四人の壯佼は、後に殘りて、口さへもよう利かれず。早夜は更けて、夏とはいへど、風冷々と身に染みて、戰慄と寒氣のさすほどに、醉さへ醒めて茫然と金時は破垣に依懸り、眠氣つきたる

身體の重量に、竹はめつきと折れたりけり。そりやこそ出たぞ、と驚き慌て、得右衛門も待ち合へず、命からゞ〳〵遁歸りぬ。

十五　火に入る蟲

短銃の筒口に濃き煙の立つと同時に泰助が魂消る末期の絶叫、第三發は命中せり。

渠は立竦みになりてぶる〳〵と震へたるが、鮮血たら〳〵と頰に流れつ、抱きたるお藤を搖と投落して、屏風の如く倒れたり。

其と見て駈け寄る二人の惡僕、得三、高田、お錄もろとも急ぎ内より出で來りぬ。高田はお藤を抱き上げて、「おゝ、可哀相に嘸吃驚したらう、既でのことで惡漢が誘拐さうとした。もう好い哩、泣くな〳〵。と背搔撫でて劬れば、得三もほつと呼吸、「あ、好かつた。何者だ、大膽な、人形が聲を出したのに度膽を抜かれた處へ幕の後から飛出しやあがつて、眞個驚いたぜ。お錄、早く内へ連れて行きな。「へい承りました。と高田の手よりお藤を抱取り肩に掛けて連れて行く。

「まづ、安心だ。うん八藏歸つたか、それ其死骸の面を見いと、指圖に八藏心得て叢中より泰助を引摺り出し、「おや、此奴あ探偵だ。我を非道い目に逢はしやあがつた。「何、何うしたと、殺

り損つて反對に當身を喰つた。其だから虚氣手を出すなと言はねえことか。や、銀平殿お前もお歸りか。「はい、旦那唯今。」「うむ、御苦勞、何に下枝樣は如何ぢや。」「早速ながら下枝奴は知れましたか。」と二人齊しく問懸くれば、銀平、八藏交代に、八橋樓にての始末を語り、「其でね、いざといふ段になつて部屋へ這入ると御本人樣何處へ消えたか見えなくなりました。これは八藏殿が前へ廻つて連出したのかと思つた處が、喃八藏殿。」「おゝさ、己も墓場の方で、銀平樣の合圖を待つてましたが、別に孃樣の出て來る姿を見附けませんで、「もう〳〵尋飽倦まして、夜も更けまして、旦那方の御智慧を借りようと存じまして一先づ歸りました。」といふに得三頭を傾け稍久しく思慮居たるが、其にて思ひ當りたり。「して見ると下枝は又家内へ歸つて來たかも知れぬ。といふのは、今しがた誰も居ないのに聲が懸つて、人形が物を言ふていこたあ無い筈だと思つたが、下枝の業であつたかも知れぬ哩。待て、一番家内を檢べて見よう。其死骸はな、好く死んだことを見極めて、家内の雜具部屋へ入れて置け。高田樣、貴下も御迷惑であらうが手傳つて下枝を搜して下さい。探偵は片附けて了つたト、此で下枝さへ見附ければ、落着いてお藤が始末も附けます。」と高田を誘ひ内に入りぬ。

八藏は泰助に恨あれば、其頭蓋骨は碎かれけむ髮の毛に黑血凝りつきて、頰より胸に鮮血迸り眼を塞ぎ齒を切り、二目とは見られぬ樣にて、死し居れるにもかゝはらず。尙先刻の腹癒に、

滅茶々々に撲り潰さむと、例の鐵棒を捻る時、銀平は耳を聳てて、「待て！ 誰か門を叩くぜ。八藏は好くも聞かず、「日が暮ると人ッ子一人通らねえ此邊だ。今時誰が來るもんか。」といふうち門の戸を丁、丁、丁、丁、「お賴み申す。」といふ聲あり。

八藏は急いで鐵棒押隱し、「いかさま、叩くわ。「探偵の合棒でも來はしねえか。己あ見て來る、死骸を早く、「合點だ。」と銀平は泰助の死骸を運び去りつ。八藏は門の際に到り、「誰だね。「へい私。「へい私では解らないよ。夜夜中けたゝましい何の用だ。戸外にて、「えゝ、滑川の者ですが、お家へ婦人が入つて來はしませんかい。」八藏は聞覺えある慥に得右衞門の聲なれば、はてなと思ひ、「何な女だ。「中肉中脊、凄いほど美い婦人。」と聞いて八藏心可笑しく、「其樣な者は來ない、何ぞまた此家へ來たといふ次第でもあるのか。「私どもの部屋から溢れて續いてる血の痕が、お邸の裏手で止まつて居ります。

さては下枝は得三が推量通り、再び歸りしに相違なからむ。其は其にて可いとして、少時なりとも下枝を藏匿たる旅店の亭主、女の口より言ひ洩して主人を始め我までの惡事を心得居らむも知れず。遁がしは遣らじ、と矢庭に門の扉を開けて、無手と得右衞門の手を捉へ、「婦人は居るから逢はしてくれる、さあ入れ。」と引入れて、門の戸はたと鎖しければ、得右衞門はおど〳〵しながら、八藏を見て吃驚仰天、「やあ此方は先刻の、「うむ、用がある此方へ來いと、力任せに引立

てられ、鬼に捕らるゝ心地して、大聲上げて救ひを呼べど、四天王の面々は此時既に遁げたれば、誰も助くる者無くて、哀や擒となりにけり。

十六　啊呀！

今は惡魔ばかりの舞臺となりぬ。磨ぎ清したる三日月は、惜しや雲間に隱れ行き、緣の藤の紫は、厄難未だ解けずして再び奈落に陷りつ、外より來れる得右衞門も鬼の手に捕られたり。さて彼の下枝は如何ならむ。

さるほどに得三は高田とともに家内に入り、下枝は居らずや見えざるかと、あらゆる部屋を漁り來て、北の臺の座敷牢を念の爲め開き見れば、射込む洋燈の光の下に白く蠢くもののあるにぞ、近寄り見れば果せるかな、下枝は此處にぞ發見されたる。

かばかり堅固なる圍の内よりそも如何にして脱け出でけむ、尙人形の後より聲を發して無法なる婚姻を禁めしも、汝なるか。と得三は下枝に責め問ひ、疑を晴さむと思ふめれど、高田は頻に心急ぎて、早くお藤の方をつけよ。夏とはいへど夜は更けたり。さまでに時刻後れては、枕に就くと鷄うたはむ、一刻の價値千金と、只管式を急ぐになむ。さはとて下枝を引起して、足あらば

こそ歩みも出め、斯して置くに如くことあらじ。人に物を思はせたる報酬は斯くぞと詈りて、下枝が細き小腕を後手に捻ぢ上げて、縛めんとなしければ、下枝は絲より尙ほ細く、眼を見開きて恨しげに、「もう大抵に酷うしたが好うござんせう。坐つて居る事も出來ぬやうに弱り果てた私の身體、何處へも參りは致しませぬ。といへば得三冷笑ひ、「其の手はくはぬわ。また出て失せうと思ひやあがつて、へむ、左樣旨くはゆかないてや、ちつとの間の辛抱だ。後刻に來て一所に寢てやる。ふむ、痛いか樣を見ろ。と下枝の手を見て、「おや、右の小指を何うかしたな、こいつは一節切つてあらあ。やい、何處へ行つて指切斷をして來たんだ。と問ひ懸るを高田は押止め、「まあまあ、そんな事ア何時でも可いて。早く我の方を、「はて、せはしない今行きます。と出血休まざる小指の血にて、我掌の汚れたるにぞ、かつぷと唾を吐き懸けて、下枝の袖にて押拭ひ、高田と連立ち急がはしく、人形室に赴きぬ。後より八藏入來り、斯う〳〵いふ次第にて、八橋樓の亭主を捕へ、一室に押込め置きたるが、といふに得三頷きて、其の働を譽めそやし、後にて計らふべき事あり。其儘にして置きて、銀平と勝手にて酒を飲んで寛げ。と八藏を去なして手を打鳴し、「錄よ、お錄。と呼び立つれど、老婆は更に答せねば、「はてな、お錄といへば先刻から皆目姿を見せないが、はゝあ、疲れて何處かで眠つたものと見える。老年といふものはえゝ！埒の明かぬ。と呟きつゝ高田に向ひ、「どうせ横紙破りの祝言だ。媒妁も何も要つた物では無い。どれ、藤を進

げますから。と例の被を取除くれば、此人形は左の手にて小褄を搔取り、右の手を上へ差伸べて被を支ふるものにして、上げたる手にて飜る、綾羅の袖の八口と、〆めたる錦の帶との間に、人一人肩をすぼむれば這入らるべき透間あり。其處に居て壁を押せば、縱三尺幅四尺向うへ開く仕懸にて、總ての機械は人形に、隱るゝ仕方巧みにして、戸になる壁の繼目など、肉眼にては見分け難し。得三手燭にて此仕懸を見せ、「平常は鎖を下してお藤を入れて置くが、今晩は貴下に差上げるので、開けたまゝだ。此方へお入り。と先に立ちて行く後より、高田も入りて見るに、壁の彼方にも一室あり。疊を敷くこと三疊ばかり。「いゝ一寸の間だ。と高田がいへば、得三呵々と打笑ひて、「東京の待合にも此程の仕懸はあるまい。といひつゝ四邊を見廻すに、今しがた泰助の手より奪ひ返してお錄に此室へ入れ置くやう、命けたりしお藤の姿、又もや消えて見えざりければ、啊呀とばかり顏色變じぬ。

高田は太く不興して、「令孃は何うしました。え、お藤樣は何うしたんです。とせきこむにぞ、得三は當惑の額を撫で、「いやはや、お談話になりません。藤が居無くなりました。高田は顏色變へ、「何だ、お藤が居無くなつたと？「此通り、此室より外に入れて置く處はない。實に不思議でなりません。と流石の得三も呆れ果てて、悄れ返れば高田は勃然として、「左樣いふことのあらう道理は無い。ふゝん、こりや俄に彼の娘が惜しくなつたのだな。「滅相な。「否、其に違ひありませ

せん。隱して置いて、我を欺くのだ。「と思召すのも無理では無い。餘り變で自分で自分を疑ふ位です。先刻から見えぬといひ、或は婆々奴が連れ出しはしないかと思ふばかりで、其より他に判斷の附樣がございません。早速探し出しますで、今夜の處は何分にも御猶豫を願ひたい。と腰を屈め、揉手をして、只管賴めどいつかな肯かず、「なんのかのと、體の可いことを言ふが、婆々と馴れ合つてする仕事に極まつた。誰だと思ふ、えゝ、つがもねえ、濱で火吸器といふ高田駄平だ。そんな拙策を喰ふ者か。「まあ〳〵さう一概におつしやらずに、別懇の間に免じて。「別懇も昨今もあるものか。可し我も斷つてお藤を吳れとは言はぬ。其代に貸した金千圓、元利揃へてたつた今貰はうかい。と證文眼前に附着くれば、强情我慢の得三も何と返さむ言葉も無く困じ果ててぞ居たりける。

十七　同士討

高田は尙も詰寄りて、「妖物屋敷に長居は無益だ。直ぐ歸るから早く渡せ。「そりや借りた金だ抵當のお藤が居無くなれば、屹度お返濟申すが、未だ家の財產も我が所有にはならず、千圓といふ大金、今といつては致方がございません。何卒暫時の處を御勘辨。「うんや、ならねえ。此駄平、

言ひ出したからは、血を絞つても取らねば歸らぬ。きり〳〵此處へ出しなさい。と言ひ募るに得三は赫として、「こゝな、没分曉漢。無い者ア仕方が無え。と足を出せば、「踏む氣だな、可いわ。踏むならば踏んで見ろ。おゝそれながらと罷り出て、汝の惡事を訴へて、首にしてやる覺悟しやあがれ。得三はぎよつとして、「何の、踏むなどといふ圖太い了簡を出すものか。と慌つる狀に高田は附入り、「そんなら金を、さあ返濟せ。「今といつては何とも何うも。「ぢや訴へて首にしようか。「其は餘り御無體な。「えゝ！ 面倒だ。と立懸れば、「まあ、待つて吳れ。と袂を取るを、「乞食め、動くな。と振離され、得三忽ち血相變り、高田の帶際無手と摑みて、じり〳〵と引戻し、人形の後の切拔戸を、内よりはたと鎖しける。

何をかなしけむ。壁厚ければ、内の物音外へは漏れず。

良ありて戸を開き差出したる得三の顏は、眼据つて唇わなゝき、四邊を屹と見廻して、「八藏、八藏、と呼懸けたり。八藏は入來りぬ。得三は聲を潛め、「八、一寸爰へ來い。「へい、何、何事でございます。と人形の袖を潛つて密室の戸口に到れば、得三は振返つて後を指し、「此を。……八藏は覗き込みて反り返り「ひやつ、高田樣が自殺をしたッ。と叫ぶを、「叱！聲高しと押止めて、眼を見合はせ少時無言、此時一番鷄の聲あり。

得三は片頰に物凄き笑を含みて、「八藏。といふ額を下より見上げて、「へい。「お前にも左樣見

えるかい。「何、何、何が。「いやさ。高田の死骸は自殺と見えるか。「へい。自分で短刀の柄を握つて而して自分の喉を突いてれば誰が見ても全く自殺。「應、慥に左樣見える。が、實は我が殺したのだ。「えゝ、お殺なすつたか。「突然藤が居無くなつたぞ。八、先刻からお錄は見懸けまいな。「へい、あの婆樣は何處へ行つたか居りません。「左樣だらう。彼奴もしたゝか者だ。お藤を誘拐して行つたに違ひ無い。あの孃はまだ小兒だ。何にも知らないから可し、老婆も、我等と一所に働いた奴だ。人に惡事は饒舌まい。惜くも無し、心配も無いが、高田の業突張、大層怒つてな。お藤がなくなつたら卽金で千圓返せ、返さなけりや、訴へると言ひ募つて、あの火吸器だもの、何というても肯くものか。既に駈出さうとしやあがる。まゝよ毒喰はば皿迄と、我が突殺したのだ。「其は好うございました。「すると奴さん苦しいものだから、拳で緊乎と此通り短刀の柄を握つたのよ。「體の可い自殺でございますね。「左樣よ。其處で己が旨い事を案じついたて。之からあの下枝を殺してさ。「下枝樣を。「三年以來辛抱して、氣永に靡くのを待つて居たが、あゝ强情では仕樣が無え。今では憎さが百倍だ。虐殺にして腹癒して、而して下枝の傍に高田の死骸を僵して置く。の、左樣すれば誰が目にも、高田が下枝を殺して、自殺をしたと見えるといふものだ。何と可い工夫であらうが。」

さりとは底の知れぬ惡黨なり。八藏は手を拍つて「旨い。と叫べり。「而して己が口の前で旨く

世間を欺けば、他に親類は無し、赤城家の財産はころりと我が手へ轉がり込む。何と八藏さうなる日にはお前に一割は遣るよ。「えゝ難有い、夢になるな〳〵。「もう是切り御苦勞は懸けないが、もう一番頼まれてくれ。「へい、何なりとも。「銀平は何うした。「頻に飲んで居ります。「彼奴も序に片附けて了ひ度い、家でやつては面倒だから、是から飲直すといつて連出してな。「へい〳〵、なるほど。「何處かへ行つて酒を飲まして、ちよいと例の毒藥を飲ましやあ譯は無い、醉つて寢たやうになつて、翌日の朝は此世をおさらばだ。「承りました。併し今時青樓で起きて居ませうか。「藤澤の女郎屋は遠いから、長谷あたりの淫賣店へ行けば、何時でも起きて居らあ、一所にお前も寢て來るが可い。「ぢやあ直ぐと參ります。「御苦勞だな。「なんの貴下。と行懸くるを、「待て、待て。「え。「宿屋の亭主とかは何うしたのだ。「手足を縛つて猿轡を嚙まして、雜具部屋へ入れときました。「よし、よし。仕事が濟んだら檢べて見て大抵なら無事に歸して遣れ。「へい左樣なら。と八藏は勝手に行きて銀平を見れば、「八、やい、置去りにして何處へ行つて居た。といふさへ今は卷舌にて、泥の如くに醉うたるを、飲直さむとて連出しぬ。

十八　虐殺

得三は他に一口の短刀を取り出して、腰に帶び、下枝を殺さむと心を決めて、北の臺に赴き見れば、小手高う背に捻ぢて縛めて、柱に結へ附け置きたるまゝ、下枝は膝に額を埋め、身動きもせで居たりけり。

「約束通り寢に來た。と肩に手を懸け引起し、移ろひ果てたる花の色、惱める風情を打視め、「何うだ、切ないか。永い年月好く辛抱をした。豪い者だ。感心な女だ。其性根にすつかり惚れた。柔順に抱かれて寢る氣は無いか。と嘲弄されて切齒をなし、「えゝ汚らはしい、聞度うござんせぬ。と頭を掉れば嘲笑ひ、「聞きたうなうても聞かさにや置かぬ、最一度念の爲だが、思ひ切つて應といはないか。「嫌否ですよ。「左樣か、淡々としたものだ。そんなら此方へ來な。好い者を見せて遣る。立て、えゝ立たないか。「あれ。と下枝は引立られ、殺氣滿ちたる得三の面色、之は殺さるるに極つたりと、屠所の羊のとぼ〳〵と、廊下傳ひに歩は一歩、死地に近寄る哀れさよ。蜉蝣の命、朝の露、そも果敢しといはば言へ、身に比べなば何かあらむ。

閻王の使者に追立てられ、歩むに長き廻廊も死に行く身は最近く、人形室に引入れられて亡き母の存生りし日を思ひ出し、下枝は涙さしぐみぬ。さはあれ業苦の浮世を遁れ、天堂に在す御傍へ行くと思へば殺さるゝ生命はさら〳〵惜からじと、下枝は少しも惡怯れず。爾時得三下枝をば、高田の傍に押据ゑつ、いと見苦しき死樣を指さしていひけるは、「下枝見ろ、此顏色を。殺される

のはなか〳〵一通りの苦しみぢや無いぜ、其もかう一思ひに殺ればまだしもだが、いざお前を殺すといふ時には、此迄の腹癒に、豫ても言ひ聞かした通り、虐殺にしてやるのだ。可いか、其でも可いか。これと、肩を押へてゆすぶれば、打戰くのみ答は無し。「其から未だある。此男と、お前と、情死をした様にして死恥を曝すのだ。何だ。何だ。下枝は恨めしげに眼を睜り、「得三様、餘りでございます。「下枝様、貴嬢も餘り强情でございます。其が嫌否なら悉皆財産を我に渡して、而して《得三様、貴下は可愛いねえ。》とかういへば可い。其は出來無いだらう。矢張、斬られたり、突かれたりする方が希望なのか、さあ何と。と言はるゝ毎にひや〳〵と身體に冷たき汗しつとり、斬刻まるゝよりつらからめ。猛獸犧牲を獲て直ぐには殺さず暫時之を弄びて、早慊りけむ得三は、下枝をはたと蹴返せば、苦と仰様に僵れつゝ呼吸も絶ゆげに唸き居たり。「やい、婦人、冥途の土産に聞かして遣る。汝の母親はな。顏も氣質も汝に肖て、矢張我の言ふことを聞かなかつたから、毒を飲まして得三が殺したのだ。下枝は驚きに氣力を復して、打震へて力無き膝立直して起き返り、「怪しき死様遊ばしたが、そんなら得三、おのれがかい。「應、我だ。驚いたか。「えゝ憎らしい其の咽喉へ喰附いて遣りたいねえ。「へ、へ、唇へ喰附いて、接吻ならば希望だが、咽喉へは眞平御免蒙る。どれ手を下ろして料理うか。と立懸られて、「あれえ、人殺し。と一生懸命、裳を亂して遁げ出づれば、縛の繩の端を踏止められて後居に倒れ、「誰ぞ助けて、助けて。と

泣聲嗄らして叫び立つれば、得三は打笑ひ、「好くある奴だ。殺して欲いの死にたいのと、口癖にいうて居て、いざとなると其通り。ても未練な婦人だな。「否、死にたうない、死にたうない。親を殺した敵と知つては、私や殺されるのは口惜い。と伏しつ轉びつ身をあせりぬ。

得三は床柱を見て屈竟と打頷き、矢庭に下枝を抱き寄せ、「蹶くな。ぢつとして居れ。と彼の人形と押並べて、床柱へぐる〳〵卷きに下枝の手足を縛り附け、一足退つて突立ちたり。下枝は無念さ遣る方なく、身體を悶えて泣き悲しむを寛々と打見遣り、「今となつては汝の方から隨ひます、財産も渡しますと吐かしても許しはせぬ。と言ひ放てば、下枝は顏に溢れ懸る黑髮を颯と振分け、眼血走り、「得三様、何しても殺すのか。といふ聲いとゞ、裏枯れたり。「うむ、虐殺にするのだ。「あれえ。「何だ、未だびく〳〵するか、往生際の見苦しい奴だ。「そんなら何うでも助からぬか、末期の際に次三郎様にお目に懸つて、おのれの惡事をお知らせ申し敵が討つて貰ひたい。と泣き入る涙も盡き果てて血をも絞らむばかりなり。「次三もな我が命つけて、八藏が今朝毒殺した哩。「えゝあの方まで殺したのか。御方の失せさせ給ひし上は、最早此世に望みは無し、と下枝は落膽氣落ちして、「もう聞たう無い、言度うない。さあお殺し。と口にて衣紋を引合はせ、縛られたるまゝ合掌して、從容として心中に觀音の御名を念じける。

爾時得三は袖を揭げて、雪より白き下枝の胸を、乳も顯はに押寛ぐれば、動悸烈しく胸騷立ち

て腹は浪打つ如くなり。全體蟲が氣に喰はぬ腸斷割つて出してやる。と刀引拔き逆手に取りぬ。

夜は正に三更萬籟死して、天地は惡魔の獨有たり。

（次三郎とは本間のこと、第一回より三回の間に出でて毒を飲みたる病人なり。鎌倉より東京のことなれば、敏き看官の眼も屆くまじとて書添へ置く。）

十九　二重の壁

得三一度手を動さば、萬事爰に休せむ哉。下枝の命の終らむには、此物語も休みぬべし。さらば其に先立て、一旦滑川の旅店まで遁れ出でたる下枝の、何とて再び家に歸りて屠り殺さるゝ次第となりけむ、其顚末を記し置くべし。

下枝は北の臺に幽囚せられてより、春秋幾つか行きては歸れど、月も照さず花も訪ひ來ず、眼に見る物は恐ろしき鐵の壁ばかりにて、日に新しうなるものは、苛責の品の替るのみ、苦痛いふべくもあらざれど、家に傳はる財產も、我身の操も固く守護て、明しつ暮しつ長き年、月日は今日にいたるまで、待てども助くる人無ければ、最早忍び兼ねて宵のほど、壁に頭を打碎きて、自殺をせむと思ひ詰め、西向の壁の中央へ、犇と額を觸れけるに、不思議や壁は縱五尺、橫三尺ば

かり、裂けたらむが如く颯と開きて、身には微傷も負はざりけり。

大名の住めりし邸なれば、壁と見せて忍び戸を拵へ置き、其より間道への拔穴など、舊き建物にはあることなり。人形の後の小座敷も之と同じきものなるべし。

こは怪しやと思ひながら、開きたる壁の外を見るに、暗くてしかとは見分け難きが、壇階子めきたるものあり。靜に蹈みて下り行くに足はやがて地に附きつ、暗さは愈々增りぬれど、土平らにて歩むに易し。西へ西へと志して爪探りに進み行けば、蝙蝠顏に飛び違ひ、淸水の滴々膚を透して、物凄きこと言はむ方無し。とかうして道のほど、一町ばかり行きける時、遙に梟の目の如き洞穴の出口見えぬ。

此洞穴は比企ケ谷の森の中にあり。さして目立つほどのものにあらねば、誰も這入つて見た者無し。

下枝は穴を這出でて始めて天日を拜したる、喜び譬へむものも無く、死なんとしたる氣を替へて、誰か慈悲ある人に縋りて、身の窮苦を歎き訴へ、扶助を乞はむと思ひつる。そは夕暮のことにして、畦道より北の方、里ある方へぞ歩みたれ。

（得三が高樓にて女を見たるは此時なり。）

斯くて下枝は滑川の八橋樓の裏手より、泰助の座敷に入りたるが、浮世に馴れぬ女氣に人の邪

正を謀りかね、うかとは口を利かれねば、默して樣子を見て居るうち、別室に伴はれ、一人殘され寢床に臥して、越方行末思ひ佗び、涙に暮れて居たりし折から、彼の八藏に見とがめられぬ。其のみならず妹お藤を、今宵高田に娶すよし豫て得三に聞居たれば、こもまた心懸りなり、一度家に立返りて何卒お藤を救ひいだし、又こそ忍び出でなんと、忌しき古巢に歸るとき、多くの人に怪ませて、赤城家に目を附けさせなば、何かに便よかるべしと小指一節喰ひ切つて、彼の血の痕を赤城家の裏口まで印し置きて、再び件の穴に入り冥途を歩みて壇階子に足踏懸くれば月明し。何處よりか洩るゝと見れば、壁を二重に造りなして、外の壁と內の壁の間にかゝる踏壇を、仕懸けて穴へ導くにて透間より月の照射なり。直ぐ眼の下は裏庭にて此時深き叢に彳める人ありければ、(是泰助なり)浴衣の裳を引裂きて、小指の血にて文字したゝめ、かゝる用にもたゝむかとて道にて拾ひし礫に包み、丁と投ぐれば恰も可し。其人の目に觸れて、手に開かれしを見て嬉しく、さてお藤をば奈何せむ。

此壇階子の中央より道は兩つに岐れたり。右に行けば北の臺なる彼座敷牢に出づべきを、下枝は左の方に行きぬ。見も知らざる廊下細くして最長し。肩をすぼめて漸々に歩み行くに、兩側は又壁なり。理外の理さへありと聞く之は家の外の家ならむか。十數年來住める身の、得三も之は知らざるなり。廊下の終る處に開戸あり、開けて入れば自から音なく閉ぢて彼方より顧みれば壁

と見紛ふ許りなり。此處ぞ彼人形の室の裏なる密室になんありける。

此時しも得三等が、お藤を責めて婚姻を迫る折なりしかば、如何せば救ひ得られむかと、思ひ惱み居たるうち、火取蟲に洋燈消えて、此上無き機會を得たるにぞ、怪しき聲音に驚かせしに、折よく外にも人ありて妹を抱きて遁出でたれば、嬉しやお藤は助かりぬ。我も早く出去らむと又もや廊下を傳はりて穴に下りむと蹈迷ひ、運拙うして又舊の座敷牢に入り終んぬ。かゝりしほどに身は疲れ、小指の疵の痛苦劇しく、心ばかりは急れども、足蹌踉ひて腰起たず、氣さへ漸次に遠くなりつ、前後も知らで居たりけるを、得三に見出されて、さてこそ斯は惡魔の手に斬殺されむとするものなれ。

二十　赤城樣——得三樣

普門品、大悲の誓願を祈念して、下枝は氣息奄々と、無何有の里に入りつゝも、刀尋段々壞と唱ふる時、得三は白刃を取直し、電光胸前に閃き來りぬ。此景此時、室外に聲あり。「アカギサン、トクザウサン。」

不意に驚き得三は今や下枝を突かむとしたる刀を控へて、耳傾くれば、「あかアぎさん、とくざ

うさん。」

得三は我耳を疑ふ如く、耳朶に手をあてて眉を顰めつ、傾聽すれば、慥に人聲、「赤城樣——得三樣。」

得三はぎよつとして、四邊を見廻し、人形の被を取つて、下枝にすつぽりと打被せ、己が所業を蔽ひ隱して、白刃に袂を打着せながら洋燈の心を暗うする、さそくの氣轉此で可しと、「誰だ。何誰ぢや。と呼懸くれば、答は無くて、「赤城樣。得三樣。しや忌々し何奴ぞと得三からりと部屋の戸開くれば、彼聲少し遠ざかりて、また、「赤城樣、得三樣。「えゝ、誰だ。誰だ。とつか〳〵と外に出れば、廊下をばた〳〵と走る音して姿は見えずに、「赤得、赤得。背後の方にて又別人の聲、「赤城樣、得三樣。啊呀と背後を見返れば以前の聲が、「赤得、赤得。と笑ふが如く泣くが如く恨むが如く嘲ける如く、樣々聲の調子を變じて遠くより又近くより、透間もあらせず呼立てられ、得三は赤くなり、蒼くなり、行きつ戻りつ、うろ、うろ、うろ。拍子に懸けて、「赤、赤、赤、赤。「何者だ。何奴だ。出合へ出合へ。といひながら、得三は血眼にて人形室へ駈け戻り、と見れば下枝は被を被せ置きたる儘寂として聲をも立てず。「ちえゝ、面倒だ。と劍を揮ひ、胸前目懸けて突込みしが、心急きたる手元狂ひて、肩先ぐさと突通せば、きやッと魂消る下枝の聲。

途端に烈しく戸を打叩きて、「赤得、赤得。と叫び立つれば、「汝野狐奴、又來せた。と得三室

外へ躍出づれば、ぱつと遁出す人影あり。廊下の暗闇に姿を隱して又——得三をぞ呼んだりける。

憎さも憎しと得三が、地蹈鞴ふんで縱横に刃を打掉る滅多打。聲は漸々遙になり、北の臺にて哀げに、「あかアぎさん、とくざうさん。——四邊は寂然。

此より以前得三が人形室を走り出でて聲する者を追ひける時、室の外より得三と入違ひに、鳥の如くに飛び込む者あり。突然下枝の被を外して之を人形に被らせつ。其身は日蔽の影に潛みぬ。

されば得三が引返し來て、被の上より突込みたるは、下枝にあらで人形なりけり。但下枝は右にありて床柱に縛し上げられつ、人形は左にありて床の間に据ゑられたる、肩は擦合ふばかりなれば、白刃ものを刺したるとき、下枝は膽消え目も眩みて、絶叫せしはさもありなん。又もや聲に呼び出されて、得三再び室の外へ駈け行きたる時、幕に潛める彼男は鼬の如く走り出で、手早く下枝の繩を解き、抱き下して耳に口、「心配すな。と囁きたり。時しも廊下を蹈鳴して、得三の歸る樣子に、彼男少し慌てる色ありしが、人形を傍へずらして柱に寄せ、被は取れて顏も形もあからさまなる、下枝を人形の跡へ突立せ、「聲を立てる勿。と小聲に敎へて、己は大音に、「赤城樣、得三樣。」いふかと思へば姿は亡し。既に幕の後へ飛込みたる其早さ消ゆるに似たり。

彼も此も一瞬時、得三は眼血走り、髮逆立ちて駈込つ、猶豫ふ色無く柱に凭れる被を被りし人形に、斬つけ突つけ、狂氣の如く、愉快、愉快。と叫びける。同時に戸口へ顏を差出し、「赤城樣、

得三様。「やあ、汝は！と得三が、物狂はしく顧みれば、「光來、光來。此處まで光來と、小手にて招くに、得三は腰に付けたる短銃を發射間も焦躁しく、手に取つて投附くれば、ひらりとはづして遁出すを、遣らじものを。と此の度は洋燈を片手に追懸けて、氣も上の空何やらむ足に躓き怪し飛びて、火影に見ればこはいかに、お藤を連れて身を隱せしと、思ひ詰めたる老婆お錄、手足を八重十文字に縛られつ、猿轡さへ嚙まされて、芋の如くに轉がりたり。

得三後居に揑と坐し、「やい、此態は何うしたのだ。と口なる手拭退けて遣れば、お錄はごほんと咳き入りて、「はい、難有うございます。「えゝ何うしたのだ。「はい、はい。もしお聞きなされまし。あの時お藤様を人形の後へ隱して、其から貴下、階下へ行りてがらくた部屋の前を通ると、内でがさ〳〵いたしますから、鼠か知らん、と覗きますとね、何うでございませう。あの探偵泰助奴がむく〳〵と起き上る處でございました。「え！」

十一　旭

幾度か水火の中に出入して、場數巧者の探偵吏、三日月と名に負ふ倉瀨泰助なれば、何とて脆くも得三の短銃に僵るべき。されば高樓より狙ひ撃たれ、外よりは惡僕二人が打揃ひて入り來し

は、さすがの泰助も今迄に餘り經驗無き危急の場合、一度は狼狽したりしが、豫て携ふる繪具にて、手早く血汐を裝ひて、第三發の放たれしを、避けつゝ故意と撃たれし體にて叢に僵れしに、果せる哉惡人輩は誠死に欺かれぬ。

さりながら八藏が尙念の爲め鐵棒にて撲り潰さむと犇くにぞ、爾時敵は二人なれば、蹴散らして一度退かむか、さしては再び忍び入るに甚便り惡ければ、太く心を痛めしが、恰も好し得右衞門が此折門を叩きしかば、難無く銀平に抱かれて、雜具部屋へ押込まれつ、後より得右衞門が擒にされて、同じ室へ入れられたるをも、泰助は好く知れるなり。

四邊靜になりしかば、潛かに頭を擡ぐる處を、老婆お錄に見咎められぬ。聲立てさせじと飛蒐りて、お錄の咽喉を絞め上げ〳〵、老婆が呼吸も絕々に手を合して拜むを見澄まし、さらば生命を許さむあひだ、お藤を閉込め置く處へ、案内せよ、と前に立たせ、例の人形室に赴きて、其仕懸の巧みなるに舌を卷きて驚歎せり。斯くて彼の密室より、お藤を助け出しつゝ、かたの如く老婆を縛りて又雜具部屋へ引取りしを、知る者絕えて無りけり。其より泰助は庭の空井戸の中にお藤を忍ばせて、再び雜具部屋へ引返して舊の如く死を粧ひ、身動きもせで居たりしかば、二三度八藏が見廻りしも全く死したる者と信じて、斯くとは思ひ懸けざりき。

とかうするうち、高田は殺され惡僕二人は酒を飲みに出行きたれば、時分は好しと泰助は忍び

やかに身支度するうち、二階には下枝の悲鳴頻なり。驚破やと起つて行き見れば、此時しも得三が犠牲を手玉に取りて、活み殺しみなぶり居れる處なりし。

此に於て泰助も、と胸を吐きて途方に暮れぬ。他の事ならず。得三は刀を手にし、短銃を腰にしたり。我泰助は寸鐵も帶びず。相對して戰はば利無きこと必定なり。とあつて捕吏を招集せむか、下枝は風前の燈の、非道の刃にゆらぐ魂の緒、絶えむは半時を越すべからず。よしや下枝を救ひ得ずとも殺人犯の罪人を、見事我手に捕縛せば、我探偵たる義務は完し。されども本間が死期の依頼を天に誓ひし一諾あり、人情としては決して下枝を死なすべからず。さりとて出て闘はむか、我が身命は立處に滅し、此大惡人の罪狀を公になし難し。噫公道人情兩是非。人情公道最難爲。若依公道人情缺。順了人情公道虧。如かず人情を棄てて公道に就き、眼前に下枝が虐殺さるゝ深苦の樣を傍觀せむ哉、と一度は思ひ決めつ、我同僚の探偵吏に寸鐵を帶びずして能く大功を奏するを、榮として誇りしが、今より後は我を折りて、身に護身銃を帶すべしと、男泣に泣きしとなん。

下枝が死を宣告され、仇敵の手には死なじとて、歎き悶ゆる風情を見て、咄嗟に一の奇計を得たり。

走りて三たび雜具部屋に歸り、得右衛門の耳に囁きて、其計略を告げ、一臂の力を添へられむ

ことを求めしかば、件の滑稽翁兼たり好事家、手足を舞はして奇絶妙と稱し、兩膚脱ぎて向う鉢巻、用意は好きぞやらかせと、齊く人形室の前に至れば、美婦人正に刑柱にあり、白刃乳の下に臨める刹那、幸にして天地は惡魔の所有に非ず。

得右衛門は得三の名を呼びて室外におひき出し、泰助は難無く室内に入りて潜むを得たり。然る後二人計略合期して泰助をして奇功を奏せしめたる、此處得右衛門大出來といふべし。被を被替へて虚兵を張り、人形を身代にして下枝を隱し、二度毒刃を外して三度目に、得三が親仁を追懸け出でて、老婆に出逢ひ、一條の物語に少しく隙の取れたるにぞ、いで此時と泰助は、下枝を抱きて易々と庭口に立出づれば、得右衛門待受けて、彼はお藤を背に荷ひ、此は下枝を肩に懸けて、滑川にぞ引揚げける。

時正に東天紅。

暗號一發捕吏を整へ、倉瀬泰助疾驅して雪の下に到り見れば、老婆錄は得三が亂心の手に屠られて、血に染みて死し居たり。更に進んで二階に上れば、得三は自殺して、人形の前に伏し居たり。

旭の光輝に照らされたる、人形の瞳は玲瓏と人を射て、右眼、得三の死體を見て瞑するが如く、左眼泰助を迎へて謝するが如し。五體の玉は亂刃に碎けず左の肩僅かに微傷の痕あり。

金時計

上

廣告

一　拙者昨夕散歩の際此邊一町以内の草の中に金時計一個遺失致し候　間御拾取の上御屆け下され　候　御方へは御禮として金百圓呈上可　仕　候

月　日　　あーさー、へいげん

是相州西鎌倉長谷村の片邊に壯麗なる西洋館の門前に、今朝より建てる廣告標なり。時は三伏盛夏の候、聚り讀む者堵の如し。

「へいげんといふは東京……學校の御雇講師にて、富豪を以て聞ゆる――西洋人なるが、毎年此別莊に暑を避くるを常とせり。

館内には横濱風を粧ふ日本の美婦人あり。蓋し神州の臣民にして情を醜虜に鬻ぐもの、俗に洋妾と稱ふるは是なり。道を行くに愧る色無く、人に遭へば、傲然として意氣頗る昂る。昨夕へいげんと兩々手を携へて門前を逍遙し、家に歸りて後、始めて祕藏せし瑞西製の金時計を遺失せし

を識りぬ。警察に訴へて搜索を請はむか、可は卽ち可なり。然れども懸賞して細民を賑はすに如かずと、一片の慈悲心に因りて事爰に及べるなり、と飯炊に雇はれたる束髮の老婦人、人に向ひて喋々其顚末を說けり。

渠は曰く、「だから西洋人は難有いよ。」

懸賞金百圓の沙汰卽日四方に喧傳して、土地の男女老若を問はず、我先に此財を獲むと競ひ起ち、手に〳〵鎌を取りて、へいげん門外の雜草を刈り始めぬ。

洵や金一百圓、一錢銅貨一萬枚は、是等の細民が三四年間粒々辛苦の所得なるを、萬一咄嗟に箇の大金を獲ば、蓋し異數の僥倖にして、坐して半生を暮し得べし。誰か手を懷にして傍觀せむや。

翌日は頓に十人を加へ、其翌日、又其翌日、次第に人を增して、遂に百を以て數ふるに到れり。渠等が炎熱を冒して、流汗面に被り、氣息奄々として勞役せる頃、高樓の窓半ば開きて、へいげん帷を揭げて白皙の面を露し、微笑を含みて見物せり。

斯くて日を重ねて、一町四方の雜草は悉く刈り盡し、赤土露出すれども、金時計は影もあらず。草刈等は仍倦まず、怠らず、撓まず、此處彼處と索れども、金屬は釘の折、鐵葉の片もあらざりき。

一家を擧げ、親族を盡し、腰辨當を提げて、早朝より晩夜まで、幾日間炎天に腦汁を煮られて、徒汗を搔きたる輩は、血眼になりぬ。失望して殆ど狂せむとせり。

されど毫も疑はざりき。渠等はへいげん君の富且つ貴きを信ずればなり。

渠等が勞役の最後の日、天油然と驟雨を下して、萬石の汗血を洗ひ去りぬ。蒸し暑き雜草地を拂ひて雨漸く晴れたり。土は一種の掬すべき香を吐きて、綠葉の雫滴々、海風日沒を吹きて涼氣秋の如し。

へいげん此夕又愛妾を携へて門前に出でぬ。出でて快氣に新開地を歩み行けば、松の木蔭に雨宿りして、唯濡れに濡れたる一個の貧翁あり。

多くの草刈夥間は驟雨に狼狽して、蟻の如く走り去りしに、渠一人老體の疲勞劇しく、足蹌踉ひて避け得ざりしなり。龍動の月と日本のあだ花と、相並びて我面前に來れるを見て、老夫は慌しく跪き、

「御時計は、はあ、何處にもござりましねえ。」

幾多の艱難の無功に屬したるを追想して、老夫は漫に涙ぐみぬ。

美人は流眄にかけて、

「眞個に御苦勞だつたねえ。」と冷かに笑ふ。

へいげんは哄然大笑して、

「日本人の馬鹿！」

と謂ひ棄てつ、徐に歩を移して濱邊に到れば、一碧千里烟帆山に映じて縹渺畫の如し。

へいげん美人の肩を拊ちて、

「人間は馬鹿な國だが、景色の好いのは不思議さ。」

と英語を以て囁きたり。

洋妾はへいげんの腕に縋りつゝ、

「旦那もう歸らうぢやございませんか。薄暗くなりましたから。」

「うむ、徐々歸らうか。あの門外の鬱陶しい草には弱つたが、今ではさつぱりして好い心持だ。」

「ですけれども、あの人足輩は何んな氣持でせうね。」

「矢張時計が見着からないのだと想つて、落膽してゐるだらうさ。」

「貴下は眞個に智慧者で在らつしやるよ。百人足らずの人足を、無錢で役つてさ。」

「腰辨當でやつて來るには感心したよ。」

「眞個にねえ。あのまあ蛇のゐさうな草原を綺麗に拂らして、高見で見物なんざ太閤樣も跳足ですよ。」

「左様かの。いや、さうあらう。實は自分ながら感心した。」
と揚々として頤髯搔い撫づれば、美人は只管媚を獻じ、
「ねえ貴下、私は何んの因果で弱小な土地に生れたんでせう。もう〳〵眞個に愛想が盡きたんですよ。」
へいげんは頷きて、
「さうありたい事だ。斯ういつちゃ卿の前だが、實に日本人は馬鹿さな。併し餘り不便だ。せめて一件の金時計を蔭ながら拜ましてやらうか。」
と衣兜を探りて、金光燦爛たる時計を出だし、恭しく隻手に捧げて遙に新開地に向ひ、陋み嘲けるごとき音調にて、
「そら此だ、此だ。」
途端に絶叫の聲あり、
「あれえ！」
只見れば美人は仰様に轉び、綠髮は砂に塗れて白き踵は天に朝せり。
太く喫驚せるへいげんは更に驚きぬ、手中の金時計は既に亡し。

中

「おい大助。」
卒然從者を顧みて立住まれる少年は、へいげん等を去ること數十歩ばかり後の方にありて、浪打際を散歩せるなり。父は小坪に柴門を閉ぢ、城市の喧塵を避けて、多日浩然の氣を養ふ何某とかやいへる子爵なり。其兒三郎年紀十七、才名同族を壓して、後來多望の麒麟兒なり。
隨ふ壯佼は南海の健兒栗山大助。
「若様何でございます。」
「我が謂つた通り、金時計は虚言だ。」
其聲既に怒を帶びたり。
「何うしてお解りになりました。」
「今二人で饒舌つてたらう。」
「私には解りませんが、頻に饒舌つてをりましたな。」
「應、解るまいと思つて人の聞くのも憚からず、英語ですつかり白狀した。つまり百圓を餌にして皆を釣つたのだ。遺失たも無いものだ、時計は現在持つてゐる。汝も我の謂ふことを肯かんで

草刈をやらうものなら、矢張日本人の馬鹿になるのだ。
血氣勃々たる大助は、斯くと聞くより扼腕して突立つ時、擦違ふ者あり、横合より礫と少年に抵觸る。啊呀といふ間に遁げて一間ばかり隔りぬ。
「掏摸だ！」
三郎が聲と共に大助は身を躍らして、無手と曲者の頸髮執つて曳僵し、微塵になれと頭上を亂打す。
「手暴くするな。」
と少年は大助を制して、更に極めて溫和なる調子にて、
「おい盜つたらう。」
掏摸は陳じ得ず、低頭して罪を謝し、拔取りたる懷中物を恐る〳〵捧げて踞まりつ、
「何卒お見逃しを願ひます。」
少年は打笑ひつゝ、
「何、突出しやせん。汝はなか〳〵熟練たものだ。」
「飛んだことをおつしやいます。」
「いや其手腕を見込んで、ちつと依賴があるのだ。」

大助は愕然として若樣の面を瞻りぬ。
「この懷中物もやらう。もつと欲くばもつと遣らう。依囑といふのは、そら彼處へ行く、あの、喃、」
とへいげんを指して、
「彼奴の持つてゐる時計を掏つてくれんか。」
其意を得ざる掏摸は、唯へい〳〵と應ふるのみ。
大助は驚きて、
「えゝ、若樣滅相な。」
「いや少し了簡があるのだ。」
掏摸は事も無げに領きて、
「ぢやあの金時計ですね。」
「汝知つてるのか。」
「そりやちやんと睨んであります。あんな品は盜つても、賣るのに六ケ敷いから見逃がして置くものの、盜らうと思やお茶の子でさあ。」
「いや太々しい野郎だなあ。」

と大助は呆然たり。
「汝も聞いたらう、あの長谷の草刈騒動を。」
「知つてる段ですか。」
三郎は告ぐるに實を以てすれば、
「へえあの毛唐が！」
と掏摸だに猶憤慨の色を表はせり。
「若様此奴は離すと、直に逃げてしまひますよ。」
「こう、情無いことを謂ひなさんな。私やこんなものでもね、日本が大の贔屓さ。何の赤髯、糞でも喰へだ。えゝ其金時計は直に強奪つて持つて來やす。」
斯りし後、へいげんは其の簪の花を汚され、剩へ掌中の珠を奪はれたるなり。

下

三郎は掏摸の奪ひたりし金時計を懐にしつ、健兒大助を從へて、其夕月下にへいげんの門を敲きぬ。
誰何せる門衛に、我は小坪の某なり、約束の時計を得たれば、敢て主公に呈らせむと來意を告

げ、應接室に入るに際して、執事は大助を見て三郎に向ひ、
「時計を御拾得の方は貴下ですな。此方は何用で入らつしやいました。」
三郎未だ答へざるに、大助は破鐘聲を揚げて、
「俺あ下男だ。若様の隨伴をして來たのだ。」
「そんなら供待でお控へなさい。」
と叱する如く窘めたり。大助は圓栗眼を睜きて、
「汝達の指圖は承けねえ。さあ若様御一所に入りませう。」
執事は之を遮りて、
「否なりません。應接室へは、用事のある客の外は、一切他人を入れませんのが、當家の家風でございます。」
へいげんは金時計を失ひて、忽ち散策の興覺め、悄々家に歸りて、燈下に愛妾と額を鳩めつゝ、其失策を悔い且つ悲しみ、怏々として樂まざりし。然るに突然珍客ありて、告ぐるに金時計を還さむ事を以つてせり。へいげんは快然愁眉を開きしが、省みれば衷に疚しきところ無きにあらず。設彼にして懸賞金百圓を請求せむか。我に豫め約あれば駟も及ばず、今將之を奈何せむ。
身を一室に潛めて、先づ其來客を窺へば、料らざりき紅顏の可憐兒、二十歳に滿たざる美少な

らむとは。這奴、小冠者何程の事あらむ。さはあれ從者に勇士の相あり。手足皆鐵、腕力想ふべしと、――へいげん漫に舌を捲き、乃ち執事をして大助を遠ざけしめむとしたるなり。

大助は敵の我を忌むを識りて、小主公の安否心許無く、猶推返して言はむとするを、三郎は遮りて、

「宜しい彼室で待つてな。」

「だつて若樣。」

「可いよ。」

と眼もて語れば、大助は强ふるを得ず、

「えゝ、何處で待つのだ。案内しろ。」

「靜にせんか、何といふ物言ひだ。」

と三郎は警めぬ。

執事は大助を彼方の一室へ案内し、硴と閉ざして立去りける跡に、大助は多時無事に苦みつ、

搔々としこを踏みて四壁を動かし、獅子の如き力聲を發して、滿腔の鋭氣を洩しながら、猶徒然に堪へざりけり。

應接室にては三郎――へいげんと卓子を隔てて相對し、談判今や正に闌なり。洋妾も傍に侍したり。

渠は得々としてへいげんの英語を通辯す。

此時三郎を輕んずる如く、

「一體貴下は何御用でお出でなすつたのです。拾つた物なら素直に返して、さつさとお歸りなすつたら可いぢやございませんか。」

「お默んなさい。時計と交換にお禮の百圓を戴きに來ました。」

「品物を拾つて、其を返すのに禮金を與れと、其方からおつしやる法はございますまい。」

「否、普通拾つて德義上御返し申すのなら、下さるたつて戴きません。然し今度のは――斯う謂つちや陋しい樣ですが――禮金が欲しさに働きましたので、表面は兎も角、謂はば貴下に雇はれたも同でございます。それに承れば、何か貧乏人を賑はすといふ樣な、難有い思召から出た事だと申しますが。」

と辯舌流るゝ如く、滔々として論じ來るに、へいげん等は這は案外とおもへる樣にて、

「それぢや御持參の時計を拜見いたしませう。」

「これです。」と懷より時計を出だして指示せば、

「どれ〳〵。」と取らむとするを然は爲せず、三郎は莞爾として、

「違へば他に遺失人を探します。貴下のなら百圓下さいまし。」

彼方もさる者詭辯を構へて、
「彼とは違ひますが、矢張私の時計で、其は先刻掏摸に盜られた品だが。怪しからん、何處でお拾ひなすつた。」と暴らかに詰れば、三郎少しも騷がず、
「そんなら掏摸が遺失たのでせう。何しろ私は御門外の一町以内で拾つて來ました。」
へいげんは大喝して、
「小僧、汝は掏摸だ。」
「さういふ者が騙拐だ。」
「何を。」と眼を瞋して、礫と卓子を打てば、三郎は自若として、
「ちと仔細があつて、貴下が人は知るまいと思つて居る事を、私は能く知つてをります。文明國の御方にも似合はない、名譽といふことを御存じがありませんか。私は寧ろ貴下の御爲を思つて計らふのですが、何うでございます。」
と朱唇大に氣焰を吐けば、祕密の既に露れたるに心着きて、一身の信用地に委せむことを恐るれども、守錢奴は意を決する能はず。辭窮して、
「蒸暑い晩だ。」
とへいげんは窓に立寄りて海を望み、忽ち愕然として退りぬ。

「へいげん殺せッ。」
と叫ぶものあり。續いて起る吶喊の聲。
月は中天にありて一條の金蛇波上に馳する處、唯見る十數艘の漁船あり。篝を焚き、舷を鳴して、眼下近く漕ぎ寄せたり。こは此風説早くも聞えて、赤髯奴の謫計に憤激せる草刈夥間が、三郎の吉左右を待つ間、示威運動を行ふなり。大助之を見て地蹈鞴を踏みて狂喜し、欄干に片足懸けて半身を乘出だしつ。
「も一番やれ！」
と大音聲に呼ばはれば、舟なる壯佼聲を揃へて、
「へいげん殺せ。」と絶叫す。
洋妾は耳を蔽ひて卓子に俯し、へいげんは椅子に凭りて戰きぬ。
三郎は欣然として、
「日本人の馬鹿が、誑された口惜さに貴下を殺すといふ騷動です。はッはッ馬鹿な奴等だ。」
へいげんは色を失して、
「私、私、何を欺きました。」
「濱で御自分がおつしやつた言をお忘れですか。」

へいげんは或は呆れ、或は愕き、瞬もせで三郎の顔を瞻りたりしが、良有りて首を低れて、
「決して欺きません、證據がございまする。」
顏色土の如く恐怖せる洋妾を勵まして、直ちに齎らしめたる金貨百圓を、三郎の前に差出せば、三郎は員を檢して之を納め、時計を返附して應接室を立出で、待構へたる從者を呼べば、聲に應じて大助猛然と顯れたり。
三郎は笑ましげに、
「此を皆に分けて遣れ。」
大助は金貨を捧げて、高く示威運動艦隊に示しつゝ、
「衆見ろ、髯から取つた此百圓を、若樣が大勢に分けてやるとおつしやる。」
其聲未だ訖らざるに、哄と興る歡呼の聲は天に轟き、狂喜の舞は浪を揚げて、船も覆らむずばかりなりし。

大和心

一

去三月二日、晩晴馬を驅り、鞭を鳴し、石川縣金澤市なる兼六園を横截りて、金澤神社に詣づる一個の丈高き外國人あり。

其の名をえち・すたるでんと呼びて、其の職を審にせざれども、目下該兼六園の裏手なる小立野の館に寓せり。

すたるでんは鳥居の前に駒を駐めて、佶と境内を視めたりしが、車馬乘入るべからず云々の掲示を見るより、冷笑一番して、意あり氣に打頷き、駒の頭を立直して、衝と境内へ乘入れたり。

社務所に控へたる神官長谷部何某は、

待て！と叫びて、跣足のまゝに飛出だし、身の危きを顧みず、外夷の前途を塞がむとせり。

爾時すたるでんは勵聲鞭打馬を叱して、あはや神官を鰭爪に懸けむず勢を示すにぞ、避けむとしつゝ石に躓き、仰様に僵れける。

すたるでんは駒を疾めて、起き上らで苦み呻く神官を流眄にかけ、快然として髯を撫し、

「はるらあ！はるらあ！はるらあ！」と駈去りけり。

長谷部は恥且憤りて、遂に其職を辭するに到りぬ。蓋し外夷の爲に靈地を蹂躙されし過失を、氏子に謝せむとの、憐むべき衷情に出でしなり。如何となれば、渠は社の神聖を保護して、神の稜威を傷けざるべく、氏子に推選されし身なればなり。

抑も金澤神社は菅原道眞公を祭れる縣社にして、其名の如く地方一圓の氏神なり。然れば金城に血ある者、すたるでんの所業を以て、各自の面目を汚せりと爲し、憤慨すること一方ならず、罪を地方官に訴へむか、治外法權の制あるを奈何せむ、如かず之を道義に責めて、社會の制裁を行はむにはと、北國の新聞は幾多の同胞を代表して、紙上に喋々其罪を論ぜり。

乃ちすたるでんは一書を裁して、新聞に投じて辯じて曰く。

過日拙者が馬を金澤神社の境内に乘入れしは、兼六園より小立野に抵る最近の道を取りたるにて候、尤も其地の神聖なることは拙者更に之を存ぜず、掲示とても貴國の文字を以て認められ候へば、拙者が其意を諒し能はざるは、恰も貴下等がぺるしや語に對すると一般に候、既に禁令を知らず、然る上は往來を行くに其遠近を擇ぶも、拙者の心次第かと存じ候、且又奔馬の前途を塞ぐは、狂人の所爲に有之べく、神官のことの如きは拙者の關はらざる儀に御座候、一體貴國の風習かは知らず候へども、斯ることを社會の耳

目たる新聞紙上に云々して、他人の名譽を傷くるは、最賤むべき所業として、我故國などにても甚だ擯斥いたす事に候、以上。

曲庇回護を極めたりと雖も、説得て不當ならず、之を奈何とも爲がたくて、竟に泣寢入になりぬ。是に於て乎すたるでんは、ペケ、日本人與し易しとなし、金城十萬の士女を眼下に見て、道を行くに必ず騎す、其馬上なる長軀は、壯麗なる縣知事閣下の門の屋根よりも高し、誰か之を憎まざらむ、ともに天を戴くを恥づといへども、また爲す可きなきなり。

人皆之を憾とす、こゝに最も憾とするものあり。人皆激す、こゝに最も激する者あり。そは過日すたるでんが神明を凌せし處に會して、眼前渠が亡狀を目擊せし、陸軍少尉鶴岡何某の長子にて、年紀纔に十二、健兒といふなる少年なり。

二

兒心にも無念に堪へず、恰も其身面辱を蒙りたらむ如く、悶々悒々として、殆ど器械的に道を行きけるが、知らず默考の手は何等の思慮を捉へ得たるか、路程三町脱兎の如く家に歸りぬ。母なる人は居間にありて、縫物に餘念あらざりしが、襖の開く音の暴らかなるに駭きて、顏を擧ぐれば、

「母様、唯今。」

と健兒が會釋抛つ如し。母は眉を顰めて、

「健兒、何ですね、靜におしなさい。」

とたしなめらるゝを耳にも入れず、提鞄を投捨てて姉の書齋へ馳行きぬ。

姉は名を雪野と呼びて、齡正に十七歲、容姿端麗、性情頗る溫雅なり。今しも畫絹を展べて、孃が唯一の嗜好なる畫筆を揮ひ、既に花鳥の半を畫けり。健兒は姉の面前に踞して、洋服の釦を外しつゝ、

「姉様、僕は少し御願があるが、聞いておくんな。」

雪野は筆を遏めて、

「歸宅早々御挨拶もしないで、御行儀の惡いことね、」

「唯、唯今歸りました。つい氣が急いたもんだからさ。さあお辭儀をしたから、肯いておくれ、ねえ。」

雪野は微笑みて、

「大層恩に被せたお辭儀ねえ、健ちやんお願とは何？」

「お易い御用さ、畫を描いて貰ひたいのだよ。」

「如何な畫なの？」
「西洋人を大きく、お願ひだ。」
雪野は意外なる註文に異みて、
「妙な御誂だねえ。」
少年は眞面目に、
「否、些も妙では無い。」
「ようござんす、後で描いて進げませう。」
と再び筆を把らむとすれば、少年は其眉を搖りて、
「否だあ、今描いて欲しいんだ。」
と甘ゆる狀なるに、姉は心動けど、戯れていふ。
「一つ物を描上げてしまはないで、また外のものを描くと、畫の神樣の罰が中るもの。」
少年は口の裡にて、
「何か高慢なことを謂つてらあ、」
姉は直に聞咎めて、
「誰が描いて遣るものか。」

「ふッ、疾い耳だ。」
「あゝ何とでもおいひなさい、描いちや進げないから。」
健兒は窮して天窓を搔き、
「謝罪つた。何卒後生だから畫いて下さい。」
雪野は聞えぬ振して、運筆に餘念無き體を粧へば、少年は少しく憤れて、
「姉樣！」と縋りつく。
「あら、手が震へるよ、酷いことねえ。」
と優しく睨む雪野の膝を搖動かし、
「描いておくれつてば、よう、よう姉樣！」
、と鼻を鳴す意氣地無さよ、殆ど五六歳の嬰兒に肖たり。
雪野は之を持餘して、
「由、お由や、ちよいと、」と下婢を呼びぬ。
「唯々、」と由は直に健兒の不斷着を持來りて、
「若樣、御召換遊ばせ。またお姉樣に御無理をおつしやつていらつしやるんでございませう。」
問はれて少年は頭を掉るのみ。物をもいはで不平の色あり。雪野は傍より、

「由や其處にある唐紙を出しておくれ。」
姉の言葉に心を讀みて、少年は遽に勇立ち、
「ナニ、僕が出すよ。姉様描いてくれるのかい。」
「しやうが無いことね。」
少年は手を拍きて、
「おつと旨い。南無姉様大明神だ。眞個に姉様は畫が上手つちやあない。」
「巧くいつてるよ、憎らしい。」
と下婢を顧みて嫣然たり。
斯くて雪野は唐紙を展げ、幾多の工夫を費すが如き面色なりしが、
「何様風に描かうねえ。」
「大きく描いて頂戴な。」
「大きくは解つたが何いふ風が可からう不知。」
下婢は喙を容れて、
「お嬢様、何をお描き遊ばします。」
「西洋人さ。」

「へゝえ毛唐ですか。一體毛唐なんていひます者は、高慢くさい、生意氣ですから、憎らしい顏にして、而して貴方掏摸の様な眼色に遊ばしたが可うございますよ。ねえ、若様。」
「あゝ左様さ。」
「さう、あのお内の前をちよい〳〵通ります、脊の高い西洋人ね。」
「おゝすたるでんとかいふ。」
少年は調子はづれの大音にて、
「それ〳〵。彼奴、彼奴、彼奴、になりや難有い。」
「では然しよう。」
淋漓として墨を落せば、赤髯にして碧眼の醜虜、一氣を呵して忽ち成る。
少年は欣々然として畫を携へ、己が書齋に駈行きけるが、良ありて室内物騒がしく、健兒が地蹈韜踏む音、罵り叫ぶ聲頻なり。雪野は太く訝りて、その戸の隙より覬ふに、床の間の壁に、向に描きし外夷の畫像を張りたるが、唐紙一枚を染めたれば、大人の立てる脊丈に讓らず、少年は其像に面して、顱卷キリゝと肱を張り、室の中央に突立てる手中には、一口の短刀、紫電閃々たり。

三

少年は外に人の覬ふを知らず、刀を構へて聲を勵まし、「汝、毛唐人！ よくも天神樣を粗末にして、神官を蹴飛ばしたな。無禮な奴だ。おい日本には弱蟲ばかり居やせんぞ。鶴岡健兒が成敗して遣る。」

と躍蒐りて壁と共に畫像を斬らむとする時突然姉は背後より、

「健ちやんや、何をするのだね。刀なんか拔いて危險ぢやないか。あれまあ健ちやん。」

と抱窘むれば、少年は心激して色を變じ、

「毛唐の最屓なんかすると、姉樣から先へ打斬るぞ。」

「おほゝ、恐怖いこと。まあ可いから刀を放して、何いふ次第だかお聞かせな。」

柔かき聲と優しき眼色は、頓に少年の心を融きぬ。渠は慨然として、金澤神社に於けるすたるでんが所爲を物語り、

「ねえ、姉樣失敬ぢやないか。僕が憤るのも至理だらう。實に失敬極まる奴だ。」

此に於て乎少年が洋人の畫像を註文せし意味も知られたり。渠はそをもて醜虜に擬し、斬殺を眞似て聊か胸中の悶を遣らむと欲せしなり。未來の賢母もまた學びて國體の如何を解せり。殊に

國家の干城たる勇士の女、溫柔の中自ら凛々の氣無きにあらず、雪野も憮然として、

「眞個に失敬だつちやあ無い。よく腹をお立ちだ。併し健ちやん、雞を割くに牛刀を用ゐずと謂ふことがある、こんなものを斬るのに、父上樣が大事の魂の刀なんか持ち出しては、勿體なくて罰が中ります。こんな奴は犬にでも啖はせるが可いよ。」

斯くて雪野は健兒をして父の居間に刀を返さしめ、件の畫像を手にして、兩々相携へて庭に出でたり。二人の姿を見るより、歡喜の聲を揚げて、旋風の如く飛來たるは、飛龍と名る飼犬なり。大さ恰も犢の如し。其這へる背は立てる少年が胸に等し。奇骨稜々、身は瘦せて龍の如く、馳すれば必ず一陣の風ありて颯然人を襲ふ。

雪野は人にものいふ如く、

「同伴においで、おまへに用があるから。」

斯く謂ひつゝ少年と倶に先に立てば、飛龍は命のまゝにのさ〳〵と尾せり。築山一つ彼方へ行けば爰に一株の老松一拱に餘れるあり。雪野は畫像を展き、用意せる留針を以て、之を松の幹に掲ぐれば、忽爾として出現せる洋夷の態の目馴れざるに、飛龍は猛然として吠出だせり。雪野は莞爾として健兒を顧み、

「ね、之に啖して遣るが可い、さあ何でも健ちやんの勝手にお爲。」

と其身は傍に引退りて、健兒が爲む様を見むとす。
少年は雀躍して、
「もつと遣れ、飛附いて啖ひつけ、遣つけろ。」
と力足踏鳴して飛龍を勵ませば、犬も一段の氣競を增して吠懸りぬ。されども敢て嚙まむとせざりき。少年は、何等の手段を以て犬をして外夷を嚙ましめむかと、姑く思案せしが、やがて、母屋の方へ馳行きて、小さき肉片を持來り、姉に示して、
「そら、牛肉を持つて來た。これをね、斯うすると、そらこれで可いだらう。」
と未で語りも果てざるに、飛龍は電の如く飛付きて、肉を懸けたる所、洋夷の咽喉を深く嚙めり。快哉！鋭牙能く敵を斃すに足る。
健兒は手を拍ちて懽び、更に一臠の肉を出だして、再び畫像の咽喉に插めば、飛龍は其肉を食はむとて、急所を嚙むこと舊の如し。少年は手の舞ひ足の踏む所を知らず、なほ繰返して三たびせむとする時玄關の方に聲高く、
「御歸館！」
「あれ父上様のお歸！」
と雪野は少年を促しぬ、飛龍は一文字に飛行けり。

斯くて其日は已みけるが健兒は同一手段に因りて、怪しき小楠公を學ぶもの三日にして措かず。五日にして倦まず。
飛龍が鋭爪利牙に懸りて、洋夷の畫像の寸斷し去らるゝ時は、雪野は喜びて更に描く、措くに馴れて筆亦妙に入りぬ。
爾く同胞心を合せて、主には柔順にして敵には慓悍なる飛龍を役して、洋夷の咽喉を噬ましむること、日を追ひて旬餘に及べり。

四

金澤の最高燥なる處に天福の勝地あり。鶴間谿といふ。丘は小立野の南端を以て始まり、宛然新月の形をなして、裾廣がりに、小坂村の稻田に到りて竟る。此間螺の如き坂となり洞の如き谷となる、老杉群茂して全區を包み、木の下蔭は常に闇なり。谿然樹梢に天地闢けて、金澤の市街は一望の下にあり。丘の頂を行く者恰も谿間に生茂れる杉の梢を傳ふが如く見ゆるを以て、散策の人活きながら天狗に化するかと、憚りて遊ぶもの稀なれども、僻地は多くは異物を產し、頗る異花奇草に富む。
健兒は一日校友と共に植物採集の爲この魔界に行けり。家を出でしは午後なりき。彼處に至る

路程一里、刻は三時に垂んたり。

輕裝せる健脚の少年等の茂林の間に出沒して、散亂に獲物を求り、此彼各々其所在を知らず。但健兒の來る處去る處、必ず一陣の風ありて伴ふは、彼の飛龍の從ひ來りて、縱横疾驅常に少年を導くなりき。

今や飛龍は坂を上りつ、健兒もまた攀ぢつ。時に颯然風起りて、丘の上より一個の帽の翩々として落來るありて健兒の足許に留まりぬ。持主は誰ぞ、と歩を留めて見上たる坂の盡くる處、丘の頂に立顯れたる漢あり。白面朱髯の碧眼兒、卽ち健兒が恨を忘れざるすたるでん是なり。

此の丘の頂より金澤の大半を瞰下し得るよしは既に說ける小立野の界隈に一落をなして寓居せる洋夷等の、何等か爲にする處あるものの如く、時々此處に來りては柳暗花明の十萬戸を脚下に一望して、鉛筆を以て何やらむ手帳に寫すこと、渠すたるでんに限らざりき。

すたるでんは今日もまた鶴間谿に來りて、式の如き振舞をなしたりしが、俯向きたる天窓の帽を吹取られて、慌だしく身を起せる時、爾く少年と面を合せたるなり。

健兒はすたるでんありと見て、一心たゞ過般の記憶に占領され、全幅の血氣は獨り其兩眼に鍾まりて、洋夷を凝視したりしに、丘頭なるすたるでんは少年を輕んじ、賤むが如き態度もて、右の手を高く昂げつゝ、傲然として呼ばはりぬ。

「小僧、其帽を拾つて來い。」

聞くより健兒は滿面朱を灌ぎて、件の帽を蹴飛ばせば、ころ〳〵と轉びて、谷底深く陷りたり。心最も激したるは色に露はれて、すたるでんはものをも謂はで疾風の如く飛來りぬ。鶴岡健兒は悚然ともせず、すたるでんは直ちに少年に咫尺して護身の短銃を差向けぬ。

五

午後九時半頃金澤病院の受付に入來る一個の美人、「一寸、外科でございますが、御診察を、」と急しげに訪なへども受附は少しも急がず、丁寧に住所を問ひ、職を問ひ、遂に其の姓名を聞くに及びて、美人は口籠りつゝ、何某と答へたり。受附の老夫は眼鏡越に其顏を視めて、

「男の名ですな。」

「唯私ではございません。」

「然でせう、なるほど、而してお年紀は？」

「明治十六年五月生。」

「はゝあ今年十二歲だな。

と呟きつゝ帳簿に控へて、

「さあ宜しい、ずつとおいでなさい。」
美人は玄關に向ひ、「此方へ」と命じて前に立てば、後より馬丁體の壯佼葛籠を擔いで外科室の方へ赴きぬ。
小使は眼を睜りて、「おや棺桶を舁ぎ込むぜ。こりや病院の開闢以來だ。」
當夜宿直せる外科醫は、村上千吉といふ若手の利者なり。此頃醫學校を卒業して、新たに病院の助手となれる賣出しの新顏にて、今宵は醫籍に名を揭げしより、渠がはじめての當直なりき。
村上は受附より通じ越せる患者名簿を打視めて、「急病人で外科といへば、怪我をしたに違ひない。待て、大手腕を揮へる樣な、大きな療治だと面白いが、」と心は勇めども自から胸中穩ならざるあり。されども悠然として椅子に凭れり。
外科室の戸を排して、男と想へりし患者ならで、年紀も容貌も月の如き美人恰も天上より落來たりし感あり。其が背後より差入れたる葛籠をば、室の眞中に据ゑて、壯佼は直ちに戸外に去りぬ。
村上は椅子を離れて、しとやかに立禮し、
「何うなすつた。」と葛籠に眼を注ぎ、
「これですか、患者は？」

と訝かしげに問ひぬ。美人は極めて低聲にて、
「唯、此の中に居りますので。」
「疾く容體を見せなさい。」
「唯、唯今あのウ少し、血で汚らはしうございますけれど、どうぞ御手當を願ひたう存じます。實は他所で傷を負けてまゐつたのでございますが、重傷で呼吸も爲得ません。何卒してお助け遊ばして下さいまし。尤も入費などはいくら懸りましても構ひません。」
仔細あるべき患者と思へば、村上は急立てて、
「何でも可いから、疾く診て進げませう。蓋をお取んなさい。こんな取扱ひをしちやあ亂暴だ。」
と蓋を刎除けて屹と見たりしが、愕然として忽ち色を變へぬ。
「駄目です。爲やうがありません、これぢやあ。」
と素氣なく言放てば、心弱き美人は涙ぐみて、聲も哀に、
「でも念晴しのためですから何でも手當を遊ばして下さい。何樣に費用が懸りましても構ひませんから。」
村上は冷かに、
「私は其樣ことに關りません。かういふものは此の病院では取扱ひをしないんです。」

美人は執念く推返して、
「誠に可哀相でなりません。此方の病院で療治をして頂いて、其れでいけなければ斷念めますが、他所で死んでは思切りがございませんから。」
と手巾を以て眼を蔽ひぬ。忽ち耳邊に聲ありて、醫は仁術なりと囁くあるに到りて、村上は漸く肯ぜり。
「よろしい、施術しませう。」

六

外科室の戸の密閉さるゝと同時に、玄關の戸は開かれたり。戸板に乘れる患者一人、附添の紳士は受附に向ひて、
「外科です、本市小立野……番地、えち・すたるでん氏、宜しいか。」
と慌だしく外科部の患者溜へ行きぬ。
看護婦は告ぐるに先患者の手術未だ了らざるを以てして、濫に外科室に入らしめず。患者すたるでん如何にして傷を蒙りけむ、白布を以て幾重にも咽喉を絡ひたる上に、鮮血の染みたるが、容體極めて危篤に見えたり。

彼は苦悶の聲を絶たず、羊の如く唸りたりしが、斯くある内に漸々重きを加へて、分秒逐次に弱り行くにや、呻吟の聲漸く細れり。
附添の紳士は靜坐に堪へず、推して外科室の戸を排し、周章惑へる音調にて、
「餘程危險なのです。最早死にさうです。どうぞお疾く願ひたい。」
と闖入すれば、白面朱唇なる年少の醫師村上千吉、肅然として手術臺に向ひ、右手にメスを取り、左手にピンセットを握り、心を盡し氣を籠めて、患部の手術をなしつゝも、一心たゞ醫あるを知つて我を忘るゝ時、容易に犯すべからざる威嚴あり。
而して手術臺なる患者は如何？　男か、女か、老か、少か、渠は一見して未曾有の奇觀に驚けり。臺上のものは犢大にして瘠せたる犬、半身血に染みて横たはれるが、看護婦の爲に麻醉劑を投ぜられて、施術の間身動きもせで居たりけり。
是卽飛龍なり。其の傍に愁然と面を蔽ひて立てるは、健兒が姉の雪野なり。前段鶴間谿に於てせる一條の活劇は、終に血を以て終りしなり。すたるでんが短銃を以て少年に迫りし時、飛龍は咄嗟にすたるでんに飛蒐り、がばと其の咽喉を噬破りぬ。
斯くて飛龍は洋夷を僵せり。同時に彈丸は飛龍を僵せり。
然して、夜に入りて金澤病院の外科室に不思議の患者顯れたるなり。

すたるでんも次でこゝに來れるなりき。

さてもすたるでんの附添は手術臺の患者の犬なるに呆れ果てて、唯呆然として眼を睜りぬ。村上千吉は傍目も觸らで疵口より切開し始め、左の季肋部、第二腰椎の上緣に一致したる腋窩より、腸骨節に結びたる腺上に抵りて、こゝに深さ大略半センチメエトルを射たる豆大の彈丸一個を認め、手疾く之を拔去れり。

附添は走寄りて、

「私の方の負傷を急いで下さい。今少時如彼して措くと、呼吸が絕えるかも知れません。」

村上はスポイトを手にして、

「未だ此が濟まないです。」

と冷やかに言ふを聞きもあへず、

「犬が何です、獸ぢやアありませんか。私の方のは人間です。もし何だと病院の信用に關りますぞ。」

「お默んなさい。醫師が責任を負つて手術をする上は、犬だつて猫だつて豫後の注意に異はないです。」

之に返すべき言も無く、渠は悄乎として頭を垂れしが、忍やかに一束の紙幣を出だして、村上

の袖の下より、

「もし人助けです。宜しく御取計ひを願ひます。」

と竊に鼻を伺ひぬ。醫師はます〳〵冷々然。

「藥價や施術料は受附で扱ひます。」

石炭酸にて防腐を施し、十針疵口を縫合せ、やがて看護婦と共に繃帶をなし畢んぬ。

時に廊下に跫音聞えて、駈來る四五人の少年あり。渠等は飛龍を見舞はむとて、健兒に從ひ來れるなり。健兒は眞先に駈入りて、

「姉樣、犬は何樣だい。」

「おゝ、健ちやんか、今御療治が濟んだところだよ。」

健兒は寂として橫たはれる飛龍に頰擦して、

「むゝ可哀相に、痛いか、痛くつても我慢して早く快くなつてくれよ。お前はな、毛唐征伐の大將だ。僕の朋達がお前に遣つてくれつて、肉やら菓子やら持つて來たのが、內に山ほど積んであるぞ。嬉しいだらう、な、なあ。」

と其の頭を撫でんとすれば。

村上は嚴然として、

「あゝ、今觸つちやあ不可ません。看護婦――次の番を。」

すたるでんの附添は、飛ぶが如く患者溜に引返し、戸板のまゝ人夫に舁かして、横臥せる危篤患者を村上に齎らせり。

居合せたる少年等は其すたるでんなるを知りて聲を揃へ、

「それ見たか、毛唐め！」

「わあい、わあい〳〵、様あ見ろ。」

と口々に罵りつ。更に聲か高めて、

「飛龍萬歳！飛龍萬歳！」

ころゝほるむ消散の期か、飛龍は才に覺め來りて、徐に前足を踏延ばせば、少年等は拍手喝采して、飛龍萬歳と哄と喚ぶ。

「あれ、お靜になさいましよ、」

と看護婦は窘めつゝ、今すたるでんが疵を檢せる村上の氣色を見て、其命令を待てり。先刻より患部を右瞻左瞻たる村上は、此時、「あゝ」と嘆息して、傍なる椅子に仰倚りつゝ愁然として附添を顧み、

「難しいです、所詮いけますまい。」

噫、神明は竟に村上千吉を以て、この奴に死を宣告したりけり。

豫備兵

一

體を斜に机に凭りて、眼を半眼に塞ぎつゝ、頰杖支きたるは、醫學生風間清澄なり。其容の美しく瘦たる、夕暮の一本柳風靜に、其眼清しく秋の水を湛へて、其腕は纖弱に、玉をや骨とすらむと見えたるが、但其面色の沈鬱なる、顰める眉の間より限無き胸中の苦悶を漏して、見向所に慰藉を求めつゝ、毎に得ざるを憤るに似たり。相對ひたる老婦の顔は火の如く熱して、手なる長煙管は、其語る節々を強めむが爲に、屢々疊を拍てり。

「ねえお前、恐多いことだけれども、貴き御方樣方の御心をお察し申上げた日には、數にも足りない私たちのやうな老朽だッて、なか〳〵安閑としちや居られまいぢやないかね。然うぢやないか。」

清澄は展げたる解剖書を撫でて、

「然やうさ。」と應へたり。

此答辭の意外に簡略なるを呆れたる老婦は、

「然やうさ？」と眼を睜りて、

「然やうさぢや無いよ。近い所が、此旅團の兵士さんだ、御覽なさい、此まあ恐しい土用の炎熱に、四五貫もあらうといふ背嚢を擔いで、鐵砲を持つてさ、おまけに戎裝が冬服だ、聞いてさへ酷からうぢやないか。それで以てお前日がな一日演習だ、行軍だと立働いて、夜も綽々寢られるのぢやないとさ。眞箇その苦勞といふものは、尋常大抵の事ぢやありやしないよ。」

「それは兵士たるものの義務ですもの。」

「何え？」と老婦は思はず膝を進めぬ。

「然云へば其限で、實も蓋もありはしない。それぢやお前冥利が惡いよ、人情が無いよ。考へて御覽な、兵士だつて、お前始め私達だつて、同一日本國の民だらう。ねえ其れに差違無い。同一日本國民でありながら、可いかい、お聞きよ、一方はそれほど苦勞をしてゐるのに、此方は朝寢、夕涼で、樂をしてゐちや、お前濟むまいぢやないかね。」

「然ですねえ。」と優柔く應ふる聲の下より、

「然とも！」と老婦は齒痒さに耐へかねて一喝せり。然れども清澄は騷げる色無く、その沈鬱なる面は仍纖弱なる手に支へられて、閑に書卷の上に臨めり。

老婦の聲は稍怒氣を帶びたり。

「私はね、これでもね、國民の義務ぐらゐは知つてゐるのさ。女子でこそあれ、齡は老つても舊は武士の妻だ。どうぞ出師の隨行をして、飯炊なり、洗濯なり、看病なり、何なり身に稱つた御用を勤めたい、と然う念つてゐるのだよ。眞箇にもう男子に生れて來なかつたのが忌々しくて、忌々しくて。」

「實に殊勝な御志で。」

清澄の挨拶は例の如く簡略にして冷淡なりき。老婦は益々悍立ちて、

「殊勝とも、私の志は殊勝さ！　私ばかりぢや無いよ、日本國民の志は悉皆此通り殊勝さ！殊勝でない者の令見にもなる事だから、私は朝鮮へ行かうと思ふよ。」

此結末の一言は極めて怪しく、怖しく、大いなる響をなして清澄の耳を貫けり。渠は俄に夢の覺めて惑へる氣色なる面を捩向けて、屹と老婦を視たるのみ、頓には言も出でざりき。

老勇婦の意氣は愈々昂りて、長煙管は鞭の如く揮はれぬ。

「朝鮮へ行かうよ。誰の爲ぢや無し、御國の爲だ。（君が代を思ふ心の一筋に、吾身ありとも思はざりけり）これは梅田源次郎の歌さ。誰しも這樣無くて如何するものか。それも平生とは違つて、かういふ時節に、女子だらうが、老者だらうが、盡せるだけの事は盡さなくつちや道が立たない。私は朝鮮へ行く。早速願を出さうよ。」

疾風砂を倦くばかりの勢にて、勇み勇んで說來る時、

「從軍は許されんです。」

「許されない？何故。」

老婦は太甚く激して、あはや、掴み蒐らむずばかりなりき。

「何故でも陸軍が許さんですから爲樣がありません。」

「何、能く事情を曰つて、斷つて願つたら、許可の出ないといふことがあるものか。」

清澄は嘲らむやうに微笑を含みて、

「一婦人の爲に法令を枉げるやうな、そんな陸軍ではありません。」

此一言の爲に、老婦は言ふ可からざる苦痛と、忍ぶ可からざる怨恨とを感じて、異樣に輝ける眼は姑く清澄を睨みて凝りたる如くなりしが、

「何が、那麼樣陸軍さ。一婦人の爲に如何したのさ。一婦人だなんぞと甚くお輕蔑だね。設ひ一婦人でも五十人や百人の男子に劣けはしないよ。お前なんぞは其でも男子なのかい、えゝ清澄。男子なら男子らしくもツと屹々しておくれな。机にばかり齧着いて、蒼い顏をしてゐる時節ぢやないのだよ。支那と戰爭が始つてゐるのだよ。お前は一體まあ如何いふ氣なんだらう。お前だつて武士の子ぢやないか。」

「武士の子なら如何するのですか。」
「如何するものかね。それしきの事がお前には解らないのかねえ。眞箇にもう、呆れて物が言へない。」
「解つてゐます、能く解つてゐます。解つてゐますから私は、貴方に限らず、世間の者が妄に逸つて騒ぐのが、馬鹿々々しくてならんのです。」
「それはお互さ。」と老婦は鼻頭に笑を浮べて、
「私始め世間の者はねえ、お前のやうに貴さうに落着拂つてゐる人物を、腰拔だと云つてるわね。なるほどお前は學問をして、理窟の明い人なのだから、私のやうな者の爲る事は、どんなにか馬鹿馬鹿しからうとも。いくら馬鹿々々しくつても、私には私の了簡といふものがあつて、善いと念やこそ爲るのだから、決してもう構つておくれで莫い。日本の教ではね、國の爲、君の爲には一命をも捨てるといふのが道と立ててあるのさ。だから私も其教を守るのは善い事と念つて、何も爲るのだ。其がお前には馬鹿々々しい！　大方西洋の教では、國より君より自分の體が大事だとでもしてあるのだらうよ。私は何處までも敷島の大和心だから、然う思つておくれ。これはどうも御勉强の邪魔をしましたね。まあ緩と晝寢でもおしなさい。」
老婦は衝と起てり。清澄は會釋して頷きぬ。

怒氣未だ斂らざる足踏は箱梯子を轟かして、老勇婦は二階を降れり。
「いや、然し勝氣な女だ。」
と清澄はやをら机に推直り、再び書を把りて未だ一頁を讀まざるに、箱梯子は怒れる足を踏みしよりも轟きて、猛然と顯れたる書生あり。片手に新聞の號外を掴み、浴衣の褄を毛脛露に褰げて突立ち、
「風間、敵はいよ〳〵平壤に聚つた。其の數大凡五萬。えゝおい、本物になつて來たぜ。」
徐に見返りたる清澄は眉を顰めて、
「えゝ、何だな、騒々しい。」
「騒々しいのは世間一般だ。此樣子ぢや戰爭は一寸は息まんぜ。」
「大きにお世話だ。君は又恁麼いふのだか、始終號外を持つて飛んで歩行いてゐるぢやないか。」
「敵愾心勃々として禁ずる能はずだ。」
「當分敵愾心を制して勉强心にしたら奈何だね。」
「お株だ！目下の形勢は筆を投じて戎軒を事とするといふ場合ぢやないか。えゝ君、國民の義務だよ。些とは軍事にも着目するが可いぜ。」
說了つて書生は一睨せり。清澄は其顏を視つゝ、

「號外將軍！」

二

明治二十七年七月、牙山の捷報新に到りて、平壤の戰雲未だ亂れず、義勇兵に對する令未だ下らざる前なりき。我忠勇義烈なる國民は、拔刀隊或は義勇團を組織して所々に蹶起せるほどに、名古屋第三師團の分營を置かれたる石川縣下金澤にも、血氣の輩凡一百名の同盟より、這般の團體は成立ちたり。

その首唱者とも謂ふべきは、同市某町に住める舊藩士の老寡婦風間直なり。

直は年紀五十三、家富むといふにはあらねど、一家の口を糊して餘裕あるべき田畑を有たれば、自ら之を耕して、其勁健なること、をさ〳〵壯者に讓らず。

髮黑く、顏赬く、骨逞しく肉肥えて、あはれ小兵の力士とも見つべく、膂力の强さは一俵の米を扛ぐると謂へり。

常に筒袖の單衣の釦鎖なるを着けて、帶を用ゐず。廣緣の麥稈帽子を戴き、冷飯草履を穿きて、揚々として道を行く。正是傾城水滸傳中の人物なりと、遇ふ者の目を欹てざるはあらざりけり。

然れば金澤市中に此奇女子を知らざる者なく、譬へば往來馴れたる林の中に異形の菌忽然と

生出でたるを、人は唯呆れ、唯驚き、何日如何して這箇物は生出でたりけむとばかり、善か、惡か、毒か、藥か、辨く方も無く、奇なりとして望見るのみ。然らぬだに名物の奇女子は、彌が上に其名を聲かす事をこそ爲出したれ。

老勇婦は健氣にも其言を實行せり。渠は清澄を捉へて腰拔なりと罵り、我は武士の妻なりと叫びしが、果せる哉、敷島の大和心の姥櫻は、愛兒の急に赴くが如く、衰老の身を以て從軍をば願出でたりけり。

此志は達し得ざりしかど、直は飽くまで初一念を貫かむと決して、所有の田地を賣拂ひぬ。御國の爲には一命を捐てむずとは、渠が平素の覺悟なり。田地は渠の命の亞に位するものなるべし。此を以て彼に換ふ、宜なり、直が敝れたる渠の草履を棄つるよりも心易げに產を傾けたる。

かくして直は二百餘金を得つ。卽日之を擧げて恤兵部に獻じたり。

從軍の願と、獻金の志とは、忽ち此異形の菌をして、珍重措く能はざる千歲の靈芝たらしめたる道士の敎なりき。

噫、風間直子！渠は自ら武士の妻と誇れど、渠は實に武士の母たるべきなり。誰そ、金澤十餘萬の市民をして、如何して國に報じ、如何して君に盡さむかを敎へたるは、這箇五十三歲の老媼ならずや。

目敏き老女の爲に眠を覺されし市下の新聞社は、二號文字に特筆大書して此義擧を稱贊すれば、市民は忽ち同じて、國民の龜鑑よ、未曾有の女丈夫よと、名聲嘖然として石川縣下に揚りぬ。

之が爲に刺戟せられたる富豪の輩は慌て忙き、土藏を開き、弗箱を撈り、我劣らじと恤兵せり。

三

却說或時は壯士となり、或時は强請となり、一變して演說家となり、首尾好くばその頃の巡査ともなりぬ可き浮浪の壯佼聚りて、恁麼の目的ありてか、常に擊劍を學べる一團體あり。

躍然手に唾して義勇兵を組織し、鴨綠の流鞭絕つ可し、支那人斬る可し、北京取るべし、豚尾十條を一束にして、兩手に五束づゝ挈げて歸るべしと、扼腕して氣競ひつゝ、一飛渡韓せむと企つるもの、百餘名ぞ顯れける。

渠等は風間直子を壯なりとして、赤子の慈母に於けるが如く、欽慕々々の餘、日毎に五人三人づゝ、其家に訪るゝを、老勇婦は憐みて之を迎へ、酒を置きて快く遇すにぞ、渠等は益々直子を德として、陰に部下の如く隨從し、風間の狹き一間を帷幕として、時事を談じ、兵略を說き、放言壯語喧々囂々として、さながら浴場の夕にも似たりけり。

熱湯玉を踊らすばかりなる敵愾心の間に在りて、一片の氷塊冷を極めて、心閑に醫書を繙き、

毫も世と相關せざるが如く、二階に閉居せる人あり。

是則前段に說きし醫學生風間淸澄、老勇婦直子が養子なり。

義勇團の面々は、淸澄が時事を度外視して對岸の火事を覩る如きのみならず、忠君報國の大和魂其光を日月と爭ふべき志士を目して、輕躁なり、突飛なりと嘲りしと聞くより、怒髮帽子を衝きて、骨鳴り、肉動き、彼奴奇怪なりと、各々臂を張る中に、堪へかねて躍立ちたる一漢子あり。仇名を爆裂彈といふ。

唯見れば鬚髯滿面に生ひて、洗はざる錦魚盆、身長高く裙短く、其聲破鐘の如し。

「無禮な奴な！其奴釋さんぞ。撲らうでないか、足腰の立たぬほど、呑と撲らう。然ういふ奴ぢやらう、敵に款を通ずるのは。苟も日本國民として、此際戰爭の事を口にせん者が何處に在るか。乞食の輩に至るまで、會へば必ず帝國の萬歲を唱ふ、その今日、寢惚けた面をして、此日淸間の大衝突、國家危急の大事件を、痛いとも痒いとも思はんのみか、我輩志士が如斯心血を灑ぐ所の、愛國の義擧に向つて唾するやうな言を吐すとは、實に天地も之を容れざる不忠、不義の劣奴、宜く速かに天誅を加ふべきものぢや。」

更に一人の說を爲すものありて、

「爆裂彈の言ふ所は有理だが、其無禮者は我等の直子樣の養子ではないか。して見れば、少は遠

慮もある。餘り然う手酷いこともなあ。」

と云ひつゝ贊成を得まほしげに一座を眄したり。

爾時爆裂彈は火を吹くばかりの氣色にて、

「何の遠慮がある？　苟も天誅を加ふるに親疎の別があるか、父母であれ、兄弟であれ、或は妻子君臣の間と雖も、誅す可きの罪は到底誅すべきの罪ぢやらう。私の怨を以てすることなら知らず、苟も天誅ぢや！天の一字が重いぞ！　我輩が彼奴を懲すのではない、えゝか、天が懲すのぢや。今之を戰場に譬へる。既に進軍の號令が下つたのに、敵を懼れて一歩でも逃足を踏む者があつたら何と爲る？指揮官は忽ち一刀の下に、かの卑怯なる兵士を兩斷にするでは莫いか。」

座の一隅より悲壯淋漓なる金切聲を揚げて、

「比喩適切、議論沈痛。」と叫ぶものあり。

「今や我國民は億兆の心を一にして、千挫屈せず、百難是排する所の、敵愾の精神を固めねばならんのである。之を戰場にしては、正に進め！の號令が下つた時ぢや。然るに彼卑屈極る亂臣賊子は、一身あるを知つて國家あるを知らず、義人志士の行を指して、輕躁突飛なりと言ふ。此の懦弱なる精神と、此の侮慢なる誹謗とは、疑も無く進軍の列を亂して數百歩の外に遁走するものではないか。指揮官之を斬らずむば軍律を奈何？　我輩天誅を加へずむば國民の元氣を奈何？ぢ

や。今渠に天誅を加ふるのは、則ち直子樣の志に報ゆる所以ぢやらう。然るに大義名分をも審かにせず、一飯の小恩の爲に卑劣なる遠慮をして、再び今のやうな因循姑息の言を爲すものあらば、其者をも我輩は公敵として、天誅の次手に一拳を吃せんければならん。」

言罷みて辯士は左右を顧みつゝ、氣を吐くこと虹の如し。

此說を可とするもあり、不可とするもありて、議論は頓に決せざりき。

四

兵士の古服に金紙を貼りて、武官の禮裝に擬したるを身に絡ひ、銀紙製の禮帽を戴き、玩具の佩劍を横へて、背には三布風呂敷大なる金巾の日章旗を飜し、凄じく大いなる附髭したる男、街頭の人足繁き所に立ちて、高かに喇叭を吹鳴せり。

金澤にては興行物のある毎に、辻口上を以て廣告する習にて、之を職とする輕口の者を太鼓廻と呼做す。常は股引、半纏着にて、「かんから太鼓」を敲きつゝ觸行くを例とせるが、此の度は時好に投ぜむと、思着の假裝は、到るところ喝采を博して、異樣の扮裝は、往來の歩を留め、喇叭の音は四方の兒童を聚めて、倏忽人の山を築けり。

爾時假裝武官は、强臂嚴げに、例の凄じき八字髭を左右に推撚り、天を仰ぎて大音揚げ、

「東西々々。不辯舌なる口上な以て御吹聽奉申上まする。從ひまして御町内御惣容様益々御機嫌能御座被在、大慶至極に奉存上まする。扨此度御當地香林坊賬座に於きまして、御贔屓嵐美冠一座相勤めまする演劇、新作新狂言と御座りまして、名題の儀は、一番目豐太閤朝鮮軍記三幕。二番目旭影武勇廼光五幕。是には有名なる松崎大尉子別れの場を始と致しまして、成歡牙山の大激戰、大尉討死の場、鐵砲、大砲、地雷火、爆裂彈、大道具、大仕掛、いづれも西洋新發明に御座りまする。大切には、大勝利北京祝宴、此場三階總出にて、華美に勇しき軍踊といふを奉入御覽まする。

開場の儀は午後二時とござりまする。別けて申上げまするは、從來の刻限には懸値がござりましたなれど、此度の興行は文明開化に仕りまして、正眞正銘一分の相違無く、正に午後二時の幕開に御座りますれば、御早々と御誘ひ交され、永當々々御見物の程、隅から隅までづらりづッと奉願上まする。」

と肩に掛けたる鞄の中より、四五束の半札を取出し、

「日本帝國萬歳、海陸軍萬歳！」

と空に向ひて拋てば、二三百枚の紙片は、時ならぬ雪か、木葉の散る如く、撩亂と舞下れば、見物も同音に、

「日本帝國萬歳、海陸軍萬歳！」の聲裡に、

「いよう口上大尉御苦勞。」

と聞くより、假裝武官は銀紙の帽を頭上に高く打揮りく、

「金澤繁昌！　賬座大入！」

と叫びて、半札を拾はむと推合壓合ふ群集を顧みつゝ、徐に兵式の一揖を施して、翩翻たる大旗の陰に、揚々濶歩し去れり。

群集の後に佇みて、豹の如き眼の裡に微笑を含み、此光景の始終を眺めたりし一箇の曹長あり。其面は磨きたる銅の如く、顴骨秀でて、眉太く、勇敢の氣自から眉宇の間に溢れて、凧繪の武者に魂や入りたるかと見ゆるばかりなり。

軀幹高からざれども、肉附の逞さは、木彫の仁王を欺きて、彈丸利刃も容易貫るべくは想はれざりけり。

有間は目も離さで見入りたりし一箇の男は囁きぬ。

「どうだい、立派な物ぢやねえか。」

「強さうだなあ。如彼のが振冠つて、やあッと亂入する時を、獅子奮迅の勢といふんだ。」

と漫に勇むは彼の侶伴なり。

「いづれ征くんだらうなあ。」
「征くのよ、大征のこん〳〵ちき。如彼のが征つてくれねえぢや賴母しくねえやな。」
「奮戰だらうなあ、華々しく。賴むぜ、隊長！」
此耳語を聞咎めたる曹長は其方を屹と見向きたり。兩箇は其眼光の鋭きに射られて、鼠の竄るが如く、忽ち影を隱せり。
漸く衆の散ると共に、曹長は兼六園の方を指して、劍鞘の音爽かに、整然たる歩武を運びけり。
曹長は市中を散歩して、今や兵營に歸らむと、兼六園を横截りて、西南戰爭の記念碑なる日本武尊の銅像の傍を過ぐれば、這兒にも喧囂を極めて、血氣の逸雄群を成せり。
唯見れば、黑地に青く蜻蛉を染抜きたる木綿袴を一樣に穿做して、手に手に日本杖を提げたる、これなむ蜻蛉組とて、老勇婦直子を慕へる義勇團の壯士なりけり。
殺せ、撲れ、と罵り噪ぐ渠等に取籠められて、芝生に踞したる一箇白面の書生あり。渠は腰拔の怯なるか、將深沈の勇なるか、惡口雜言は雨の如く注げども、さながら人の身の上などのやうに聞做して、色を變ふるにあらず、答を爲すにあらず、手近の草を拐りつ、捨てつ、時々は仰ぎて雲の奇峰を望めり。
這は何事ならむと、曹長は姑く足を停めて、其成行を眺めたりしに、壯士等は渠の恰も生あり

て死し、覺めて睡るに似たる擧動を見るより、痛憤切齒の聲は此處彼處に、
「破廉恥！」
「無氣力！」
「無神經！」
「卑屈野郎！」
と散々に辱むれども、仍渠は眉だに昂げざりき。
忽ち二三歩進出でたるは、頭領とも覺しき猛者なり。
「諸君、駄目だ。もう面責すべき語は盡きとる。」
と言ひも訖らざるに、
「いよ〳〵天誅か！」と踴躍して叫ぶものあり。
頭領は徐に頷きて、
「行るべし！」
「行れえ！」
と一齊に懸けたる聲は大濤の崩るゝ如く、六十餘人の壯士は忽ち頽れを打ちて、あはや、天誅の笞、渠危しと見えたる刹那、曹長は身を躍して、分入る群衆、搔潛る杖の下に、辛くも救得た

る人を背後に庇ひ、大手を廣げて、
「待つた、待つた。」
壯士等は不意の援兵に氣を奪はれ、杖を控へ、息を斂めて、各々手持無沙汰に鎭りかへりて見えたるは、夕立の俄に霽れたる如くなり。
曹長は人々を眄して、
「各位は大勢、敵は唯一人ぢやありませんか。」
爾時例の頭領やをら動出でて、
「然し多勢で苛める譯ではない、輿論が其奴を懲罰するのである。究竟君等の如き忠勇なる軍人に對して、我々が好意を表する餘、かういふ事に成つたので、其奴をお助けなすつちや、却つて君方の精神にも背く次第だ。打遣つてお措きなさい。」
曹長は銅を延べたるやうの額を皺めて、
「こりや妙だ。此男を撲るのが我曹の爲？うむ面白い。樣子を聽いた上で、差支へなければ僕も撲らう！」
謹聽の聲は聞えたり。頭領は一咳して、
「其處だ、聞き給へ。」

とて這白面の書生風間清澄が非國民的呑氣の罪狀を擧げて、滔々說去り說來れば、傍聽の壯士等屢々憤激の情禁ずる能はざる毎に、膝を拊ち、地を踏鳴して、悲壯の聲を絞ること頻なり。
清澄は毆れし肩を痛みつゝ、傍に立てる曹長が佩劍の柵を視めて、益無き演說を聽かざらむと力めたり。
曹長は犯す可らざる威嚴を其姿勢に示して、頭領が手を揮り、首を動して、能辯を衒はむと、悶ゆる前に屹と立ちたるは、風吹く庭に疎竹寒巖に倚る趣あり。
「如何ですか。實に我々同胞の面汚ぢやありませんか。機があつたら懲してくれうと、皆思うてゐた矢先に、此樹蔭で寢轉んどるのを見懸けたから、忽ち引捉まへて、始は諄々と道理を說いて聞かしたです。けれども更に感じない。其から十分に面責した。苟も男子たる魂のある奴なら、慙死するほど辱めてくれたけれど、感じない、一向感じない。驚くべき卑屈野郎、這箇奴は言論は無益だと思うたから、已むを得ず腕力に訴へた所だ。君の來られたのは丁度好い。御不足ぢやあらうけれど、首途の血祭に、此犧牲は君の前に獻じよう。」
如箇言訖りて、頭領は朱總を附けたる日本杖に兩手を重ねて、挨拶如何と曹長の面を視たり。
曹長は其面を振向けて、傍に蹈る清澄の爲體を視たり。渠は一卷の書を懷にして、浴衣の袖の半斷れたる右手に、蹂躙られし麥稈帽子を翳して、眩き夕陽を遮りつ。

曹長は猶能く其容貌を視たり。額廣く、眉秀でて、凛としたる眼色は、時に劍の閃く光ありて、屹と結べる唇は、言はむよりは寧ろ行はむと誓ふに似たり。

「なるほど。」と曹長の呻出せしを聞きて、

「如何ですか。」と頭領は肩を聳して、答辭を促せり。

「可いぢやないか、それも。」

此實に壯士等が頼みたりし曹長の言なり。

「何が？」と頭領の肩は益々峙えつ。

「何がぢやない、樹蔭で晝寢をするのもさ。君等も些と行つたら如何かね。」

頭領は直と呆れて、團栗眼を睜るのみ。不服の獨語は蜂の巣を打ちけむやうに沸きぬ。

曹長は稍聲を勵して、

「君等は又何だつて然う囂々騒ぐのかねえ。そりや敵愾心は結構だ。義勇兵も可いさ。けれども、我日本帝國には精鋭なる陸軍といふものがある。君等は其陸軍を恃むに足らぬと思ふのだね。否、然に違無し！恃むに足らぬと思へばこそ、君等は黨を組んで騒ぐのだ。考へて見給へ。何の爲の陸軍だ。一朝國家事あるの際は其責に任じて、君等に心配を懸けまい爲の陸軍ぢやないか。然るに、何だ。未だ鐵砲の音も聞きもせん内から狼狽まはつて、もう其處まで敵が寄せて來たやうな騒擾をやらかしてゐる。見苦しい！其ほど清國が可懼いかな。日本の陸軍はそれほど信用されんかな。僕は樹蔭で讀書をするやうな人が好きだ。其人は陸軍を信用する人だもの。淺き瀨にこそ細波は立てさ。事に遭つて妄に動くのは、英雄の爲さざる所だ。支那征伐は陸軍に委せていて、君等は晝寢でも爲て待つてゐ給へ、今に又平壤を取つて御覽に入れるから。」

言下に一隊の壯士は盡く荒肝を挫がれて、吁も呻も無く、相見て眼を瞋すのみ。

曹長は親しげに清澄の肩に手を掛けて、

「先生、君は可感よ。君は我陸軍を信ずることの篤き人だ。戰爭には構はず、隨分勉強し給へ。」

衝と身を起したる清澄は曹長の手を固く握りぬ。泥塗に壞れたる帽子の下より、清しき眼は露を帶びて輝きつゝ、

「私は高等中學の學生で、風間清澄と申します。貴官は？」

「僕は竹中於菟介、無骨者です。」

清澄は拳を固めて、

「竹中君！」と叱咤するが如く呼べば、曹長は號令的に、

「おい。」と鋭く、劈くばかりに應へぬ。

「義勇兵にならん者は、愛國心の無い者でせうか。蜻蛉の袴を穿かぬ者は破廉恥、無氣力の、卑

屈野郎でせうか、亂臣賊子でせうか。」

曹長は清澄の手を執りて、

「君を知る者は僕だ。」

有恁て清澄は絶好の知己を得たる其日、憐むべし、養家を追はれぬ。

五

義母に義絶されし清澄の歸るべき家はあらざるなり。母は幼かりし頃に歿り、父は兄なる人と共に數十里の他鄕に在りて、竈の烟微くも有るか無きかに其の日を暮せば、爭か之を便るべき。昨日まで高等中學の學生たりし風間清澄は今日既に亡し。書笈を負ひ、希望を懷にして、風露に起臥せざる可からざる厄運の下に呻吟せる野川清澄あり。

然れども一大幸福は凡眼の見るべからざる光明を放ちて、渠が頭の上に蔭めり。清澄は之を知らず。人生多くの場合に於て、災禍は期して待たざる可からざるものなれども、幸福は却りて天外より來ることあり。

ドクトル陶得道は第四高等中學醫學部の講師なるが、夙に己が薫陶せる清澄の人と爲を愛して、後來必ず有爲の人物たるべしと、心陰に最愛の娘圓を配せむものと念ひけるなり。

圓も亦一家團欒の物語毎に、父の口より未だ嘗て誦せられざる無き清澄の名を聞くに馴れて、自ら未見の親友とはなりぬ。

理想の親友は春の夢に圓の閨を訪れき。秋の夕の佗きに、幻影の清澄は前栽の緣に憩ひて、圓に一碗の茶を乞ひき。圓は實に乃父が意中の人を以て、亦己が意中の人とせるなり。

一日清澄は二三の學友と共に、始めてドクトルの家を訪れたりき。これ圓が渴したる理想を實證せし垣間見の抑々なり。

夢に來し風間よりも、茶を乞ひし清澄よりも、絨毯の輝くばかりなる客間の入口に、黃楊の卓上に春蘭香を吐く盆栽の傍に、紺遍縷の色褪たる窄袴の膝を正して、乃父の言に耳を傾けつゝ、時々片頰笑める、多望の二年生の風采は、更に好しく、更に慕しく懷しく、更に飛立つ想なりき。

圓は其理想に於て白描の才子を見たりしなり。今其實際に於ける極彩色の風間清澄は、一段の生意と、一段の韵致と、一段の妙趣とを具へて、終世拭ふべからざる印象をぞ、深く圓が心には殘したりし。

爾後清澄は陶先生の家に往來すること屢なりけるが、固より主の好める客なるが故に、家人も之を疎にせず、渠は尋常一樣帳下の學生にあらずして、然るべき緣故ある「清樣」の殊遇を受けたりき。何日如何なる機にか語を交し初めけむ。圓は遂に清澄と面をだに合すれば、必ず物言ふま

での交誼を結びぬ。第一の日の一言は第二日の二言なり。第三日の二言は一月の後の數百千言なり。然れども密封せる唇は數月の後も數百千言を語らず、嬌羞に裹れたる胸は、其一端をも綻ばし能はざりしが、渠の愛らしき眼は之を訴へぬ。渠の感易き心は之を頷きぬ。清澄は圓が其身を慕へるを曉ると共に、圓も清澄が其身の慕へるを曉るとは曉りけるなり。

同級の諸生は清澄が圓を曉り、圓が清澄を曉れるより、尚早くも清澄と圓とを曉りて、寄れば之を囁き、聚れば之を羨み、離るれば之を妬み、散ずれば之を傳へて、「へん、ドクトル好男子！」

陶講師固より清澄に意を屬せり。圓は這箇人を我夫にと願へり。夫人の所思も講師に差はざるなり。

恁く三方四方吉と雖も、猶一方の大いに吉からざるあり。他無し、清澄は風間の養子にして、圓は陶家の一粒種なり。

此に於て講師は掌中の玉を奪はれたらむよりも失望せり。夫人はいとど力を落して爲方無しとは知りながら、仍は爲方無きかと繰返して、轉た講師の失望を深からしめたり。

かくと泄聞きたる圓は、人知らねども其夜を睡らざりき。其明る日を樂まざりし顏の色は、咎めぬものもあらざりしが、渠は其夜をのみ睡らず、其日をのみ樂まざりしにあらで、多々の夜と、打續く日とを、悶えては明し、果敢なみては暮しつゝ、やう〳〵散る花の哀を見つけ、夕暮の鐘

の身に沁む音をも聞出しぬ。

渠は時に胸の裂けむとするを覺えき。命は有りても効無きやうに思はれて、願くは今日にも死して、明日は夙めて直子が家の娘に生替れかしなど、有らぬ事どもの千百を思ひ續けつゝ、或時は自ら其愚なるを嗤ひ、又然まで愚になりぬる心緒の紛亂を限無く歎きぬ。

此病を治すべき處方を學ばざりし父ドクトルと、此號泣を賺すべき乳房を有たざる母刀自とは、如何に爲すべきかを知らで、忍びやかに驚き騷ぎたりき。

圓は我ゆゑ父母の苦勞を見るにつけて、不孝の罪も恐しく、心に責めて色には出さじと、なほ苦き戀をして、かくても添はずばと、思は募るばかりなりしが、突然天公は回生起死の配劑を齎してドクトルを驚かせり。

清澄養家を出づ！

此報と共に陶の奥には數千の燈一時に輝けり。吉慶を唱ふ音樂は、床下に、屋棟に、窓外に、活潑なる調子を速めて、物狂はしく夫婦を舞しぬ。

夫人は倒に墨を磨りぬ。講師は慌てて鐵筆を握りぬ。一通の書狀は忽ち認められたり。

「至急御相談申度儀有之候へば、直樣此者と御同道下され度待入申候。」

直に車夫を召して、之を清澄が假住居と聞きたる方へ遣し、我は三鞭を酌むべし、洋食を命ぜ

よ、膳立を急げよ、風間は下戸なれば、食後の菓子を用意せよ、圓は湯に入りしか、給仕に出でよ、衣服を更へよ、と講師は一身に忙しく周旋せり。

噫、此年此月此日！陶夫婦が一生忘るゝ能はざるは此日なり。恐くは其子孫、其子孫の末、猶其血統の續かむ末の末までも、此日は決して忘らるまじきなり。

陶の使は革文函を挾みて、火急の用なり。走れ、とありし命の通り、千里も一飛と道を急ぎ、清澄が下宿に駈入りて、尋ぬれば不在なり。

女房は取次ぎて答へぬ、

「あの野川様は、先刻徴兵の召集令が來まして、ねえお前様、これから朝鮮へ之くのだと有仰つて、今方御出發になりましたよ。」

然矣、此日は實に金澤第六旅團に於て、豫備、後備を徴集したる當日なり。

車夫は聞くより色を變じて飛還りぬ。

六

清澄は曩に醫學費を退學して一年志願兵となり、除隊の後更に高等中學の受驗に應じて、第四級に入學せし比、既に故ありて風間の姓を冒せしなり。

渠は元來寡言なるが故に、おのれが一身上の始末など、濫に口外せざりければ、渠が軍事の教育を受けたりし履歴の如きは、實家の父兄を除きては、之を知れるもの寡かりき。

渠は養母なりし老勇婦の如く、華々しくは敷島の大和心を發表せざりき。況んや號外將軍の如く、擾々と敵愾心を動すをや。況んや蜻蛉組の血氣輩の如く、忠君報國の赤誠をして、近火の手傳の如く突飛ならしむるをや。

然れども清澄は既に日清交戰の報に接せし時、軈ては筆硯を投じて銃槍を拈らむの覺悟を爲たりけるなり。

凝結したる渠の勇氣は、纔に沸騰點の弱熱を感じて、敢無く溶くることを容さず、冷々然として薪の壞れ、鉛の流るゝを傍觀しつゝ、自家が融解すべき熱度の、如何に劇烈なるかを見よかしに、なほ凝結し、なほ鞏固して、竊に時節の到るを待てりしに、豫備後備は徴集されぬ。召集令は普く傳へられぬ。野川清澄も令狀に署名されたる一人なり。

卑屈、無氣力、破廉恥、不忠、不義の國賊は、老勇婦の面責と、號外將軍の忠告と、蜻蛉組の天誅とを、屑とも爲ざざりしと一樣の面色にて、心靜に令狀を披見し了り、內儀を呼びて、語簡に後事を託しつゝ、服を更め、袴を着けて、我こそ入營の一番槍。天晴武者振か、と戲謔の一言を記念にして、見る目も潔かりし首途をば、內儀は後迄も人に語りて泣けり。

清澄は下宿を立出でて、直ちに郊外なる野田山の墓地に赴きぬ。

陰森たる蒼翠浮世に遠く、滿徑苔滑かにして、野草の露深き處に、無數の魂は寂寞として涼しく眠れり。渠が亡母も此裡にこそ、長夜の夢を結べるを驚かして、暫く今生の別を告げ、永く泉下の再會を契らむとて、清澄は此に詣でたるなり。

やう〳〵暮色も逼りぬれば、立列びたる卵塔の遠きに人影陰々と佇みて、亂樹の奥の闇に鳴く梟の聲頻に聞ゆ。

清澄は先づ香花を手向け、閼伽を供へて恭しく母尊靈の前に跪きつ。姑く苔蒸す碑の面を眺めたるに、漫に物の悲しく覺えて、潸々と落る涙を、やをら推拭ひて合掌し、幾度か微音に唱名して、

「母樣、どうも大變御無沙汰をいたしました。自今又節々御詣をいたしたうございますが、恐是、母樣、是が御華の供納になるかも知れません。其意で這樣に澤山供げて置きました。私は近い内に朝鮮へ參ります。彼地で骨は曝しますとも、母樣、魂魄は屹度日本へ還つて參りますから、どうぞ御心丈夫に、ねえ母樣、隨分お達者で……」

忽ち其聲は斷れて、其面は手巾に蔽はれたりしが、

「え、、此は生きてゐる人に云ふ言だ。吁、假生きて御在なすつたら、否々、死んで御在なさる

方が却て可いのだ。此方が如何に可いか知れん。おや母樣、左樣ならば、御機嫌よろしう。それから母樣、父樣も兄樣も皆達者ですよ。遠くなつたものですから、つい〳〵御無沙汰をしてゐますけれど、私の歿後には、兄樣が精々御詣をしますやうに、賴んで置きますから。左樣なら、母樣、私は將參りませんよ。將御暇を致しますよ。」

涙に咽びつゝ立起りたる清澄は、名殘惜さにや勝へざりけむ。緊と塚に抱附きて、良久定紋の面に接吻せしが、やう〳〵心を取直して、立去らむとする後の方に、わつと聲を立てて女の哭くあり。

清澄は慄然として首を回せり。僅に數歩を隔てたる石塔の陰に、黑き服着て佇める女は、渠の瞳を定むる時、恰も雪の如く眞白なる顏を擧げたり。

水をや浴びたらむやうに、清澄は滿身一時に冷却して、血は心臟を破りて迸りたるかと覺えぬ。然れども渠は正體を見屆けむと、一歩も退かず、項を延べて、思ふまゝ見透せり。暮色稍濃かに其姿を霞めたれば、視力の不明なる眼は、纔にその女子たるを辨じ得たるに止りき。

猶ほ能く視むと思ひて、一歩を進め、二歩を進むるを待たずして、女の姿は動出でつゝ、

「風間樣！」と呼びぬ。聲は涙に太く曇れり。

清澄は再び慄然として、

「誰ですか！」 問ふと謂はむよりは、咎むとや謂ふべき語勢の鋭くも言放てり。
「私！陶の圓でございます。」
と言ふ間も惜く駈寄りて、緊と清澄の袂に縋りぬ。
圓は未だ曾て意中の人の衣の端にだに手觸れしことはあらざりしなり。清澄の方正と、圓の靜淑とは、實に此の幾年月心兩箇の間に横はれる銀河なりき。
今事の急なる、渠は心を亂して自己を忘れつ。清澄も想は同じかりけむ。強ちに振も拂はず、圓の肩に手を懸けて、
「やあ、圓様！貴方は如何して爰へ？」
「貴方は眞箇に徵集あそばされたのでございますか。」
「果然です。」
「果然でございますか。」
「果然です。」
「如何して、まあ、ねえ。」
愁然として圓は清澄の面を打瞶りぬ。如何にかしけむ、渠の手は仍固く袂を執りて放さず、眞珠を飾れる黄金の指環輝く左の手は、涕に濕れたる絹の手巾を弄りて、屢々美しき顔の半を掩はむとせり。

清澄は頻りに群來る蚊をば逐はむとて、帽子を把りて、我身の前後と圓の左右とを絶えず拂ひつゝ、
「實は私は三年前に志願兵に出たものですから、それで今豫備になつて在るので。」
「あの、貴方が？始めて伺ひます。」
「然でございませう。」
「而して貴方は此から直に兵營へ御出になるのでございますか。」
「唯、直に入營いたします。」
「而して朝鮮へ御出になるのでございますか。」
「唯、多分參りませうと想ひます。」
圓は俯きて忍音に泣出しぬ。清澄も誘はれて不覺の涕を催せしが、
「えゝ、實に先生には一方ならぬ御恩を承けまして、御禮はなか〳〵言語には盡されません。是非御暇乞に趨らなければ成らぬのでございますけれど、何を申すも至急の徵集で、其間もございませぬから、入營いたした上で、いづれ伺ひますか、若又其暇も無いやうでございますれば、御手紙なりとも差上げまして、段々申上げようと存じてをりましたので。然し爰で貴女に御目に懸、

りましたのは。……然し貴女は如何して爰へ入らしつたのでございますか。」
圓は應へず、唯潸々と泣くのみなり。
「眞箇に如何して入らしつたのですか。」
「御目に懸らうと存じて。」
是可憐なる圓が胸中の千言を約めたる一語なりき。然れども箇は清澄が問ひたりし點にあらず。渠は圓が如何にして此に我の在るを知りて來りたるかを疑ひたりしなり。
「それは如何も御深切樣に難有う存じます。然し、私が此に參つたのを能う御存じで。」
圓は語簡に、空しく還りし使の此報知を齎せし始終を語りぬ。清澄は手を揉み、額を撫でて、
「其は何とも殘念な事をいたしました。而して急に御用と云ふのは何事でございますか。」
「其は彼の……」
言はむとするとともに、圓は自ら異くも胸塞りぬ。清澄は推して問へり。圓の心は語らむと欲して煩悶せり。臆したる渠の唇は固く閉ぢて動かざりき。渠は已む無く非ぬ言を以つて假に答へたり。
「能く私は存じません。」
清澄は太く失望して、

「然でございますか、はて、なあ、何の御用か知らん？」
語らむとして語得ざりし心のいとど煩悶するを、圓は堪ふまじく惱める體にて、手巾を引捩りつゝ、我肩の邊を眤と視たり。
夜は全く黑くなりぬ。遠方の燈火は星の如く輝きつれて、蟲の音は四邊に繁くなり增れり。忽ち聞ゆる遠音は疑も無く兵營の喇叭なり。清澄は空想の眠を驚かされて、
「時刻が晩れますから御暇を致します。」
「まあ風間樣！」
圓の聲は迸るが如く過みて、其手は再び固く清澄の袂に縋りぬ。
「まだ少し申上げる事があるのでございますから。」
「それは伺ひますけれども、時刻が迫つてゐますから、かうして爰でお話をいたしてをる譯には參らんですから、其處まで御一所に參りませう。」
「あゝ、そんなら何卒御迷惑でも。」
「否、少しも迷惑なことはございません。お危うございますよ、御氣をお着けなさいまし。おつと！木の根。こりや石塔だ。危うございますよ。」
「どうも眞闇で些とも辨りません。貴方後生ですから最少し御緩に。」

「畏りました。」と應ふる背後に、圓は早くも跌きて木履を蹈覆せり。清澄は其聲に驚き、慌てて扶けつ。

「如何か遊ばしはしませんか。」

圓は足の小指の傷を忍びて、

「いゝえ。」と應へぬ。

清澄は顧みて、弓手を差出し、

「お手を引きませう、危うございますから。」

實に此時圓は身も消ゆべく嬉かりき。平生有恁場合の幾度か無きにしもあらざりしなり。然れども方正なる、嚴肅なる、時としては寧ろ刻薄なる清澄の、未だ曾て此の如き溫言を惠みし例あらざりき。

人目を忍び、蹣を慕ひて、有恁荒涼野末まで尋ね寄りたりし心竭も、此一言に打算せられて、猶且おのれの足らざるを恥づるばかりに、圓の怡悅は胸に餘りて、其手と足とに戰きぬ。同時に渠の眼は涙を催せり。忍びかねてや聲の立つを、清澄は深く異みて、

「貴方何を泣いていらつしやるんですか。」

答を促さむとて、清澄は思はず圓の手をば屹と握緊めたり。

「かうして御一所に歩きますのも……」

「何とおつしやる?」

「是がもう一生のお別でございます。」

清澄は涙を飲みて呵々と笑ひぬ。

「其な氣の弱いことを有仰いますな。敵の首を提げて、直に還つて參ります。」

圓は歔欷る隙より、

「母樣には彼なに泣いて御暇乞をあそばしながら、どうせ私のやうなものには、其な事を有仰いまし。」

此の言をば此女兒に思懸けざりし清澄は、我手を携ふる美人をもて、或は親愛せる陶の圓にはあらざらむかと疑へり。然れども渠は實に圓其人なり。今や百年の憾を呑みて、一世の別を惜む圓其人は、翠簾高く捲き、月下に琴搔鳴す陶氏の令嬢其人にはあらざるなり。

清澄は萬感胸に逼りて言ふ能はず、首を低れて力無げに足を運びつ。

「風間樣、わたくしは今日の召集が殘念でなりません。せめて是が明日ならば。」

「同じ事です。」

「それが異ふのでございますよ。」

「そんな事があるものですか。」
「あるので御座いますよ。」
「愚癡です。それは愚癡です。」
「否、愚癡ぢや無いのでございます。それには些と眞意があるので。」
「眞意が？　恁麼眞意ですか。」
圓は口籠れり。渠の心は再び之を語らむと悶ゆれども、渠は恰もおのれの罪を懺悔し得ざるが如くに、猶ひぬ。
「今更申したつて効の無いことですから、申しますまい。」
「然有仰ると猶伺ひたいです。」
「私も申上げたいのですけれども。」
「そんならお聞かせ下さいな。」
「お別れ申す時に申しませう。」
「もうお別れ申さんければなりません。」
圓は卒に愁然として、
「ほんにもう是が御別でございます。」

「はい、何卒暮々も宜う先生に有仰つて下さいまし。奥様にも何卒。貴方も隨分御身を大事に、御機嫌よろしう。」
一句は一句より清澄の聲は濕みぬ。圓は始終涙を以て之に答へき。
「貴方こそ御體を大切に遊ばして、溢つた事をして下さいますな。貴方の御身に萬一の事でもございますと、風間様、私は生きてはをりません。」
圓は遂に滿身の血をば一句に絞れり。亂麻の如き心緒は快刀一揮の下に兩斷し去られたり。渠は再び乃父の急用を説くを要せず、更に別に臨みて、今日の召集を恨む勿れ。渠は二歳の積る思をば、最も簡明に、最も剴切に、最も巧妙に發表し得たるかな。清澄は一句の能辯に感動して、遽に燃立つばかりの氣を靜めかねつゝ、
「其御志は忘れません。實に！難有う存じます。私は其御言だけで滿足します、十分です。から何卒貴方は御身を大事になすつて、御兩親へ孝行が大切でございます。私は此から曲つて參りまするから、お名殘惜うございますが、爰で御別れ申しまする。隨分まあ御機嫌よろしう。」
清澄が胸に緊と面を當てて嗚咽りぬ。
清澄は其袂を引斷るにあらざれば行くこと稱はざりき。圓は力を籠めたる兩の手にて取縋り、
突然横町より顯れたる兩箇の人影は、する〳〵と近寄りて、行過ぎつゝ、

「えへん〳〵。」
「畜生め！如何してくれるんだい。」
「お樂みでございッ。」
「大概になさいッ。」
其聲の罷むと共に、闇の礫は清澄の帽子を掠めて飛來りぬ。あなやと思ふ間も無く、二箇三箇、四箇、ばら〳〵と翦れて走れり。
「さあ何時まで斯して在つても際限がありません。時刻が晩れますから、さあ、圓樣、圓樣。」
圓は愈々泣くのみにて答もあらず、猶袂を放さむとも爲ざりければ、清澄は心を鬼にして、矢庭に振捥りつ。あれ！と喚ぶ聲を後に馳去りけり。

七

箇は抑恁麼、金澤の市街は此日午後より暴に騷然として不穩の色を表せり。須臾塵煙四方に起りて、人車東西に奔走し、鼎の沸くが如き紛擾と、潮の寄するが如き喧譟とは、夕に薄りて益々甚しく、夜に入りて愈々劇しくなりぬ。
街頭の要所々々には國旗を交叉し、燈火を點じて、一片の掲示の壁或は柱に掲げられたるを、

聚り觀る者一個所毎に約百餘人、芋を洗ふが如くに犇けり。
警部は馬を八方に騎廻し、群集に遭へば手綱を控へて、手にせる公文を推披き、音吐朗々として謹誦す。意を了せる輩の散行く迹より、又寄來る人數は之を聽かむと仰ぎて千狀の面を並べつ。
二人曳、三人曳の人力車を馳せて、右往左往に入亂るゝ武官の軍帽は、投合ふ毬の飛ぶよりも遑無く、士卒は文函を捧げて縱横に疾驅し、馳違ふ市民の弓張は滿天の星を隕すかと疑はれて、到る所警吏の角燈は嚴かに耀けり。
やがて一群又一群、或は兩三箇、七八箇、向顱卷したる者、襯衣ばかりに偏袒たる者、裙を端折りたる者、赤兒を負ふもの、跣ひつゝ杖くもの、病みて人の肩に倚るもの、絡繹として麕集し、哭く聲、喚く聲、繼いで陸軍萬歳の聲と共に、各々一群の中より身を抽く壯丁は、前後を爭ひて兵營の門に入る。再び起る萬歳！の唱聲、天地も爲に震動せり。
其夜十時を過ぐるまで金澤市中は實に活修羅の巷なりき。人々安き心も無く、今にも敵や襲ふかと、壯者は狂し、婦女は戰き、父老は危み且憂ひぬ。
突然此日の午前八時を以て豫備後備召集の令は布かれしなり。市内は二十四時間、市外は三十六時間、其他遠隔の地には各々適宜の猶豫を與へて、普く徵集されたるが故に、其夜初更を過ぐる頃には、近在の兵員其來る可きは皆來れり。遠きを馳せて大事に趨くものは、當に明朝より始

めて兩三日間陸續兵營に入るべきなり。

良有りて、然しもの群集は影だに留めずなりぬ。眩かりし燈火は忽ち消えて失せぬ。動後の靜は金澤市をして恰も巨大なる墓場の如くならしめき。

但時に隊を成して非常を戒めつゝ、市中を巡邏せる兵士の銃槍は、夜露に磨かれて此處彼處の闇を貫き、遠く近く絕間無く、鰭爪の音は戛々として秋眼の枕に落つ。正に此時、殺氣天に横はりて、漲浮たる大虛の北方に、陰々として微く光あり。彗星出づ！

八

金澤の兵營は舊藩主前田侯の居城にして、其結構の雄古にして巨麗なる、優に北陸の一偉觀たり。大手前の晩風涼しき處に群を成して、或は佇み、或は踞ひ、ひそ〳〵と語ひつゝ、何をか期して待つ風情なる多人數あり。

箇は是頃日頻に噂する彗星を望まむとする者と、今夜出師あらむの風説を信じて、貔貅の進發を觀むとするもの相聚りて、旁涼を納るゝなりけり。

忽ち見る、冥濛たる天の一方に、それか有らぬかとばかり光芒微々として、白氣の靉靆くが如きを、明察く見出せる一人は、嚴然に左右を顧みて、

「あれ〳〵御覽じろ、何と虛説ではありますまい。其の狀草帚に似たるものは天下の戰亂を司る星だとしてある。如何です、帚星！つう〳〵と尾を曳いてゐる、あれが帚の頭さね。吁、世は亂となりにけりだ。」

傍なる一人は小手を翳して遙に望みつ。

「どれ〳〵何處に！うむ成程、と言ひたいが、いやはや、誠に輕少なものだ、帚といへば帚。……」

「束藁といへば束藁かね。」と横槍を入るゝ者あり。

「騷ぐほどの事でもないのだ。」

「尤も帚や束藁で騷ぐやうぢや、荒物屋は出來ません。」

「はゝゝゝ、これは大きにね。」

彼亂世を嘆ぜし人はなほ誇顏に説出せり。

「然有仰るがね、今晩は曇つてゐるからだ、明晩にも御覽じろ。それは鮮明なもの、まこと帚星だね。御一新になる前にも、丁度彼と同樣のが出ました。明治十年度、例の西南戰爭さね、前陸軍大將西鄕隆盛新政厚德の旗を翻した一戰さね、彼時にも顯れました。矢張則ち是だて。いや此天文の表に顯れる事といふものは、皆樣の前だけれども、爭はれないものさね。」

背後に一人あり、頤を撫でて、
「彼は、もし、旗星だ。いづれ變を徵すものには違無いが、帚星とは格別でさあ。能く御覽なると、恰好が又違ふ。帚星だと、あの光芒がもつと歴然と纏つて、それは全く帚の通りさ。あれを帚とは、少し無理ですわな。あれは旗星！白旗が風に靡いてゐる狀がありませう。そこで旗星と唱へたものだ。これも天下が亂れる兆だと言傳へてあるが、なるほど這般時節だからねえ。」
「さあ〳〵帚と旗の爭になつて來た。」
「はうきにはたが迷惑をする譯かね。」
「いや迷惑ではないから、やつたり〳〵。」
「帚しつかりしろ！」
「旗、旗！」
「帚！」
「旗！」
論者は孰も年輩なりければ、有繋に大人氣無しとや、旗と箒とは遂に爭はずして已みにき。彌次馬は益々水を向けて呶々せり。折から一聲高く群言を排して、
「諸君！」と叫ぶを、人々何者かと見れば、羸瘦ひたる一個の老書生なり。謹聽の聲は之を歡迎

せり。
「甚だ失禮ですけれど、兩君の說はいづれも衍つてをる。あの現象は斷じて帚星では無い、旗星でも無い、業に星と名くべきものでは萬々無い。それなら何か。あれは白氣と言うて、氣である。字に書けば白い氣、則ち白氣である。昔諸葛亮孔明は此氣を察て敵陣の動くのを曉つたと謂ふ。又我朝の猛將越後の上杉輝虎入道謙信は西條山の對陣に、敵の分野に當つて白氣の騰つのを見て、其の將に大に戰はむとするを察した。それは皆此白氣である。今此第五旅團も遠からずして繰出すと見えた。天豫め之を表した所から考へて見ると、恐く出兵は今明日の內だ。」
有恁處に角燈閃々として、電信配達夫は驀直に馳來り、飛ぶが如くに兵營門內に入れり。
出師を待てる輩は遽に動搖めき立ちぬ。
「兵營では豫備後備を召集して、今朝から今の電報を待つてゐたのだ。あれさへ來れば、もう間も無く繰出す。」
おのれ帷幕に參して、三軍の動靜掌を指すが如くに言ふものあり。風聲鶴唳も其かと思ふ折からなれば、かの電報こそ尋常ならじと、衆人心を動かせり。
翁あり、極めて滑に禿げたる頭顱を掉りつゝ、
「なるほど左樣かな。いや、何に致せ、大變な事になりましたわい。聞けば、もし、高い聲では

申されませんが、此間から此方の勝利が餘り宜くないとか申すではございませんかな。如何様、かうして慌しく後詰の人數を蒐集るといふのは、何れな、尋常事ではありますまいて。それに致しても、我日本は神國で、昔からまづ天下一の武の國としてある。此方が武の國なら、敵國は又どえらい強大なもので、眞箇もし、繪圖面を見ても知れる理窟だが、日本なんぞは比較にはなりませんわい。まづ早いところが、敵國に人間の數が四億萬、何と驚いたものだ。處で此方は僅に四千萬の四海同胞だ。何ぼ神國でも、四億萬に四千萬では、こりや取組が無理ですわい。こゝの理合も考へずに、チヤン〳〵だの、芥子坊主だのと、一口に皆言ひますけれども、なか〳〵然でありませんわい。早い所が、それ四億萬に四千萬。物は試だ、まづ萬國の繪圖面を御覽じろ。我國は何故這般にも小さからうと、それは眞箇涙が出ますわい。その矢先に、恁麼でございます、あゝいふ希有な物が顯れる、何星といふのか知りませんが、いづれにしても吉い前表ぢやありませんてな。」

憂愁面上に溢れて、渠は熱心に神國の前途を危めり。之と杞憂を分てる半白の老漢ありて、

「太古、神功皇后様の時代には、日本も強うごした。其頃三韓征伐だ。此の戰は大勝で、飴屋の唐人大閉口。それから下つて日蓮上人の時代に、蒙古といふ國が其復讐を頼まれて、攻込んで來たでさ。其時だて、神風が吹起つて、敵の船は何十艘と顚覆る。味方は高見の見物で大勝とは、

有繋に神國の難有さねえ、然ぢやごわせんか。其頃とは全然世の中が違つてしまひました。お話の通り、大分味方は風が惡いさうで、此間なんぞも大した討死だつたといふぢやごわせんかい。そこで年明の兵隊まで繰出すといふ騷でせう。ねえ、假初にも神國、神の國だ。神の國の軍勢が毛唐人に負けるとは、世も末ぢやごわせんかい。二三日前まで、義勇兵だとか、ねえ、それ、蜻蛉組だとかいつて、肩臂怒らしてゐた連中も、此頃の旗色を見て、どうやら二の足ださうだ。何と心細い事情ぢやごわせんかい。」

這箇の妄想を抱けるもの、啻に此禿顱と半白とに止らざりしなり。非常召集は晴天の霹靂一聲、市民を震慄して、是正しく我軍利あらざるが爲なりとの臆說は、金澤全市を蔽へるなりけり。

仍喋々と甲論じ、乙駁して、荐に響動めく群集の前を、息急き過る美人あり。五六間許も行きて立住り、うろ〳〵四邊を眴して、途方に暮れたる風情なりしが、頓て人在る方に引返しつ。閑雅に小腰を屈めて、

「少々御訊申しますが、あの、豫備兵の者に面會致しますには、彼へ參つて宜しいのでございませうか。」

其聲は尋常ならず戰けり。

彌次馬は忽ち噪立ちぬ。

「いよう高島田！」
「御心配筋！」
「大井川は川止でござい！」
美人は身を竦めて立てり。
「何だ〳〵？えゝ、もし何です。」
「女だ〳〵、」
「女が如何か爲ましたか。」
「女が來たんです。」
「それから如何しました？」
「彼處に立つてます。」
「何處に〳〵？」

「えゝ恁麼女ですえ。」
「頗るものださうでございます。」
「娘ださうぢやございませんか。」

傍より喙を容るゝものあり。
「年頃十七八、束髪です。衣服がといふと、絽の紋服の裾模様。まづ華族方の令嬢でせうか。」
「はて、ねえ、ふうむ。」
「それで容色がといふと、二目と見られない大痘痕。」
「やれ〳〵氣毒な。」
「それが男を慕つて、此兵營まで追駈けて來たといふ筋でさ。」
「へえゝ、絽の裾模様で大痘痕は困つたね。所謂惡女の深情ですなあ。」
「もし、貴方は精しく御存じで。御覽なさいましたか。」
「いえ、何、これから見る所で。」
「それぢや、もし、絽の裾模様で大痘痕は揑詞ですかい。」
「はゝゝゝ、大方其邊だらうと想つてな。」
「えゝ馬鹿々々しい、何の事た。」
衆多の手は闇中の美人を摸索して、群盲の象を撫づるが如く評し合へり。幸にも美人の物言ひかけたるは老實の人なりき。渠は最苦に誨へたり。
「豫備兵の御方を御尋ですか。はて、それは御面會は難しうございませうよ。」

「然やうでございませうか。」
美人は泣くにも泣かれず思惑ひぬ。問はれたる人は憐を催して、
「いづれ二三日内には繰出すことになるといひますから、いよ〳〵となれば、一日暇が出るさうですから、それまで御待ちなさいまし。今晩は到底無効ですよ。不斷と違つて、這箇場合には、入營してしまふと、誰にも會せないといふのが、これが陸軍の規則ださうで、何故と謂ひますとね、慾つか親子や兄弟に會ひますと、折角張りつめてゐた氣も弛まうし、怯氣も出ようといふものでせう。そこですから一切面會は許さない事になつてゐるのださうだ。」
何ゆゑなりけむ市民の多少は如此妄信せるなり。
「何方へ御歸か知りませんが、お若い女中衆の事だ、餘り夜の更けない内に早く御出でなさいまし。」
「はい。難有う存じます。でも或恐今晩にも出師とかいふ話ではございませんか。」
「左樣、そんな話もありますけれど、虚説です。」
「然やうでございませうか。」
仍久し佇みたりしが、やう〳〵心や定めけむ、
「どうも御深切に色々難有うございました。」

「もう御去でなさいますか。あゝ其が宜しうございます。」
美人は暇を告げて、歩むと謂はむよりは寧動きつゝ、悄々と去れり。然れども其足は兵營の方に向ひぬ。諭せし人は氣遣しげに見送りたり。
緩き歩を進むる美人の姿は、遂に闇黑に紛れて見えずなりければ、渠は思に堪へかねて、左にも右にも兵營に抵らむ意なるべしと、見送れる人は思へり。彌次馬は再び擾々として詈り合ひぬ。
折しも迢に認められたる長提灯の光は、慌だしく此方を指して近きぬ。
軈て駈着けたる男は、おのが提灯の火影に因りて、廣袖の浴衣に黑八丈の三尺帶したる俠姿をば明にせり。輕く衆人に一禮して、滿面の汗を拭ひつゝ、
「えゝ、もしや此邊へ孃樣風の娘が參りや致しませんか。」
「來ましたよ。」
「參りましたか。」
「紹の裾模樣の大痘痕かね。」と謂すものあり。
「えゝ何です？」
「あの兵營の方へ行きましたッけ。」
「そりや何時頃で？」

「唯今さ。」
「そいつは難有え！どうも御世話様。」
長提灯は忽ち塹畔を傳ひて走りつ。兵營門前なる爪頭高の半に抵りて留りぬ。渠は果して尋ぬる人に會ひけるなり。
「お嬢様！貴方はまあ如何あそばしました。」
「おや、徳藏かい。」
「徳藏かいぢやございませんよ。御邸は大騒動でございます。やれ、まあ是で安心した。私は、もう眞箇に、如何遊ばしたかと思つて、肝を潰しました。あゝ、難有え難有え。さあお嬢様お供をいたしませう。」
美人は袂を咬みて頻に兵營の門を望めり。
「さあ、お嬢様！」
「あいよ。」
「旦那様も奥様も大抵な御心配ぢやございません。方々へ御人が出るといふ騒ぢやございませんか。さあ御供をいたしませう。」
「不要よ。」

「不要よぢやございませんよ。御邸へ御歸りあそばさずに、如何あそばすのでございます。」
「可いよ、私は家へは歸らないのだよ。」
徳藏は須臾眼を睜りて、其決心の色を打瞶れり。
「飛んでもねえ事を有仰らあ。一體まあ、ど、ど、如何したつてんでございます。」
「どうしても可いよ。私は些と此邊に用事があるのだから、それが濟次第に歸るから、お前は一足先へ歸つてね。……」
「御冗談おつしやらあ。」
「父様にも母様にも、能く然う申上げておくれ、ね。」
「御冗談おつしやらあ。」
「私は別に何處へも往きはしない、此處に居るばかりだから。」
「御冗談おつしやらあ。」
「よう、徳藏、可いからお前歸つておくれよ。」
「御冗談おつしやらあ。考へても御覽なさいましな。ねえ、這箇大の男が御迎に參つて、そ、そ、そんな輕忽な事を言つて、空手で歸られる譯のもんぢやございやせん。」
「だから私に會はなかつたと云つて歸れば可いぢやないか。」

「御冗談おつしやらあ。小兒の使ちやございません。どうでも否だと有仰れば、徳藏は無理にも御伴れ申しますよ。」

「あゝ無理に伴れておいで。私は途中で遁げてしまふから。」

「えゝお遁げなさる！そりや驚きましたな。」

徳藏は頭を搔廻して當惑せり。

「御嬢様、一體何の御用なんでございます。」

「何の用でも可いよ。」

徳藏は額を搔きて口を噤みぬ。然れども夜中此邊に露立せる令嬢の深意は、渠業に仄に識れるなり。

「おやお嬢様、かう遊ばしまし。何しろ夜夜中、いつまで道端に立つていらつしやれるもんでもございませんから、醜穢ところでも、私の家まで左も右も御供いたしまして、又私でも御用に立ちます事なら、何なりとも御遠慮なく。」

「そんな事を云つて、おまへ家へ伴れて行つておいて、竊と母様に知せようと思つて。」

「あんな事を有仰らあ。徳藏だつて男でえさ。」

「屹度かい。」

九

豫備後備兵員は入營の後五日にして、始て市中の散歩を許されき。是正に其翌日を以て三軍遠征の途に上らむとする最後の休暇にてありけるなり。旅團は混成なりければ、清澄が屬したる聯隊は、恰好於莵介に同じかりけるをもて、傾蓋の契は茲に忽ち刎頸の交とはなれりけり。

此日野川少尉は竹中曹長と倶に外出せり。清秀の美丈夫と、魁岸の偉男子とは、兩々手を携へて、驚く可き正反對の裡に、謂ふ可からざる好配合を見して、見迎へられつ、見送られつ、威儀堂々として緩行せり。

野川少尉の面は、東雲の天を望むが如く、活氣と喜色とに因りて著しく輝きぬ。是昨日の醫學生風間清澄なるか。曹長は今猶疑へり。相並びて歩みつゝ、渠は屢々其横顔を覷ひて、私に心の點頭を呻くこと頻なり。少尉は訝しみて、

「君は如何したのだ。」

「感服しました。」

「何を感服したのさ。」

「始は處女の如く、後には脱兎の如し。貴下の事だ。」

「私が何故？」
「失禮ながら貴下が是迄とは、私は想ひませんでした。天晴、天晴だ！於莵介實に嬉くてなりません。嗚呼立派だ、立派な小隊長！」
曹長は兩の拳を固めて、其感情を表せり。少尉は卷莨の灰を吹きて微笑みぬ。
「竹中君、兼六園の恥辱を雪ぐ時が來ましたよ。」
「然、然です。立派にお遣なさい。」
「金鵄章でもねえ。」
「然、金鵄章！欲いですなあ。」
恁語ひつゝ、大橋に近けば、橋詰に山成して人の屯したるが、忽ち手を拍ち、聲を合せて、陸軍萬歳と絶叫す。唯見れば、義士效節之秋、報國丹心、などと記したる旗四五旒ばかりも推立てたり。
曹長は少尉に向ひて、
「ありや何ですかな。」
「また馬鹿な。」と少尉は苦笑せるのみ。
「蜻蛉組だ。」と劍欄を握りて、曹長は瞋れる眼を向けたりしが、

「少尉殿、おもしろい、兼六園の復讐を！」
清澄が渾身の血は焚ゆるばかりに熱して、髪の逆竪ち、四肢の顫ふを覺えぬ。然れども、渠は堅忍して言へり。
「大人氣無い。構ひたまふな。」
此時既に兩箇の間近に來れるを迎へて、壯士等は再び萬歳の聲を揚げたり。
野川少尉は其面を見せじと、軍帽の庇を深め、尚日影を遮る爲して、弓手を額に翳しぬ。曹長は渠等の爲むやうを見むとて、嚴しく眼を晃かせり。兩箇は歩を進めて、恰も橋の袂に蒐れば、一箇の壯士進出でて一揖し、
「蜻蛉組一統謹んで諸君の出陣を祝し、聊か御餞別の證を獻じまする。」
挨拶訖ると共に更に進出でたる一人あり。渠は目鼻を刻みたる蔓附の西瓜を、恭しく榛の三方に載せて、兩箇が前に擎げつゝ、
「失敬、これは清奴の首でござる。之を箇樣に致して。」
と呀聲をかけて地上に投着くれば、一齊に吶喊して之に應ぜり。醜虜の頭は破裂して、肉飛び、血迸る。壯士等は地蹈韜を踏みて叫びぬ。
「ちえゝ、愉快！軍神の血祭！」

渠等は兵士の通行する毎に、必ず迎へて爾爲しと覺しく、粉齏せられたる西瓜の屍は累々として、四面を浸せる紅は血河を流せり。

少尉は苦笑一番して過ぎむとせしに、曹長は頗る嫌惡の色を作して、

「何ですか、是は？　我神聖なる帝國を清奴如きの血に汚して堪るものか。怪しからん兒戯だ。速に清めんければならん。君等も手を假したまへ、掃除を爲る。」

箇裡幾多の壯士は箇下士官を見識りて囁けり。

「彼奴だぞ。」

「彼奴ぢや〳〵。」

「能う出て來る奴ぢやなう。」

「彼奴全で狂漢ぢやなあ。」

識らざる輩は呆れて立てるを、流眄にかけて、曹長は徐に戎衣の袖を攘げ、屍は盡く之を犀川に投じ、流血は水を濺ぎて痕無く洗ひ去りぬ。

此時始めて少尉の面を認めたる一人ありて、私に其友と語る。

「おい、あの少尉の面を見い。」

「おれも向から見とるのだ。非常に風間の……」

「肖とるぢやないかな。」

「彼奴ぢやあるまいなう。」

更に一人あり。額を差寄せて、

「何か、何か。」

「貴樣あの少尉の面を見たか。うむ、不是、貴樣は近眼ぢやつた。」

又一人頸を延べて、

「何か。えゝ何か。少尉が如何したかい。」

「あの少尉な。風間の、それ、清澄な。彼に能う肖とるぢやないか。」

「やあ、然ぢやな。肖とる、肖とる〳〵！」

兼六園内に天誅を加へし壯士等は、盡く視線を集めて野川少尉を覬へり。然れども渠等は唯其肖たるを異むのみにて、亂打罵倒も其効あらざりし卑屈野郎の風間清澄ならむとは、夢にも思懸けざりしなり。

曹長はやう〳〵掃除を了りて、

「いや此で快然した。少尉殿、御待遠でございました。」

「御苦勞でしたな。」

相見て噱然一笑を發して去らむとする時、衝と進み出でたる壯士は慌忙兩箇を呼住めたり。
曹長は澁々顧みて、
「何ですか。」
「唯今の所爲が頗る面白い、感服いたしました。是非御姓名を伺つて置きたいので。私は石川縣士族赤根半五郎と申します。」
「あゝ然やうですか。私は福井縣下牛首村の土百姓竹中於菟介。」
「はゝ。其方の少尉殿は？」
清澄は壯士を睨と視たり。壯士も清澄を打瞶れり。
「御存じでせう。貴下は疑是御存じの理だ。」
壯士は小首を傾けて、
「いや、一向どうも。」
「あゝ然ですか。私は姓は卑屈といひます。」
「はあ。」と壯士は眉を顰めて耳を差寄せつ。
「何と有仰いますか。」
曹長は肩を搖り、鼻を皺めて懼べり。

「姓は卑屈、名は許多あります、無氣力、破廉恥、不忠不義とも、國賊とも。」
壯士は愕然として後退りぬ。清澄は聲を勵して、
「實名は新聞紙上で名乘りませう。」
「大出來、大出來、大出來！」
と我を忘れて曹長は踴躍りぬ。

十

時維明治二十七年八月中旬、曉天爽かに、殘月依稀として、氣清く露冷かなり。俄然三發の砲聲爛烟天地に震ひ、進軍の喇叭嘹喨として金澤城の南門に起りぬ。
白山颪に日御旗を颯と飜し、征師烈々として鐵楯の推すが如くに繰出したり。先鋒既に町盡頭に達る時、後軍未だ城を出でず、蜿蜒一里が間に麗りつ。輜重兵の後に續きて、數十輛の荷車を挽く運搬夫の一隊あり。
その第七の車を曳けるは、逞しき漢子と媚ける少女となり。渠は手拭を以て面を裹み、目深に菅笠を戴き、手甲脚絆に身を固めて、陋き衣を着けたれども、絡を泄る膚の色は冷艶雪を欺きて、風采自から匂やかなり。

「源兵衛様、今のを御覽なすつたかい。」
「え何を？何ですい。」
「あれを見逸すとは心懸の惡い事だ。いやはや、其ぢや如何も御話にならない。」
「眞箇今のは彼は何でせう？」
と傍に御話になる人あり。甲は欣然として、
「御覽なすつたか。」
「拜みましたよ。夫婦でせうかな。」
「いゝえ、全然品が差ひまさあ。第一あの纖々と華車な鹽梅しきといふものは、梶棒へ執まる格ぢやありませんや。」
「えゝ御尤、私は又異な所を見たんで。」
「異な所？どういふ所を、えゝ、どういふ所を。」
源兵衛は矢庭に悲鳴を揚げぬ。
「あ痛、痛、痛、平助様、痛いぢやありませんか。貴方は靴ですね。」
「やあ、踏みましたか。どうも濟みません。」
「貴方は女の子の話になると、からもう目の色を變へて懸るから恐しい。」

「何しと、然いふ譯でも無いけれど。えゝ、もし、その異な所といふのは？」
「彼が一寸汗を拭きました、左の手でな。すると其手が如何も……」
「駢拇ですかい。」
「御冗談ものだ。まるで白魚を並べたやう。仰の通り、梶棒へ執まる格ぢやありません。」
然矣、渠は洵に箸より重きをば持たざる人なり。第四高等中學の講師、ドクトル陶得道の令孃圓が假の姿なればなり。
諸君は向者兵營門外に彗星の爭論ありける夕、豫備兵を尋ねし美人を記憶したまはむ。渠は今日の賤女圓にてありけるなり。
其夜の德藏なる者は、陶家累恩の出入にして、渠は人力車の貸付を營み、なほ數人の曳子をも養へり。
圓は今一度清澄を見るに非れば家に歸らじとて、如何しても肯ざりけるより、德藏は左も右も我家の奥に匿ひて、豫備兵に面會すべき手段もがなと、纔に工夫したる一の窮策なり。
かねて德藏は此際報國の一端をもと念ひしに、幸ひ運搬夫の募集に會ひければ、わづかの旅程なりとも從軍の榮を得てむと、夫婦倶稼の趣を以て願出で、其妻をも携ふべき許可を得たり。因りて女房に換ふるに令孃を以てして、人夫の行くべき所迄軍隊に從はば、清澄に會ふべき首尾の

なからむやはとて、恁は計ひたりしなり。

咨嗟、圓が這般の焦心苦慮は却りて其の志す所を害ひき。不幸なる圓よ、野川少尉が最後の休暇を得て、陶先生に永訣の謁を致せし日、則ち爾が愀然として德藏の家に潛みし時。

十一

此日一天快晴、熾日赫々として炎煇燬くが若し。正午より午後四時に至る迄、寒暖計は華氏の九十五度より七八度の間を昇降せり。

遠征の兵士は半冬半夏の服裝にて、背囊を負ひ、小銃を肩にし、外套を擔ひ、銃劍を帶び、彈藥を携へたり。此重量を身に着けて遠きを行かむか、嚴寒凜冽の候と雖も猶且汗流れ、息喘ぐべし。況や溽暑の伊鬱たる此日をや。三軍の辛苦實に想ふべきなり。

然れども義氣忠膽金剛の不壞なる我神州男兒は、日御旗の風に志を奮ひ、滿洲の雪を心に念じつゝ、銃口天を指して亂れず、健脚地を蹈みて挫けず、全軍肅々と歩を進めて、午後一時に垂んとする比、北陸七大川の隨一と聞えたる、手取川の邊にぞ着きたりける。

今や炎威の絶頂とも思しく、天は一面に晃き亙りて、仰ぐべきやうも無く、渺々たる河原は石鑠け、砂煎られて、其幅一里と名だたる大河も、連日の旱に涸れて、纔に細流の二條三條帶を曳

きたるやうに逶迤たり。

忽爾何者か、列を亂して、朽木の如く横樣に卒倒せり。一隊あはやと歩を住めぬ。看護卒はばらばらと駈寄りて抱起せり。

軍醫は一診して叫びぬ。

「害れたか、日射病だ！」

何處よりか、其身を擲つ如く飛して來れるは、曹長竹中於莵介なり。

卒倒者を屹と視て、

「南無三！野川少尉か。」と尻居に挫と僵れたりしが、そのまゝ這寄りて、患者の面を差覗き、

「少尉殿、野川少尉殿！竹中於莵介です。確乎したまへ、少尉殿！」

兵士は番號を唱ぶが如くに此訃音を傳へぬ。

「誰だ！」

「野川少尉！」

「何か？」

「日射病！」

「誰が如何した？」

「野川少尉が日射病！」
「日射病で卒倒した！」
「野川少尉が日射病で卒倒した！」
未だ三分時を經ずして、全軍野川少尉の卒倒せるを認知せり。
折から一文字に整列せる兵線を掠めて、顚けつ、轉びつ馳來る運搬婦あり。其後より兩手を擧げて追ひつゝ、
「出ちや惡い。これ御待ちなさい。えゝ、これ、もし。」
と周章狼狽は德藏なり。
假裝せる圓は早くも患者に近きつ。身をも人をも忘れて、飛附き、取縋りて、哭出しぬ。
看護卒は一驚を吃して、
「何だ〳〵、是は。」
軍醫は呆れつゝ箇運搬婦を觀察せり。德藏は其前に踞ひて兩手を支へぬ。
「へい〳〵、どうも恐入りましてござりまする。えゝ、何卒穩便の御沙汰を願ひまする。」
曹長は猪首を捩向けて德藏を見遣りつ。
「何だ、一體汝達は？　此女は何者だ？うむ。」

「へい〳〵、此方は野川樣の、その、何で……」
「野川樣の何だ？野川少尉殿の名譽を汚すやうな事を申すと、不問は措かんぞ！」
曹長の一睨は電光を耀かせり。德藏は一縮になりて色を失ひぬ。泣俯したりし圓は、矢庭に菅笠を搔投捨てて、憤る面を瞻げたり。
海棠雨に惱み、梨花月に愁ふる華容、四邊の衆士魂を奪はれて立てり。
「野川淸澄の妻圓と申すものでございます。」
看護卒の一人は注意せり。
「少尉殿、手當を爲ます。劍をお放しなさい。」
他の一卒は其固持せる劍を引放さむとせり。
半生半死の間に昏々たりし野川少尉は、此時漸く人心地を覺えて眼を睜きぬ。
「いや、放さぬ。死ぬまでも放さぬ。」
軍醫は再び注意せり。
「それでは手當が出來んがね。」
「之を棄てて戰鬪力を失ふことは、軍人たるものの義務が容さぬ。此の儘死なして下さい。本望だ！」

圓は聲を放ちて哭きぬ。曹長も拳を握りて、玉走る涙霰の如し。

「天晴だ、天晴だ！よ、よ、能く有仰つた！　立派だ！立、立、立派なものだ！」

渠の勇敢義俠なるも、眼前死と闘ひて、今や其毒刃の下に殪れむとする親友の急を救ふ能はず、健勁の腕を束ねて、空く其絶命を傍觀せざる可からざる曹長の腸は九廻せり。

恁と聞くより此處に聚りたる騎馬の將校は、勇壯なる病者を圍みて、駒の頭を立聯べたり。

清澄は最期の眥を決して此體を見るより、勃起と身を擡げて、

「我軍萬歳！」と辛くも一聲叫びて、揑となれば、將校等は一齊に軍刀を閃めかして答禮せり。

渠は瞑するに先ちて明かに貞烈なる圓の美しき面を見つ。纔に片笑みて頷きつゝ、刎頸の知己竹中於菟介の手に抱かれて、敢なく息は絶えたりけり。

唉、野川少尉は遂に死せり。渠は死したれども果して其劍をば棄てざりき。渠は死したれども、親友は其軀を放たざりき。渠は死したれども、貞婦は其傍を去らざりき。

悽愴たる喇叭の音は薤露の曲に噎びぬ。渠が部下の兵士は涙を揮ひて唱へり。

吹きなす笛の其音も、　捧ぐる旗の其色も、
人の哀感を知貌に、　今日は物こそ悲けれ。
千百萬の敵軍も、　只一擊の大丈夫と、

思へる我等の袂こそ、　涙の雨に濡れにけり。

忽見る紫髯毳珊として古貌の氷稜たる一將軍、馬を下りて徐に遺骸の前に進み、恭しく一揖して、故陸軍歩兵少尉野川清澄の靈を祭る。

「嗚呼、君が臨終の忠烈なる言行は、誠に以て我帝國陸軍の精神を發揚するに足る。全軍の將卒皆謹んで君が意を體せむに、百萬の敵何か有らむ。忠を攄べ、職を盡し、死に瀕みて渝らざる君の如きは、其節天地に愧ぢず、其名千載に朽ちざるものなり。我軍再び此處を過り、改めて君が靈前に清酌庶羞の奠を陳る日は、斷じて誓ふ、當に是六師振旅凱旋門に赴く途次なるべきを。一死報國の志士、尚くは瞑せよ。混成旅團長敷島國臣衆に代りて述ぶ。」

海戰の餘波

一

去にし月父なる松枝海軍中尉が戰艦に乘組みて、行方見果ぬ海の外に遠き船出をなせし後、一子千代太は慈愛深き母親に伴はれて、その故郷の越後に歸れり。

母なる人は其夫の遠征中は、何に就けても心置かるゝ都會の者と交りて、萬事に配慮を爲むよりは、寧ろ故郷に歸りて朴訥仁に近き幼馴染の古老輩と、心閑に世を送り、一切の氣苦勞は擧げて之を千代太が教育に注がむずる意にて、紅塵萬丈の地を避けしなり。

母はまた千代太をして、海國の男兒たることを忘れざらしめむがため、且其海軍士官の兒なることを記憶しつゝあらしめむがため、常に身の周圍の外物の刺戟に因りて、其感情と嗜好とを左右せらるべき幼者のために、田舍にても最も水に近き地を擇びて、當時海岸に住ひたり。然まで用意の周到なる賢母の手に養育せらるゝのみならず、生來賢き童なれば、日々の戲さへ、今年やうやう九歳の腕白盛に似もやらで、往々人目を驚かすまで大人びたれども、さすがに頑是無く、寢覺も父を慕ひて、父をして遠征に趨かしめしは、母の所爲にてあるかの如く、其不在を母に怨

みて、其歸宅の晩き理由を、母に詰ること屢なりき。

固より父が境遇たる、豫て母に諭されて、君と國とに盡すべき義務のためには、妻をも子をも顧みざるが、日本國民の國民たる所以なることを知りつゝも、なほ戀しさに堪難き胸中無量の憂愁は、其幾分を洩したさに、益無きことを繰返しては、然らでも濡るゝ母夫人の、冷たき袖を絞らせけり。

千代太は學校に通ひけるが、毎日五時間の授業を果てて、家に歸れば母の前にて、迅速に、流暢に、其日習ひし處を復習し、これを終れば己が隨意の遊戲を許さるゝが例なりしが、千代太は其時間の全體を、濱邊に出でて盡すこと、殆ど日課の如くなりき。

北海の荒磯浪高く、天低く、眼界の果は海と接して、大なる圈線を形造れる其外にこそ、父は軍艦とともに在すなれと、千代太は砂山の上に立ちて、其手を翳し其足を爪立てて、以て其休暇時間を費すなり。

然れども眼球に入るものは、縹渺たる水天と、點々たる帆影と、時に雎鳩の翔くるあるのみ、如何してか乃父の隻影を捉へ得む。

千代太は固より然かすることの、父を見ま欲しき願に對して、何等の益も無きを了せり。知りつゝもなほこれを罷め能はざるは、人が其亡父母の墓前に跪くや、尊靈我とともに在して慰め給

ふ心地すると齊しく、千代太も亦父が彼處に在りぞと思ふめる海の果を見晴す間は聊か哀さを忘るればなり。

至情然もあるべきことと思へば、母は其の行を非難せず、却りて千代太の父に篤きを喜びしが、一日唯一度渠が海に行くを制せしことあり。

其は恐るべき暴風雨の日なりき。

「千代太や、今日だけはおやめになさい、誰も濱へは出ないから。」

と母は其日も風雨を冒して出行かむとする千代太を留めぬ。

母の命令は何事も背けること無き童なりしが、如何なしけむ此時ばかりは、

「否、浪の來る處までは參りません。」と清しき眼に母を見て、心の不服を訴へ顏なり。

母はなほ危みて、

「でもね、何時何様な高浪が天窓へ冠つて、足を攫はうも知れません。此邊は遠淺で不斷浪が荒いのですもの。豫て聞いては居ようけれど此濱續きで親不知といふ難所があるがね、其渚を傳ふ旅人は、一つ來て次の浪が來ない内に、斷崖の洞穴の中に隱れないと、直に海の中へ引かれてしまひます。其處は神様の御方便で、ちやんと人を助ける爲に、左様いふ岩洞を拵へて置いて下さるけれど、此邊は平生其様でないから、それこそ浪に取られる時、捉まる楯もありません。一體

斯ういふ暴風の日には行くに及ばぬ處だもの、推して出るのは惡うございます。ねえ、解つたかえ？」と懇に諭しける。

謹聽しつゝありし童子は俄に遮りて、

「母様、それでは此様な暴風の日には、父様は何うなさいます？」

と疑の眼を母に注げり。

母はギクリとして俯向きぬ。哀と思ふ渠の胸は此一言のために如何ばかりか疼痛を感じけむ、再び千代太の顏を昵と見たる、慈愛の滿てる眼中には、早一滴の露を湛へつ。

答の無きに千代太はまた、

「僕は御見舞に行くんです。海に在らつしやる父上を。僕も雨風は嫌だから、父上も何なにか。ねえ、母様。」

母は思はず引寄せて其兒を胸に抱緊めぬ。

其實雨に着物を濡して、濕氣を請けむを恐るゝより、浪に託けて遣らじとこそしたれ、浪打際を遠く離れて用心だにしてあらむには、さしたる危險も無きにしあれば、千代太の衷情を聞くに及びて、母は爭でか拒むべき。其健氣さに涙を飲みつゝ、

「そんなら行つておあげなさい。お前の優しい志が浪を通つて父様が風の音信に聞かれたら、

何んなにお喜びなさるだらう。しかし浪が高いのだが一人で行つても恐くはないかい？」
「浪は軍艦の家來だから父上の親友だつて、母様が平時左様お謂ひだもの、些少も恐くはありません。」
母は額に手を加へて、思はずも微笑まれぬ。
「おゝさうでしたつけ、不可い母様だ、忘れて居たよ。それでは行つておいでなさい、でもよウく氣を着けるのですよ。」
「唯、氣を着けて參ります。それでも攫つて行かうなんて、失敬なことをすりや、叱りつけて遣ります。」
と英氣の色に溢れたる、紅顏輝くばかりなり。
母も勇みて打頷き、
「あゝ、其元氣で行くが可い、而して早く歸るんですよ。今日は平時と違つてね、母様は何んなにか案じて居る。可いかい。さあ行つて宜しい。」
許可を得て千代太は外套に身を包み、頭巾目深に引被り、長靴の紐固く緊めて、
「左様なら、母様。」
送り出でたる母は繰返して戒めぬ。

「忘れても浪の際へ行くんぢやないよ。」
「あい。」千代太は母の意を體して、濱邊を差して、出行きたり。

二

海陸風の手に攪亂されて灰汁の如くに混濁せる、天地間一物無し。怒濤と暴風雨の聲あるのみ。譬へば風が大海の水を逆にして大空に齎らし去りては直に沛然たる雨となして、舊の海に返すことを幾度も繰返すといふの外なきなり。唯眞砂がなれる海濱の小高き丘に沿海を警戒すなる、一個尺餘の赤球の、冥濛として暴風雨に立てる一點紅は、あはれ太陽が其燃材を失ひて、今や滅亡の期の來りたる、地球の末路を見るに似たり。
恁凄まじき活畫の中に出來りたる人物あり、これ卽ち千代太なり。
粉碎されなむ風雨の中へ、四尺に足らぬ單身を、投出したることなれば、天窓より爪先まで靴と外套とに眞黑の姿は、宛然一個の蟻の如く、荒べる風伯の一息にあはや天外に飛ばむかと、見る眼も最ど危きを、素養の力か、天性か、這少年の泰然たる、千曳の磐に異ならず。亭として蠢立しつゝ、屹と海面を瞰下す狀、父はいかなる人傑ぞ、げに栴檀は嫩より香しといへる語は、千代太の爲に先人が、作り置きしが如くなり。

良ありて暫時は唯波のために奪去られて殆ど他に一物を辨ぜざりし千代太の眼に、ちらと遮るものこそあれ。

渚を去ること半里餘の海中に、辨天岩と呼ばるゝ一雙の岩の對峙して、四五間水面を拔ける邊には、名も知れざる恐しき暗礁の七ツも八ツもありとぞ謂ふなる、其辨天岩の側面に、黑き烟の團々として渦卷き騰るを見るとともに、非常を知らする汽笛の響、救助を呼ばはる鈴の音、萬雷の浪を鎭めて、手に取る如く聞えたり。

「やあ、難船だ。救助船——出て來い——救助船——」と千代太は狂して呼立つる。

ほどもあらせず、近隣より篠突く雨をものともせで、赤條々に向顱卷、藁繩の腹卷したる漁師船頭ばら〳〵と駈附けて、赤球の下に群りつ。海に向ひて立並べり。

「船は何だ、難船つたなあ何處の船だ。」と伸上りて見込みつゝ船頭の一人は叫べり。

一人は顏に浴ぶる澈を掌以て拭ひながら、

「今着く船は北國丸だ。むゝ、辨天へぶつかつたと見える哩。」と及腰になりて前面を透しぬ。

「否、乘上げたに違ひ無い。暗礁だ〳〵。」と傍にて呻く者あり。

親方株と覺しきが、

「何しろ見ちやあ居られない。しつかりやれよ。」

の聲の下、一同は口を揃へて、

「おう、合點だ。」

咄嗟に救助船を出すことに決せしかど、怒濤の猛威天を衝きて、渠等が立てる天窓の上を、見上ぐるばかりに逆卷くのみか、眼口も開かぬ吹降なれば、いざ船といふ場合に到りて、孰も顏をば見合せたり。

海には必死と非常を鳴して、應援を呼ばはりしが、疾に救助船の發せざるため、最後の手段を取れりと覺しく、忽ち見る蘆一葉、溢るゝばかりに人を積みて、山なす浪の頂上へ漂々乎として泛び出でしを。俄然一墜波脚に沒し、忽然一昂波頭に顯れ、見えつ、隱れつ、搖々と天地の間に上下せり。

陸なる、群集はこれを見るより、

「そら出た、南無三！」と一同に諸手を上げて麾き、

「しつかり〳〵。うんと行れ。氣を着けろ。やい。危ないぞ。」

聲援するを聞くや聞かずや、海なる舟もいまを限に救を呼ぶ聲頻なる。中にも乘組める婦人の悲鳴は、針の如く細く徹りて、此方の耳を貫けども、風雨の猛威に壓伏されて、唯茫然たるばかりなりき。

海上の危機は愈々迫りて早船を呑まむずと見えたるが、未だ救助船の赴かざるを、波を恐るゝ故とは知らで、陸にて短艇の危急なるを認めぬためと思へるやらむ、乗組の中の、一人のぬつくと艦に突立ちて手巾を掉れりし者は、傾く船に足場を失ひ、もんどり打ちて投出さる。これと同時に婦人一人くる〳〵と宙を舞ひて、逆巻く浪間に陥りぬ。

千代太は前より群集に向ひて、船を出して助けよと、聲を嗄して呼びつゝあれど、渠等は只管狂激したれば、千代太の呼ばふを聞入れざるにぞ、一人の船頭の手を捉へて語らむと試むれば、其誰なるかを見極めもせで、「邪魔だ。」と振拂ふに詮方なく、唯氣を苛ちてありつるが、今眼前人の命を二つまで浪に取られしを見るよりも、千代太は口惜さと無念さと、はた遭難者の哀さとに、感慨滿ちたる胸破れて、一聲わつと泣出せり。

「や、や！松枝の若様か。何うしてまあ。こりやえらい、ずぶ濡だ。」

とはじめて千代太に心着ける船頭の一人は、其前に踞して其肩を撫でつゝ斯く言へり。他の一人は背後より背を擦りて、

「若様、何うなされました。え？え？　何だかお泣つてて解らないが、まあ何しろこれぢや堪らないや。」

鬼を欺く荒漢等も、豫てこの若様の愛らしきと、其母親の美しくて、氣高くて、然も憐愍深きと、其父が海軍の士官たると、この三條の感情よりして、太く母子を敬愛したれば、今や千代太の泣き居れるを何かは知らねど慰めなむとて、徐ら幼兒を抱かむとせり。

浪の上には貴重なる人間の生命幾十個か、打棄てあるを拾ひはせで、一人の童子の笑顔を買はむとするを怪む勿れ、渠等は此浪の恐るべき、救はむとする者が却りて先づ救はれざるべからざるを觀破して、止む無く難破船を棄てしなれば。

千代太は我を抱かむとする船頭の手を叩き拂へり。

「嫌否だ。嫌否だ。」

「ほい、御機嫌が惡いわい。何をお泣きなさいます。」と太き眉を顰むれば、

「あれ、可哀相ぢやないかなあ。」と千代太は船を指さしぬ。

「えッ、なに、可哀相だとおつしやる？」

千代太は頷けり。

船頭は天窓を掻き、

「こりや何うも、」と一人を見向きて、「ねい、おい。」

渠は頻に揉手をしながら、

「それはもう、私等だつて若様よりは十層倍も、可哀相とは存じますが、此暴風雨ぢやあ助りま

せん。是非も無い理窟でさあ。」投出したる言分なり。
「でも救助船々々ッて謂ふ、船を出して助けて遣れ。」
と命ずが如くに言へり。
船頭等は口々に、
「何うして〳〵、滅相な。此浪に船が出せますものか。此方人等だつて神ぢや無し、人間業にや叶ひやせん。」
千代太は熱し詰めて拳を擬し、あはや冷かなる船頭の面を打たむとしつ。
「何だつて浪が恐い、浪は船の家來ぢや無いか。父様が在らつしやればきつと助けてお遣りだア。父様は軍艦に乘つてるんだい。後に僕だつて乘つて出らあ。海は日本の友達で、父様とも友達だつて、母様が左様いふんだ。恐かあ無いから船を出せよ。僕が乘るから大丈夫だ。船を出せ。え、弱蟲め、皆が嫌なら船だけ出せ。僕一人で助けて遣る。」
激聲叱咤暴風雨の聲を凌ぎて、赤鬼どもを驚かせり。
「何うだ皆、彼を聞いたか。むゝ……」と一人の船頭は拳を握りて決意の色あり。
一人はぽんと胸を拍ち、
「畜生！卑怯だ。死やあがれ。」

「己も命を投げようかい。」と手に唾したる壯佼もあり。
「人ごとだから退るものの、此方人等だつて船頭なら、戸板に乘つてる身の上だ。」
「むゝ、違ひない遣附けろ！」
これを聞ける千代太は踴躍りて、
「僕が船長だ、船長だ。」
「おゝ、若様が船長だ。」
「船玉様の生替りを戴いてりや大丈夫。」
「そら、ぐい極りの、しやんと占めろ。」しやん〳〵〳〵。手拍をなすや否やに、各自擔當の任務に馳せ、驚くべき機敏と熟練を以て、咄嗟に出來たる救助船、千代太が眞先に飛乘れば、續く船頭十二人右舷と左舷に六人宛、鍛上げたる腕を揃へて、曳乎！曳乎と漕出せり。
千代太は豫て幼心に斯くもあらむと推しつる、船長の威儀を現實して、肅然と姿形を整へ、冠れる頭巾も刎上げて、大風大雨に面を向け、怒濤を見詰むる眼は決然として、据れる膽を表はせるが、星の輝く異彩を帶びて、天晴備はる風采は、難波の船を救はむとて、天が降せる使に肖たり。
有恁半里にも足らざる海路を、一時間餘を費して目指せる船に漕附けたるは、いかに其航行の

困難なりしかを證するに、餘あらむ。

首尾よく被難者を助け移して、艪聲高く浪を切りつゝ、濱邊間近に漕戻れる時、淘然と寄せたる浪の中に、男女の死骸の漾へるあり。

之れ蓋し曩に短艇より過ちて陷りし二人ならむか、瞬間舷を掠めけるを、千代太は目疾く發見して、引上げなむと身の危きをも顧みず、兩手を伸して前へ屈める、ために軀の中心を失ひしかば、啊呀と謂ふ間もあらざりき。

三

有恁し後、千代太がはじめて我といふものの此世に在ることを心着きたる時、渠はまた木の葉の如き小舟に乘りて青海原に漂へることを發見しぬ。

時に暴風雨の名殘も留めず、一の黒點をも認めざる漫々たる海の面に、微風徐ろに波を渡れば、曇無き太陽の光に映じて、潑剌たる金鱗の躍るあるのみ、難波船はいかむ、舟子はいかむ、千代太は幾度も〳〵眼を拭ひては見廻せども、水天の他は獨我のみぞ物體なりける。

千代太は餘りの心細さに漫に涙を泛べけるが、（波は舟の家來）たるに心着きて、父の親友に打向ひ、「我はいかにすべきいかにすべき。」と幾度も繰返せば、

「勉めよや〳〵。」といふ如き聲ありて、渠の勇氣を呼起しぬ。

千代太は漸く胸を鎭めて、先づ越方を考ふるに、母の留給ひしを肯かずして、風雨を冒して海邊に出でつ、人の難船を救はむとて、舟子を促し舟を出し、あはよく被難者を助け終せて、舊の波止場に歸る折から、男女の死骸の漾へるを見て、救上げむとせし時水を浴びたりしまでが記憶に存して、更に其後のことを知らず。

現在小舟に取乘りて唯一人、天下海上の中に在り。塵かとも見む帆もあらず、空飛ぶ鳥の影もなく、東西南北緲として、水と空とに描かれたる、絕大の圓線の眞中なる、船は振廻の中點に齊し。

斯くて行末を如何せむ。

思來れば最大なる宇宙間に最小き我一人、心細さのみ彌增りて何等の計も出でざるなり。

此時しも千代太が懷しき父の我とともに在すことに心着きしにあらざりせば、渠は運命のために窮殺され終りしならむ。

幸に父が軍艦に乘組みて何處か海に浮べるを憶起しつ。浪のまに〳〵船を遣らば父は其在る處に我を導き給はなむと、こゝに心を定むれば、

「可し、勉めよや、勉めよや。」と浪は再び聲を擧げて、我を勵すやうなりき。

天の與へか舟中に艪も櫂もありけるにぞ、海濱に住めりし一徳は、何時しか見樣見眞似にて、形ばかり其爲むすべも心得たり。白く小さき掌には握るに餘る艪を押して、覺束無くも漕出しぬ。疲るれば休み、休みては漕ぎ、氣力のあらむ限を盡して、行けども〳〵舟は常に舊の處を繞るにや、一歩を進めし景色も見えず。

斯くては何時まで經てばとて、父は愚か、島の影をも發見すことの出來べきやと、千代太は精盡き、根疲れて、身體は綿の如くなり。

されば千代太は今更に、慈愛深き母の情の、身に染渡る心地して、故郷の空懷かしく涙さしぐむ眼をあげて、天の一方を望みたる、時に一羽の燕あり。咬々と囀りつゝ、背後の方より翔り來つ、嘴に啣へたる一本の棒の片を、海上目懸けて吐下せるが、船の間近に落來れり。

彼の燕はこれに乘りて悠々と休らひぬ。

家を出でてより幾日間か我の他に生きたるものを見ざりし千代太の、不意も故山の友に逢へる嬉しさはいかなりけむ、

「燕や、お前は何處から來た？」とさも親し氣に問懸くれば、

「日本から。」と答へたり。

「ではね、僕の母樣を知らないか。」と千代太は顏を斜にして、仇氣無く問ひぬ。

燕は頷きて、

「知つて居るとも。私の樣に早く歸るのは日本でも寒い國に居た分で、私はこれまで越後に居た。越後もお前樣の家の直近所が巣だつたから、能く知つてるよ。」と誇顏なり。

千代太は恰も母に逢ひたらむが如き心地して、

「さうしてね、母樣は僕のことを何とか謂つては居なかつたかい。」

と其音信を聞かむとすれば、燕は曲も無く、

「おゝ、謂つて居たとも、(母樣の謂ふことも肯かないで、故と海へ出た、彼樣な兒は私の兒で無い、何にするものか)と怒つて居たつけ。」

千代太はわつと泣出しぬ。

其聲に驚きて、燕は飛上り、何處とも無く翔去りけり。

千代太は唯泣に泣居たるに、忽ち半空より颯と落し來る翼の音、耳朶を震へるにぞ、打驚きて顏を上ぐれば、これぞ一羽の雁なりける。

燕が母を知れりし如く雁もまた父を知りてやあらむと、千代太はやう〳〵涙を拂ひ、

「お前、僕の父樣を知つてであらう。聞かしておくれ。」

雁は優しかりき。

「えゝ、知つて居れば申しませうが、坊様の御父上は何處の誰方でございますね？」
問はれてはじめて心着き、
「松枝といふ海軍の士官だけれど、何處に在らつしやるか、其が聞き度い。」
雁はハタと翼を拍ち、
「なるほど分りました。いや御機嫌ようございます。」
「おゝ、何處にお在だ？」千代太は嬉しさと、懐しさに、犇と雁に抱附きて、父に逢うたる心地せり。
雁は簡單に答へたり。
「海に。」
「海の何處だよ。」
「軍艦の中。」
「其軍艦は？」と千代太はもどかしげに問ふ。雁は落着きたる狀にて謂へり。
「萬國に比類無き日御旗の輝く處。」
「えゝ、其旗は？」と千代太は急きぬ。
「海、」

「海は？」
「軍艦のある處。」と雁は同一言をぞ云ふ。
千代太は其捉まへ所無きに困じ果てて、殆ど泣かむとせり。
「其軍艦が何處なんだよ！」
「（海の中に）と申すより、」と雁はさも〳〵氣の毒さうに、
「其外は申しません。」
「だつて其を聞かないでは何處だか分りやしないもの。」
「唯、分つてはなりません。」と嚴に言放ちぬ。
「雁や、そんなこと言はないで、後生だから、よう、聞かしておくれ。これだからさ。」と千代太は頑是なく掌を合して頼みければ、雁も哀を催しけむ、ほろ〳〵と涙を溢し、
「お聞かせ申し度いは山々ながら、坊様も海軍中尉の御兒では無いか。軍機を洩らしてならぬことは、天機とも同一い事は、豫てお聞きでございませう。御自分が艱苦を凌いで、屈せずお探しなされますれば、遠からず逢はれまする。おゝ、これはしたり、つい坊様のお可愛さに、天機を洩さうといたしました。これから日本に參ります、道が遠いから急がねばなりません。左様ならば坊様や。」と羽繕ひして立たむとせり。

「待つておくれ！」と千代太は縋り留めつゝ、
「もう聞くまい。僕も後に海軍士官になるんだぞ。しかしなあ、お前日本へ行くのなら、母様に逢つてお詫をしておくれ。僕は士官になるのだから、酷い目に逢つても泣かぬけれど、母様が僕のことを子で無いとおつしやつたつて、燕が左様謂つた。僕は士官になるんだけれど、母様が子で無いつて、僕は士官になるんだけれど。」
と身を震して泣入るにぞ、雁も涙を流せしが、其仔細を聞くに及びて、事も無げに涙を打消し、
「御心配遊ばすなよ。其は坊様が可愛さの餘、お怒りなされたかも知れませぬが、人の命を救はうため、坊様が遊ばしたこと、なに、却つてお譽めでございませう。いゝえ、私が承合ひまする。左様なことには御懸念無く、隨分身體をお厭ひあつて、無事にお歸りを待ちますぞ。」と雲井に高く舞上りぬ。

四

千代太は雁に別を惜みて、其行空を見送りつゝ、悵然たるもの久しかりしが、屹と心を取直して、再び船を漕出せる、水先五六町を隔つる處に、忽然として浮出でたる、楕圓形の黒體あり。沈々たる海の面に動かざること巖の如し。

時に眼界の果つる處、水天髣髴の間より、一縷の煙天に朝して、此方を指して突來れるが、近附くに從ひて、煙霧ます〳〵濃かに、團々として騰るを見たり。蓋し一艘の汽船なりき。千代太は遙にこれを見て、雁の豫言誠ならば、遂には父と再會の機來るべきなり。恐らくは今ぞ其期にて、彼の船に父の居給ふならずやと、瞬もせで瞻る内、漸次々々に進來て、彼の暗黑なる物體と、其距離甚だ近附くにぞ、排水の餘勢浪を煽りて、どつと黑魂に浴せ懸くれば、怪物は忽ち水を潛りて、水底深く沈みてけり。こは謂ふまでも無く鯨なりしを、襲來せる船に驚かされて、尾鰭を振ひたらむには、千代太が乘れる小舟の如きは、空氣以外に飛べりしならむ。然るに其ことのあらざりしは實に天助の僥倖なりき。

有恁間に件の汽船は、呼べば直ちに應ふべき近き距離まで來りしかば、待構へたる幼兒は諸手を擧げて打招き、

「父様――父様――」と聲を限に呼ばはりながら、船を其方に漕寄せつ。

唯見れば甲板に群がれるは、孰も象の脚の如きぶわ〳〵の衣を纏ひて、天窓に尾のある妖物なりき。

千代太は愕然として眼を睜りぬ。

汽船は直ちに短艇を派せり。戟、弓、或は鐵砲など、得物を取れる支那人等、都合十名乘込み

て、急に此方へ寄來れり。
敵國の民といひ、殊に害心分明なれば、千代太は衣兜より取出せる、鋭き小刀を引そばめ、寄らば突かむと思へるにや、少しも恐るゝ色あらず。精巧なる彫刻家の手になれる、小さき英雄の像の如く、舟の艙に突立てり。短艇は既に間近になりつ。
「何だい、こりや小兒だぜ。大の男が五人十人、得物を持つて馬鹿々々しい。」と支那の一人は、此方を指さし同輩を顧みて、啞々と大口を開きて笑へり。
また折敷に銃を構へて、驚破と謂はば射て取らむと、固唾を呑める一人は、吐息をつきて汗を拭ひぬ。
「はれやれ餘計な汗を掻いたぞ。日本人は小人だと謂ふに因つて、彼でも大人だと思つたら、いや途方も無い間違だ。小兒の時が彼樣では、大人になると五尺の上だな。はて、飛んだ思違ひをして居つた。」
また一人、りう〳〵と扱きたる、蛇戟を伏せて、
「それでも彼の餓鬼しよびかうか。何ぞの用に立たう哩。」
謂ふ間に千代太の小舟に迫りて、
「小僧、遁げても駄目だ〳〵。」と大手を廣げて取圍めり。

「うむ、遁げるのは其方の國だ。」と千代太はびくともなさざりき。
「何を！」と眼を瞋らしたる一人の支那人が舟より舟に手を伸して、無手と千代太の肩を摑めり。其二の腕を小刀以て裏搔くばかり突通せば、苦と叫びて反返り、きやあ〳〵と泣出しぬ。
これを見たる支那人等は、日本の刃物はよく切れるぞ、油斷して怪我ばしす勿、侮りて過失すなと、戒め合ひて、三人ばかり乘移り、手取にせむとひしめけり。
彼の一生懸命といふものは、未だ幼き千代太をして、飛鳥の働をなさしめつ、しばし支那人を惱ませしが、天の數には極ありて、千代太は遂に捕へられ、直に支那船の捕虜となりぬ。
憐むべき捕虜はやがて船長の面前に曳かる。千代太は少しも恐るゝ色無く曲彔に凭れる船長と膝突附けむばかりなる間近に立ちて、其面を屹と視たり。
船長の白癡たる、九や十の幼兒に向ひて、渠が四十年の其昔、兒等と遊びたりし「軍ごッこ」の戯を、こゝに繰返さむとするにやあらむ。
「小僧の名は何と謂ふ、して、父は何者なるぞ。」と眞面目に、否、寧ろ嚴かに尋問せり。千代太は其言の終らざるに、
「父樣は海軍士官、僕の名千代太。」と答へたり。
あはれ幼兒の無邪氣なる、父は名譽ある軍人なることを揚言せば、以て敵を屈し、敵を威し、

またよく己が地位を高めて、恥辱を蒙ることを免るべしとこそ思へるなれ。
然り、地位は高まりたり。尋常の幼兒なるよりも、軍人の兒としての千代太は太く敵に重ぜらる。しかしながら捕虜たる價値が以前よりは一層多々なれるに外ならざるなり。
船長は莞爾として懌べる色ありき。
「して、其父は軍艦に乘つて出て居るか。」
千代太は傲然として、
「うむ居る。だから支那は負けるんだ。」
「生意氣なことを謂ふ。其軍艦の名は何と。」
未來の海軍士官は軍機洩すべからずと思ひぬ。
「知らない。」と刎附けたり。
「何、知らぬことがあるものか。」
「知らない。」
「澁太い！」と船長は恫喝して、
「親の乘つてる軍艦の號を知らぬといふがあるものか。汝知つて居て言はんのだな！」
千代太は唇を嚙み占めつゝ、

「知つて居ても言はない。」
其動くまじき色を見て、船長は急に言を和げ、
「知つて居ても言はないとは、あゝ、よく申した。面白い、親には孝、國には忠、義もあれば信もある。皆其一言に籠つて居る。感心だ、感心だ。しかし其五倫の道を日本に教へたのは、こりや聞け、我が國の孔子だぞよ。然れば我が國は日本の御師匠樣ぢや。師は第二の親だとある。其に對する禮を知らんでは、いかに親に孝、國に忠でも、車に片輪と謂はねばならぬ。よくこの處を辨へよ。我等は師匠の家族で無いか。其が問に答をせいでは、師に對するの禮を缺くぞ。さあ何とぢや、怜悧な奴だ、分別せい。」とものくしげに說いたりけり。
我が神州の臣民は狂者といへども聞く耳持たじ。小き捕虜は其が生殺の權を握れる、敵の前をも憚らで、
「戰の時は旗ばかりだ。師匠も親もあるものか。孔子でも蹴倒すぞ。」
と思ふさま罵れば、船長は嚇と怒りて、野蠻の本性を顯したり。
「憎い奴！それ、鞭つて白狀せろ。」と、水夫等に命じて拷問せしむ。渠等は畏みて答を中てつ。
千代太は亂拳打鞭の下に、苦痛を忍びて聲を絞り、
「えゝ、支那奴覺えて居ろ、父樣にいツつけらい。えゝ、えゝ。」

ぢつと堪へて居たれども、果は苦痛に堪兼ねけむ、
「あれえ母様！母様！」と悲泣の聲も幽になりぬ。
此上打たば呼吸絶えなむ、活して置きてものにせよと、船長は水夫を制して、鞭撻の手を留めしめ、呼吸も絶ゆげに弱果てたる、千代太を其まゝ舁行きて、これを一室に幽閉せり。

五

千代太が幽閉せられしは、不潔なる物置にて機關室の傍なりき。
大なる貨物を詰込みたれば、小き身體の置場も無く、手足も自由に動かし難かり。元來人を容るゝ處ならねば、大氣の通ふ透間もあらで、唯これ暗澹たる穴に過ぎず。
剰へ機關室に隣りたれば、室内の空氣は沸上りて、千代太を茹でなむばかりなり。連日の艱苦に疲勞して、またこの害迫を受くる身の、鐵石にあらざるよりは、得て何者か堪ふべけむ。況して筋肉の固まらぬ幼兒の身なるをや、特に慈愛深き母の兒なるをや。
千代太はこゝに押込められてより未だ三十分も經たざる前に、一切の苦痛を忘れて恍乎となりぬ。これ蓋し腦髓よりはじまりて全身逐次に溶けむとするなり。
良ありて千代太は果然昏倒して人事不省となりけるに、何者とも知れざる聲あり。耳許にて、

「若様、若様。」と呼べるにぞ、打驚きて眼を睜けば、手足も顔も眞黑にて、最逞ましき大漢の其眼は其形に似て纖々と、柔和の相の顯れたるが、墨の如き暗室の裡に一際黑く認めらる。
爾時黑男は朴訥なる聲を發し、
「おゝ、御氣が着きましたか、御心持は何うでござりまする。」 謂ひつゝ徐ら掌以て千代太の背を搔撫でつ。
「些御氣分が直りましたら、私と同伴にござりませ。」ともの和かに勸めしが、千代太は半ば夢心地なれば、渠が尊敬の意を表して、「若様」と呼び、はた介抱しつゝあるにも關はらず、只管船中の一員が我を拷問場か斷頭臺に引かむとて、來れる者とのみ思ひたり。
然れども惡怯れたる體も無く、
「何處へでも連れて行け。」と千代太は疲れたる聲にて謂ひぬ。黑男は笑ましげに、
「早速の御承知で忝ない。どれ、それならば御案内。」
此時室の外にて、
「はてな、小僧が誰かと談話をして居る。」
と支那人の呟きて戸をがら〳〵と引開けたり。同時に映射入る日の光に黑男は身を跳らし、汎と海に飛込むにぞ、呆氣に取らるゝ支那人は口あんぐりと眼を睜り、渠等が嘗て一圓銀貨を遺失

せし時のありさまにて空しく泡立つ海面を茫然として瞻りしが、やがて千代太を無手と摑みて、
「今のは何だ！」と責問へり。
我さへ怪訝に堪へざるを、爭か人に說明すべき。千代太の答は例の如く、
「知らぬ。」とばかり冷かなるものなりき。
支那人は躍起となり、
「汝、性懲も無い。これでもか。」
酷くも拳を振上げて、打下さむとしたりしトタン俄然凄まじき震蘯ありて、件の支那人が横樣に轉べるまで、船體に甚だしき傾斜を來せり。唯見れば船の舳の方に、背の一部分を露せる、其すらも十間に餘りぬべき、一頭の巨鯨、今しも一大打擊を加へて、爾く汽船を動搖せしめつ。
更に滔然と浪を分けて、海路大約三里ばかり退却するよと見えたるが、殆んど端倪すべからざる、絕大の速力を以て、矢を射る如く返り來り、ドンと船腹の要所を衝きて、一跳尾鰭を跳ねたる勢力、大海の水を飜せば、何かは以て堪るべき、汽船は直に轉覆して、山なす浪に捲込まれぬ。其瞬間千代太も海中に墜落しけるが、水は踵をも浸さざりき。
蓋し巨大なる鯨の背に逸疾く千代太を支へしに因る。
鯨は千代太を乘すると齊しく、流星の疾さを以て一直線に馳出せば、千代太は眼眩めきて立つ

こと能はず、背に打伏し眼を閉ぢつ、其後は唯排水の音を聞くのみなりし。
有低幾時を經たりけむ、波濤の音の聞えずなりて、鯨は進行を留めたり。
眼を開けばこは什麼、其身は黑坊主の背に負はれて、巍然たる城門の前に在りき。
奇なる哉、門の柱は黃金以て造り、門扉は透明なる水晶體なり。莊麗にして偉大なる宮殿の裡は門を透して見つむべく、屋根は殘らず白銀にて、高樓の欄干の紅なるは珊瑚にこそ、すべてこれ宇宙の美を一落に集めて造れるもの、譬ば草水晶の極大なるを、月に透して視むる觀あり。
「若樣、最早參りました。」
黑男は振返りて背なる千代太に斯く謂ひつゝ、徐ら門內に入行けば、左右に整々と列を正せる無數の雜魚は、千代太と黑男とに敬禮せり。黑男も答禮しつ、なほ奧深く進入る。地は五色の玉より成りて粒々盡く異彩あり。やがて二の門を過ぎ、三の門を通り、最後に潛れる朱塗の門は第十五番と數へらる。
それより眼界新に開けて、庭園風致を極めたり。其處に名の聞えざる紅白二種の花ありて、咲も亂れず散も初めず。
庭園の盡くる處に到れば、一帶の淸流素練を敷けるに、瑪瑙の橋を懸渡せり。
渡終りて堂に昇る。時に鯛、鯖、鰈、鰒なんど孰も魚類にして束帶せるもの、恭しく出迎へつ、

黑男とともに千代太の前後に從ひてする〳〵と廊下を渡れり。

一の唐戸、二の唐戸、三の唐戸、四の唐戸、唐戸の數も八個を越えて、九ツの唐戸に入れば、目も遙なる前面の盡に、一輪月の如き光を認む。

間近くなるに從ひて、月かと見しはそれならで、床も、天井も、襖も、壁も、唯一面に透明なる水晶を以て張詰めたる、楕圓形の廣間なりき。

其室の中央に一脚紫檀の卓子を据ゑたり。これに對して、最も氣高き一個の姫、玉冠を戴き、黃金靴を穿ち、身に瓔珞を絡へるが、端然として居給へり。

「と見る時魚は皆跪きぬ。黑男も千代太を下して其まゝ其處に踞まれり。鯛のみ膝行して前に進み、姫に向ひて恐る〳〵二言三言申しけるが、擦足して此方に來り、

「いざ。」と千代太を導きぬ。

六

滿堂の威儀の肅々たるとゝ、莊麗なる四壁の光景とに頓着せず、つか〳〵と行きて貴人に咫尺せる、小童の無遠慮なる、姫は片頰に笑ませ給ひつ。

「よくこそ來たれ、和子よ、待受けたるぞ。」とのたまひし、一句に無量の情を籠めて、愛を湛へ

たる眼に眤と千代太を見給ひぬ。

千代太は心得ぬことのみ多ければ、姫の御聲をよくも聞かず、はた其溫顏を見て其慈愛を讀まむともせで、彼方此方を見廻せば、透通る壁の外にも、天井の外の方にも、幾百尋とも分かぬ海水の、音をも立てで流れつゝ、銀色を帶べる魚、金光の輝く魚、室の周圍に群りて、天窓の上にも行交うたり。

千代太は思はず聲を放ちて、

「あら！」と叫び、答を求むるといふにもあらで、はじめて姫の面を視たり。

容顏淸らかに薦長けて、月を拭へる俤の威風四邊を拂へども、宇眉の間には自から優愛の雲靉靆たり。

姫は興覺顏なる小童の俄に調子外れの聲を揚げたる可笑さに、噴出す笑を忍びつゝ、

「其樣に怪むことは無い、御身が住へる大陸の風に包まれるも同一い譯、此處は水の中の龍宮ぞや。」

さては此こそ音に聞く、龍の都の明珠殿にて、女性は某の姫なれと、千代太は心に頷けり。曩に黑男に逢へりしより此時に到るまで、外物の奇觀に眼を奪はれ、非常の出來事に氣を奪られて、全く夢路を辿りしなり。

「でも、何うして、一體、何故だらう、變だ、可訝いな。」
圓なる眼を睜りて頻に胸中の疑問を呟けば、鯛は莞爾として説明すらく、
「和子は黒男とぞ見給ふなる彼なる鯨の大將が、海中を巡邏の砌、和子が支那船に捕へられたる始終を見て、お救ひ申さむと存じたれど、龍王の許可も無きに濫に波濤を起し難く、一度龍宮に引返して、姫君の裁許を得つ。恁はお助け申せしなるが、姫君、和子の言行をお聞きありて、頻に見ま欲しとのおほせに因り、強てお招き申せしなれば、御遠慮遊ばすことは無い。」と語り終れば小童は稍疑の解けたりけむ、其顔色も常に復しぬ。
姫は玉なす腕を伸べて、千代太の肩に投懸け給ひ、
「幼兒よ、御身の父母は、いかなればこの愛らしき兒を棄てて、浪の上に流せしぞ。」と背を搔撫で給ふ時、瓔珞鏘然たる音ありき。
其姫の手の觸るゝに連れて、千代太は笞の痕の疼痛を拭取らるゝ心地して、氣も爽かになりけるが、彼方より聞かれずとも、我先づ進みて問はま欲しき、父母のことを尋ねられて、千代太は涙さしぐみぬ。凡そ人には反動力なるものありて、支那船がなせし如き殘虐を加へらるゝ時は、虎より猛かりし者と雖も、爾く優き姫君の手にいたはらるゝに及びては、却りて蟲よりも弱くなるものなり。

小童は涙ながらに、いはれを説けば、傍聞せる魚どもの、袖を濡らさぬものは無きに、最ど優しき姫君の猶更哀を催しつゝ、
「御身の父上海に在らば拵へても無き便宜なり。一切水のある處として自分が權力の及ばぬ處もあらざれば、眷屬どもを遣はして御身が父の在所を探らせ、やがて逢はせてあげようほどに、それまで爰に留まりて、自分とともに起臥せよ。」と眞心を籠めてのたまふものを、誰かはこれを拒むべき。とおもひの外なるは千代太なりき。
渠は俄に頭を掉りぬ。
「おゝ、頭を掉るは嫌なのか？」　姫は意外の面色なりき。
小童は頷きぬ。
「これはしたり、何うしたものでござりますな。」
鯛は傍言葉を添へて、千代太の年紀の者の喜ぶべき、あらゆることをば數へ立てて、機嫌を取れる効もあらず。千代太は姫の手を擦拔けて矢庭に黒男の背に飛附き、
「喃、支那の船へ歸してくれ。負つて〳〵。」
と負はれ懸れり。黒男は當惑顔。
「思ひも寄らぬ御難題だ。彼は若樣を助出すため、破毀してしまひました。」

千代太は腹立たしげに苛立ちて、黑男の耳を引張り、
「えゝ、不可いことしちやつたなあ。何で彼の船を破毀したんだ。」
床も破れよと地踏鞴ふめば、黑男は何かは知らず（やんちやん）の駄々に途方に暮れ、唯茫然たるばかりなり。
鯛は見兼ねて千代太を宥め、
「餘りと謂へば頑是の無い、沈んだ船を何するもので。よし舊の通りになつてから、船へお歸り遊ばすと、また酷い目に逢はせまする。聞けば危い既のことに、殺されようとなされた樣子、そんな處へ大切な和子を、何うして遣られるものでござります、さあ〳〵おむづからずと機嫌を直して一番笑顏を見せて下され。」
「一同願ひ上げまする。」と並居るものも聲を揃へて賺したり。
千代太はなほも肯ぜず、
「嫌だ、嫌だ。」と言休まねば、太くこれを怪みて、やう〳〵賺し拵へつゝ、仔細を聞けば理なる哉。
「支那に辱しめられて、遁出した樣な卑怯者は、父樣に逢はれないのだ。父樣もお逢ひでない。母樣にも叱られる。士官にもなられないや。そんな者は死んでも可い、殺されて讐敵を討つて、

それから父樣に逢度いのだもの、此黑坊主奴何だつて、形無にしたんだなあ。
片頰笑みつゝ聞給ひし、姫は左右を顧みて、
「此兒の爲に仕返すべき手段あらば申して見よ。」
恁嚴に問はせ給ひつ。
「可し、可し、それならば案じずとも、よきに計ひ得さすべければ、大人しくして待つて居よ。」
と千代太の頭に手を加へて、臣下の答を待給へば、
「御前、申上げまする。」
と謂ひつゝ鰈は列を出でて、姫の御前に畏り、
「小臣背に眼あれば、他の魚の見ぬ處も、よく見て知つて居りまする。曩にそれなる黑男が、支那船を沈めし時、清國の兵士二百人、殘らず海中に陷りて、是より三百里北の方に、あぶ〳〵致して罷在れば、姫君捕吏を遣はされ、生擒つて連歸り、若樣に差上げて、其御存分におさせ申すが、何より宜しからうかと存じまする。」
姫は其手段を妙なりとし、
「捕吏に何を遣はさむ。」とありけるに、鮹は天窓を押立てて、鹿爪らしく座を進みぬ。
「はツ、其儀は小臣に仰付け下されませ。」

「おゝ、入道ならば仕損じあるまい。」姫の頷き給ひければ、鮹は面目を施して、天窓を掉りてぞ出でて行く。

入違ひに一尾の侍魚、封書を恭しく捧げ來れり。

「御前、唯今黄龍王より……御使には航海魚が參りて候。」

七

黄龍王よりの音信は何事ならむと、姫早速披見あれば、

『姫君に申候。

東洋亞細亞洲清國の主人、老龍を其國旗に描きてより、六師天下に敵無しとて、自から天兵と僭稱し、君臣ともに心驕りて、國際の禮を知らず、好誼を隣邦に缺きて、日本神州の怒に觸れ、過失を改めずして、遂に干戈を動すに到れり。

然して這度神州の兵と朝鮮牙山に戰ひて、一敗脆くも地に塗れ、三軍鏖殺されなむとするに際して、老龍其陣中に祭らるゝが故に、これを棄つること能はず。止むなく一片の憐愍を垂れて、爲に大風淫雨を起し、頃刻牙山を暗黑になし與へしに因り、討漏されの清兵は僅に身を以て暗夜に免るゝを得たりき。

それだに老龍が特殊の恩典なるにも關はらず、渠等の亡狀なる、遁逃の急、黄龍を描ける國旗を棄てて、落壘の泥土に委せり。

こゝに於て黄龍斷然清國を見棄て終んぬ。渠等が滅亡の機や既に熟せり。遠からず大陸に身を置く處を失ひて、海中に沒落し、或は姫君が龍宮に來るあらむか。黄龍嘗て其國旗に描かれたる緣に基き、姫君、黄龍がために意を枉げて渠等を助け給はむも計難し。もし然らむには却つて太く我が意に違ふ。姫君、豫めこれを諒せられよ。』

と認められたり。

恰も可し姫は今鮹をして支那人を捉へしめ給ふ折柄なれば、直ちに諒承の旨を答へて、航海魚をば歸させ給ひつ。

未だ幾ほどもあらざるに、鮹は其八の足に、八個の支那兵を吸附けて、首尾よく龍宮に歸來せり。其部下をして吸取らしめたる多數の支那兵は外の方に守らせ置きて、己は重立たる者のみ八人を率きて大庭に入りて、この由を申したり。

姫は捕虜を擧げてこれを千代太に賜へり。渠等は盡く千代太が隨意の犧牲となれり。

千代太は踴躍して端近に走り出で、自から捕虜の罪を裁せむとす。

姫は物蔭に隱れて其狀を垣間見給ふ、臣下等は綺羅星の如く、順を追ひて、千代太の左右に居

流れたり。

「こらッ！」と千代太は一喝して、

「きさま等は何處の者だ。」

問はずして渠等は清國の民なることを知れども、斯の如くなさざれば捕虜審問の式の亂れむことを恐るればなり。

これより前清兵は鯨に船を覆されて、したゝかに水を飲み、頻に煩悶しつゝありし處を、鮹の足に吸附けられて足搔きける内、奇異なる白洲に引出されたれば、轉動すること一方ならず。前後の見境もあらざれども、猶生命の惜しきといふ其一念だけは確なりと見え、「お助け。お助け。」と叫ぶのみ。

「こら何處の者だ、早く謂へ！」 再び千代太に呵せられて、

「へい、支那人ぢやさうにござります。」と震聲にて答ふる者あり。

千代太は嚴肅に座を構へて、

「支那人か。」

「左樣だと申しまする。」

「だと申しまする？きさま達のことを問ふのだ。」

「唯、私等自分では中華の天兵と申しますが、他の御方に對しては左樣申しても薩張通じませぬ。唯もう支那人が第一解り可いのでござります。」

「うむ支那人。何處から何處へ行くか。」

「太沽から出まして平壤を指して參ります。運送船の乘員でござります。」

「何をしに行く？」

「戰に出て居りまする大將方へ、家内や娘から遣はしまする、文を屆けに參りまする。」

「可し、路で日本の小兒を捉まへて、酷い目に逢はしたのは、きさまだらうな！」

「一向に存じませぬ。」と謂ふ者こそ我を拷問したりし船長なれ。渠等は實に曩に傲慢なりしほど、今は卑下する者となりぬ。

千代太は船長を睨附けたり。

「覺えがあるか、顏を！顏を！」

船長は他の捕虜とともに恐る〳〵顏を上げて、千代太の顏を瞻りしが、蒼くなりて平伏しぬ。

千代太は悲壯なる聲を揚げて、

「日本の小兒だぞ！」

渠等は一齊に叩頭せり。

「僕は日本の小兒だぞ！」
渠等は再び叩頭せり。
「誰だと思ふ？」
渠等は三度叩頭せり。其自ら卑むことの甚しき、殆ど主に對する飼犬の禮を以て、千代太をして非常に尊大なるものとならしめたり。
千代太は一同に向ひて嚴に、
「敵國の奴と謂ひ、殊に怨のある坊主ども、片端から首を切つて父樣のお目に懸け、後は母樣の土産にする。」遂に死を以て罪を裁しぬ。
渠等は死刑と聞くや否や聲を揃へて號泣し取亂して歎きけり。
其狀の可笑さに、並居る魚どもは噴水を禁じ得ず、姫も物蔭に口を蔽ひて、吹出したさを包み給へり。
「愈々死刑と定つたれば、泣いても喚いても助からぬ。やい、神妙に觀念しろ。龍宮の死刑はな、先づ鰐の口の鋸引、赤鱓の針の磔、太刀魚の刎首だ。特別の御慈悲を以て好なやうに殺して呉れる。どれなと勝手なのを申上げろ。」と黑男の謂へる間は恩免の沙汰にやあらむと、泣聲を靜めて聞きたりしが、其望の絶えたるにぞ、野原の蟲の啣く如くまた一同に泣出したり。

「ひえゝ、どれもこれも嫌でござります。辮髪は斬られても苦しうござらぬ、首ばかりは御免下され。お慈悲々々。」と掌を合せぬ。
「えゝ、罷成らぬ。」それと黑男が命を下せば、太刀魚閃めき出でてあはや首を刎ねむとせしを、
「待て！待て！」とお留めありて姫物蔭を出給ひ、
「和子よ、腹立は道理なれど、蟲同然なる其者ども、斬つても手柄になりませぬ。自分計らふ仔細あれば、生命ばかりは助け給へ。母君の御名に懸けて渠等の爲に詫びます。」と憐愍深き姫君の命乞をし給ふにぞ、千代太も渠等の泣立つるに張合の無き處なれば、異議なき旨を領きたり。
姫は滿足し給ひつ、差控へたる烏賊を召して、何事をか命じ給へば、烏賊は畏りて鮹を呼び、
「入道殿ありだけの捕虜此處へ引出されよ。」
「心得た。」と鮹は其部下に傳令して、二百の清兵を引來らしむ。やがて庭前に天窓を並べたるが、南瓜畠に似たりけり。
爾時烏賊は口を開きて、一道の墨を吐出せば、見る〳〵團々たる黑氣となりて、捕虜の清兵を引包み、これを暗中に葬りて、眼界の外に齎らし去りぬ。

八

龍宮に於ける我が年少の珍客は、其可憐なる容貌と活潑なる風采と、無邪氣なる動作と加ふるに其哀なる境遇にあるとに因りて、太く姫のために愛せられぬ。

千代太は姫の好意によりて清兵に怨も返しつ、且つ姫が約束に背かずして、眷屬の魚どもを四方に派し、父の所在を搜しつゝあれば、追つて音信を得べき望もあるに、姫が愛憐の濃かなる、母を思ふ小童の渴を癒すに餘りあるにぞ、忘るゝといふにはあらねど、故鄕のことはいひも出ださで、樂しく遊び暮したりき。

然るに近來龍宮に一の奇異なる現象こそあれ、他なし、夜來數々海上に青白き光の出で來て、深く海中を射通すこと是なり。

其光千尋の海底に達して、明珠殿の棟にも及ぶにぞ、深宮に在す姫君を始めとして、鯛、鱸などこそ知らね、下廻の下魚の輩は、每夜これを目擊して、或は訝り、或は怪み、或は爲に恐を抱きて、魚心兢々たり。

今夜も夜廻の番に當れる鰯と鯖は、城の外郭を巡邏の折しも、一道の青光發射して、颯と頭上を照したるに、射竦められて立停まり、

「彼さ、彼だよ。風說をするのは、えゝ、おい、何だらう、何うも尋常のものぢやあ無い樣だ。電ならごろ〳〵と來る譯だが、音も沙汰も無いから解せねえの。」と指示したるは鰯にて、

「何しろ氣の知れない妖物だ。」と空を仰ぐは鯖なり。

「何だつてお前、性の知れねえものほど恐いものは無いと思ひなさい。正體さへ解れば大したことも無からう。それ、鯨に鯱といふ理窟で、己より弱い奴かも知れないからの。」と鰯。鯖が、

「お前より弱いものだと、まあ〳〵魚ぢや無い。蟲位な處だらう。それにしちやあ素ばらしく光る事だ。」と冷評せば、鰯は苦笑して、

「皮肉なことを謂ひなさんな。何しろ寢覺が惡いぢや無いか。天變でもあるまいかの。」

「へん、人間ぢやアあるまいし、六月雪が降つたつて此方魚等が構ふものか。却つて蟲で無からうかと、其が案じられてならないのよ。」

「こゝに鰯ありさ。其御憂患御無用だ。案じないが可いね。」と鰯が高慢に謂ふ。

鯖は思はず噴出したり。

「はゝゝ、蟲だつてもお前、お前の喰ふ樣なちつぽけなものばかりぢや無いぜ。武者修行の退治る大蛇もあるし、兒雷也の蝦蟆もあるし……」

「それから？」

「それから、……未だある。」
「未だある？何だ。」
「むゝ些とむづかしい。」
「むづかしい！其筈だよ。出鱈目を謂ふからだ。」
「えゝ、揚足を取るない。然らば愈々物語らむかッ、驚くな！」
と不意に喚く、
鰯は驚きて、
「吃驚すらい、不景氣な。」
「へん、吃驚せざあなるまいて。それから、喃、可しか。（む……か……で）」
「ひえゝ！」と鰯は震出しぬ。
「何と、何うだ。彼だと龍宮は滅茶々々だ。」
「また瀨多の橋へ行つて寢轉んでて、跨いだ奴を賴んで來ようか。」
「馬鹿謂へ、當時そんなことを仕ようものなら人力車に引殺されらあ。」
「それでは何うせう。」
「仕方が無い。」と鯖は青くなりて投首せり。鰯は少時考へて、

「でもまあ、光物の出處が一個所らしいから些少あ賴だ。百足の時は、松明の樣な火が百ばかりも、二列に並んで押寄せたと謂ふ。まさかに眇眼の百足ぢやあるまい。」
鯖は頻に海上を見上げたるが、此時さも怯えたる聲を發し、
「叱！靜にさつし。あれ、二個見えるぜ、の、それ。」
「むゝ、や！三個になつた。」
「いや四つだ。そら、あら〳〵五つ、六つ！　七つ！　八つ、やあこれは大變、南無三寶。」と慌てふためき遁げて行く。
然り其時しも煌々たる青電の光は、一個また一個數を加へて遂に十二の多々に及び、白銀の光を散下して、海底を照し、龍宮は其水晶體の全局を映出だされたるが最凄婉なる觀ありき。
其夜は無事に明けつ。翌午前、千代太は姫に導かれて園内を逍遙し、花を摘み、香を慕ひつゝ、紅綠明暗の中に出入せるが、やがて手を携へて珊瑚珠もて造做せる腰懸に休へる時、姫は爛漫として咲香へる紅白二種の花を指さして、
「和子よ、紅白の色孰が好き。」と問給へば、
「白。」と千代太は答へたり。
姫はさもあらむと頷きて、

「男は淡泊なるものなり。自分は女なれば紅なるぞ好き。」と謂懸けて莞爾とし、
「彼の花摘んで遊び給へ。自分も共に。いざ、」と千代太を伴ひて、濃かなる花の茂に入行きしが、良ありて出來れるを、唯見れば千代太は紅の花を携へ、姫は白きをぞ手にし給ふ。
「其故奈何、和子は白きを好むと謂ひつるに、」と怪みて姫の問ひ給へば、
「姫に。」
「あの自分に。好と謂ひし紅の花をたまふとな。ても愛らしの幼兒よ、自分は最早御身を母君の御手に歸しは得せじ。」と頬と頬とを打重ねつ。
「見給へ、自分とても此花は殘らず御身に與ふるため。」と示し給へる花束は其色の紅なるを好むといへりし姫なるに、皆白色のもののみなりき。
紅白の花は直ちに兩個が間に交換されたり。打解けたる主客の顏は、平和と、幸福とに輝きぬ。
姫はまたあらためて、
「悲しきこと、憂きことの多かりつる故郷なる大陸に歸らむより、自分とともにこゝにおはせ。龍宮の若君になし參らせて一切の寶玉を與ふべく、自分が身をも、和子よ、御身の所有として、譬ひ母君の御慈愛には及ばずとも、優しき姉となりなむに、爭で肯入れ給はぬか。」と千代太の頸に手を搦みて、顏を覗きてのたまふ氣色、最萬たけて氣高き中に譬へむもの無き優しさの、尊む

べく、親むべき、得も謂はれざる美しさ。
「ぢやあ姉樣と謂ふよ。」千代太は姫の腕に縋りて、少しく甘ゆる調子なり。姫はものをも謂はずして、固く抱緊め給ひける。
幼兒は其瞬間、父も母も故郷も、未來は海軍の士官たるべき豫算をも、はた地球をも忘れ果てたり。
正に其時、我が大日本の、日章旗は、明治二十七年九月——日午後零時三十分を照し居れり。
忽ち聞く爆然たる雷聲浪を震うて餘音四海に轟くを。
姫は啊呀と空を仰ぎて、霞の眉を顰め給へる、ほどもあらせず、第一の雷鳴、第三、第四、漸次に頻繁なるものとなりて、果は恐らく數千の霹靂一時に鳴るかと疑はる。
有恁處に、鯛は滿面に憂悶疑懼の色を顯して馳せ參れり。
「何事なるぞ。」
「さん候、去ぬる頃より怪しき光物あつて夜な〳〵珠殿を照せしとも申し、或者は深更浪を蹴て縱横に乘廻す不思議の怪物を見受けたりとも風説いたし、魚心兢々たる折こそあれ、今日の霹靂はよも尋常ごとではござりますまい。」
姫も御氣色穩ならず、

「いかに誰そある、疾く行きて彼の物音を檢べて來よ。」
「いや、おほせあるまでも無く、飛の魚、太刀の魚、鰈も鯨も先刻より、偵察に參つたれば、追附け見屆け歸りませう。おゝ、あれ〳〵、あれへ參つたは……」
「御注進！」
と呼ばはりて、飛の魚は飛來り、
「はッ、海上一面煙霧に蔽はれ、數千の火花燧と散りては、百雷轟く音のみ聞え、何者とも辨へねど、御内の鯨を二ッ三ッも合はせたほどの凄まじき、大なる物體が一ッならず、二ッならず、十ウも二十も入亂れ、追つ、返しつ、縱横に烟の下を掻潛るが、時々見ゆるばかりにて、今日晴天の眞晝間、大孤山沖は暗夜に似て、定かに物色も見え申さぬ、希有の珍事でござりまする。」と大息つきて報告せり。

九

飛の魚の報告にて、いよ〳〵平和は破れたり。姫は千代太の手を引きて、
「何にも恐いことは無い。自分にしかと抱れて居よ。」と蓮歩を返さむとぞなし給ふ。時しもあれ萬雷一爆天地も崩れむず響あり。

これと同時に長さ二尺餘の鰤形水雷、波間を縫ひて飛込みつ、珠殿の棟にぶつかりて、爆然たる音を發し、微塵に碎けて飛散る刹那、珠殿は凄まじく振蕩して、あはや倒れむとぞしたりける。唯見れば白銀の屋根の一部は、大なる穴を穿たれたり。なほ一層戰慄すべきは、姫が傍に立てりし一尾の侍從、鐵片のために射殺されしこと是なり。
啊呀と驚く隙も無く、陸上の人類が手足處を異にして、五體のばら〳〵になれるもの、幾千といふ數を知らず、肉霰血雨に交はりて、片々として降來り、一種の惡臭を發射して、海水を紅に搖濁せば、至歡至樂の海底は忽ち血の地獄と變じたり。
姫は悵然として天を仰ぎ、
「こは自分に罪ありて、梵天帝釋の怒に觸れ、龍宮は今滅さるゝか。」
と花顏色をば失ひ給ふ。
折から數億萬の眷屬ども、我勝に前後を爭ひ、なだれを打ちて遁來れり。
「早何方へなりとも落給へ、若樣ももろともに。」
と鯛の斷つて諫むるにぞ、姫もやう〳〵頷き給へば、一頭の蓑龜は直に背を差出せり。
姫は千代太を搔抱き、其まゝ龜に乘らせ給ひつ、供奉の魚ども前後を守護し無數の眷屬もろともに、浪にまかせて落ちたりけり。

さるほどに龍宮の裡は空虛となりて、一尾の雜魚の留まれるも無く、生類の隻影だも餘さずして、唯轟爆の聲の占領する處となりぬ。

時に、流丸雨注の間に交はりて坂に俵の轉ぶが如く、ころ〳〵と落來れる、二個の淸人ありて、彼國海軍水兵の服を絡へり。

二個は前後して海底に落留まれるが、後なる水兵先んぜる者を呼懸けつ。

「おゝい。其處へ行くのは誰だ。矢張冥途の侶伴どのかな。」

呼ばれたる水兵は振返りぬ。

「むゝ、お互にこりや死んだのかなあ。」

「さうよなあ。何しろ、日本艦隊からズドンと來たので、わつと謂ふと、もうどぶん。ずぶ〳〵ずぶ〳〵と沈んで、それから此處へ來たのだから、まあ〳〵死んだのであらうわさ。」

斯く語合ひつゝ兩人は、うろ〳〵四邊を見廻しつ。

「斯うやつてお前とも談話が出來る樣だと、娑婆も冥途も同一だな。この位なら何も軍艦に乘込んで怯氣々々するがものは無かつたのに。」

「處がさうは參らぬて、これからが難儀なのだ。それ近い譬が斯う見渡した處でも、薩張方角が附くまいがな。」

「なるほどの、何方が何處だかぼうッとして居る。」

「妙に心細くなつて來た。おらあもう涙が出懸つて居るのに、氣の滅入る樣なことを謂つて呉れるなよ。」

「何しろまあ何方へ行かうな?」

「おいらにやあ此方の方が好からうと思はれる。」

と南へ行く。一人は二の足にて、

「いや〳〵、お前は隨分と罪を造つた奴だ。とても結構な處へ行かれるのぢやあ無い。」と北の方へ行懸る。

「御道理々々、自分でも左樣思ふ。何でもお前の行く方へ行くとしよう。もう、かうなつちやあ他が賴だ。」

と其後に從ひ行く。

「待てよ。ありやうは俺だつても餘り其極樂へ行かれさうな心當りも無いのだて。」

「それでは矢張惡事をしたか。」

「なに、眞個些細なことだけれど。」

「遣らかしたのか。」

「今になつて後悔するよ。」と悄乎すれば、いま一人は泣聲になり、
「して見ると何だなあ、何方道極樂へは行かれないと謂ふものか。」
「先づ左樣斷念れば間違は無い。」と投ぐるが如く言放てば、
「やい、此奴、賴効の無い畜生だ。えゝ！」
俄に勃然と怒を發し、矢庭に對手を撲はしたり。此方も赫と腹を立て、
「何だつて人を撲ちやあがる。この礫野郎めい、此方の知つたこつちや無い哩。汝も斯うして、」
と拳を上げて、打つて懸るを打返し、天窓の豚尾を摑合ひ、戰正に酣なる、背後にどや〳〵
と跫音して、二百ばかりの人數來れり。こは嘗て千代太を虐待せる例の船長を頭としたる、一隊
の淸兵なり。渠等は烏賊の墨の爲に暗中に葬られて、永く太陽を見ざりしが、今日しも龍宮は砲
聲に驚かされ、慌しく難を避けたりし時、烏賊も同じく落行くとて、其が唯一の武器とせる黑汁
を納めて走りしに因り、淸兵等は不意も、眼に物色を辨ずることを得たり。乃ち忍びやかに遁出
しけるに、見咎る魚のあらぬのみか、龍宮の裡は寂として、幽けき呼吸も洩さざるにぞ、生來盜
心の逞ましき輩のことなれば、これは勿怪の僥倖なるかな、目當り次第に引攫ひて、行懸の駄賃
にせよと、金銀、瑠璃、硨磲、瑪瑙、珊瑚、琥珀、眞珠など、掃込むばかりに掠奪して、こゝま
で引取り來れるなりき。

渠等は同國の水兵が、何かは知らねど摑合ひ、必死となりて爭ふを見るより、中に入りて押宥
め、やう〳〵雙方を和解せしめつ。
「くだらぬ喧嘩をするものだ。一體何處から迷つて來たのだ。」
と船長に問はれて、水兵は空を指さし、
「此上から落ちて來ました。」
「妙な處から落こちたものだな。此上は何處になる？」
「大孤山沖！」と二人は聲を揃へたり。
「大孤山沖?!　汝達の風と謂ひ、この凄まじい砲聲と謂ひ、それではいよ〳〵遣附けたな。」
「丁度今日の正午から、日本の艦隊が十二艘、此方の艦隊十四艘、大孤山沖で打合つた。ヤ、其
凄まじいことと謂つたら、あゝ、思出しても悚然とする。あれ〳〵、未だにあの通り。」
「ても恐しき物音ぢやな。して〳〵何方の勝であつた。」
水兵はさも不思議なる顏色にて、
「へゝえ、未だ貴下の樣な時勢に暗い人がありますかね。何方の勝だなんと謂ふ。」
「尤も此方の勝ではあらうが。」
「滅相な！」と頓興聲。

「えゝ、それでは此方が負けたのか。」
「知れ切つたことでさあ。此騒が休むのと、此方の艦が亡くなるのと同時だと思つても可い位なもので。何だつて向うの意氣込が大變なものだ。勝たねば死なうといふ恐しい奴なんでさあ。」
「而して此方は何うだらう。」
「味方は負けたら遁げようといふのでね。」
「馬鹿奴、と謂つて見た處で仕方が無いかい。何でも構はぬ、金子と生命があれば可いのだ。兵士等其氣でさあ參れ。」と多々の財寶を掠めしことと、元氣よく行懸る。水兵二人は慌てて押留め、これから此方が聞く順番なりと、船長等の來歴を尋ぬるにぞ、船長は其始末を語り、彼の掠奪せし金石を見せびらかせば、水兵は涎を垂して、南無三寶！後れたり。せめて餘りものの福を得なむと、後をも見ずして駈出しぬ。
船長は見送りて、
「馬鹿ども、方角も解らない癖に、何の龍宮が知れるものか。さあ〳〵彼奴等に構はずと此方はずん〳〵急げ〳〵。」西を指して繰出だせる時、東の方に聲高く、
「やあ、盜賊待て！待て！」

十

これより前千代太は姫と危險を避けて、砲聲に遠ざかり、彈丸の雨下せぬ邊に、眷屬の魚類とともに空しく海上を望みつゝ、心細くも彳む處に、何方より紛込みけむ清國の水兵二名、間近に彷徨ひ來りしを、怪しき者ぞと引捕へて、其の來歴を鞫問しけるに、これぞ彼の（摑合の水兵）にて、龍宮に賊せむとしつゝ路を迷ひて到りしなる。其の白狀せし言に因りて、轟々たる聲は日清海戰の叫たることを了すると同時に、嘗て闇中に封じ置きしものの、混雜の紛に遁出でたるのみならず、龍宮の寶物の横奪されしことをも知りつ。
安からぬことかな。他の金銀はともかくも龍宮には干珠滿珠と稱へられたる二顆の貴重なる寶玉ありて、最大切なる寶なるをも、合せて盜み去られしにあらざる無きか。
「早く歸りて穿鑿せでは叶ふまじ。」と、姫は急立ちたまへれど、生憎鯨を始めとして、少しく戰鬪力を有せる海中の勇士等は、盡く先立ちて雷聲の偵察に赴きたる、跡に殘れる鯛鱸の類は、皆雲上なる文官にて、冒險などは思ひも寄らず、他は取るに足らざる雜魚輩なれば、誰ありて我行かむと謂ふ者無きに、獨り大日本の幼客のみ、轟々の音を銃聲なりと聞きてより、恐るゝ色更に無く、我自ら行かむと謂ふに、姫は太く危みて、わが生命にも替難き干珠滿珠の珠なりとて、和

子に較ぶれば何かあらむ、危きことな爲給ひそと、叱るが如く制し留めて、肯入れ給ふ氣色無きを、千代太は奮然として推して謂ふ。銃聲に近附くは卽ち父に近附くなり。槍の雨をも潛らでやはと、決心動くべくも見えざりしかば、姫も强ては否み難く、さらばとて和子一人は遣るまじきぞ、自分もともに行かむずとて、駕したる龜を促しつゝ、龍宮に馳歸りて、豫て祭壇に安置せる、干、滿の二顆珠を見給ふに、南無三影も無かりけり。

あゝ彼の寶を失ひては、龍宮は立處に亡びて、荒野となりも果つべきぞと、姫の途方に暮れ給ふを、小童は慰めて、豚奴の盜賊遠くは行かじ、早追懸けて取返さむと、勇むに姫も勇みつゝ、身の危きをも顧みで、砲聲の下を搔潛りて、漸く淸兵に追及び、渠等が手に手に寶を帶びて、走り去るを見るや否や、千代太は雷聲一咤して、

「盜人待て！」と呼ばはりつるなり。

淸兵等は其己を追ふ者の世に最も力弱き一個の美姫と小童の二人のみなるを見つ。

姫は素これ人間ならで、本地は龍女にてましませば、自から露るゝ勇威の相と、其龜に乘りつつある人列の外の擧動と風采とに恐をなし、唯直走りに遁げて行く。其遁足の疾きことは、渠等支那人の特性にして、他が到底企て及ぶべからざるほどのものなれば、爭で追着くことを得べき。

淸兵等はさつさと走行きて、今は早千代太等が眼界の外に去らむとするにぞ、姫はあれよ〳〵

とばかりに、詮方なげにぞ見え給ふ。

然るに淸兵は如何にしけむ、「わ」と一齊に叫びざま此方を指して引返し、姫と千代太に間近く來りて、また「あ」と叫びつゝ、ぐるりと返りて、前途へ一散に駈出しつ、行くこと未だ幾干ならず、また「わつ」と遁歸りしが、姫と千代太を見るよりも、「あつ」と遁出し、行きつ、歸りつ、ぐるり〳〵と遁惑へる、其間に前後よりじりゝ〳〵と詰寄せられて、遂に一同天窓を抱へ、鞠のやうにぞ竦みたる、側面には姫と千代太とあり。

正面より渠等を威して、爾く渠等を屈せしは誰ぞ。最初姫は鯨來れりとて喜びしが、否、然るものにはあらざりき。

唯見れば隆鼻黑髯の人、身には海軍士官の禮服を一着し、手には明晃々たる一口の軍刀を提げたる、威風凜然として四邊を拂ふ。

傍に一個の水兵あり。身に數創を蒙りて、全身朱に染みながら、顏色の英氣毫も減ぜず、渠は肅として士官に侍せり。

千代太はためつ、すがめつ、士官の面を瞻りたるが、突然、

「やあ！父上。」と心臟より出でたる聲を絞りて姫の腕を躍出で、脫兎の如く飛蒐りて犇と士官の腰を抱き、愛らしき顏を上げて、其容顏を仰ぎつゝ、

「父上だ、父上だ、父上だ！」
士官は千代太を睨と見たり。
水兵は傍より問へり。
「おゝ若様か。尉官、御賢息で在らつしやいますか。」
「應、千代太。久しく逢はんな。」
實に千代太の父なりき。
諸君、試に我が海軍が、清國の北洋艦隊と大孤山沖に戰ひて、其大勢力を打破しつゝ國威を宇宙に發揮せし際の、我が名譽ある戰死者に指を屈し見よ。千代太の父は第何番かの指頭に來るべきなり。
中尉は其如何して此處に來りしかを千代太に問ひぬ。千代太は其始終を話せり。父は聞きつゝ微笑するのみ。
水兵は千代太が清兵との間に演じたる、活劇を聞ける時、「坊様！」と叫びて千代太を引抱き、目よりも高く差上げて、「喝采々々、後に艦長だ。」と地蹈鞴ふんで嬉しがりぬ。
一部始終を聞終りて、父は姫に視線を轉じつ、相見て互に一掛せり。

「唯今、千代太に聞く。龍宮の姫君、我が海戰の餘波、貴國の平和を破りしを謝す。しかし、日章旗の下、蠻賊を誅する者、天の命なるを諒せられよ。從つて我が兒が荷ふ處の同生の恩報ゆるに手段無し。但寶玉は、我取返して進らせむ、何の劣奴が盜み持てるぞ。」と中尉が懇篤なる挨拶に、姫は喜悅色に見え、
「右より讀みて十人めと、左より讀みて五人めとが一個づゝ隱し持てる、懷より光明の輝くが見え候ふ。」
中尉は拔劍を按じて踞まれる清國兵を一睨すれば、渠等叩頭して、「お慈悲々々」と謝する處を水兵は飛蒐りて、其頸を搔摑めば、戰きながら差出せる、千珠滿珠を取返しつ。千代太はこれを兩掌に捧げて、いざとて姫の手に參らせぬ。
「こは忝なし客人方、自ら謝するに術を知らず。あはれ其仕方を敎へ給へ、何にても承はらむ。」
と眞心以て姫ののたまひぬ。中尉はいへらく、
「否、唯我は海戰の際討死して、これなる忠勇無比の水兵とともに緣を大陸に絕てり。然るに、日清の戰其局を結ばぬ間は、我が靈快く瞑して本來の土に歸するを欲せず。因りて海中に靈を宿して少しく爲すところあらむと思ふ。姫君、心あらば予と予が水兵とのために一室を假されよ。」

「そは願うても無き事なり。和子も一所に留まり給へ。」
「父上、」と千代太は父の顏を見て、姫は何と答ふべきかを問ひぬ。
中尉は頭を打掉りて、
「母の許に歸れ。」と謂ふ。
「父上と一所に居る。母樣も此處へ呼んで。」
「ならぬ！」と父は嚴命せり。
千代太は豫て父の森嚴なる一度口外に出せし言は、直ちに法律たるを知れば、再び父に强ふるを得ず、默して姫の顏を見たり。眼は、「父とともに。母も呼びて、」といふなる衷情を訴へぬ。
姫は千代太の情を推して、不便彌增り、ために中尉を說かむとし給へる時、曩より姿を見せざりし鯨はこゝに黑男となりて現れ來り、渠が其の兄弟分なる神州の水雷「迅鯨」の許に赴きて聞來れりといふ、日本大勝利の確報を齎らせり。
士官は水兵と相見て莞爾としぬ。
日は已に暮れたり。時に悲壯なる音樂の嘹喨として浪に傳ふを聞く。
姫は耳を澄しつゝ、太く聞惚れ給ふ狀なりしが、稍ありて其音樂の休めるとともに、一方ならず、讚歎して、

「あゝ、さても微妙き音樂かな。何人のかなづるやらむ。」と問はるゝにぞ、尉官は其の日本艦隊に於てせる凱旋の曲なるよしを答へたり。
「いま一曲聞かま欲しきに、あはれ何時の時にかまた聞くことを得べき。」「さればなり、此度は渤海灣を占領して、旅順、威海の砲壘に日御旗の輝く時にこそ、再びお聞かせ申すべけれ。」「そはまた今日の如き海戰のありて後ならずや。自分貴國のためならば、多少の損害を蒙るとも、それを厭ふにあらず。なほ戰へば貴國の勝なるを信ずれども、また君が如き益良雄の身を損なはむが痛ましければ、失禮ながら貴下を封じて渤海の主となし參らすべし。斯くて渤海の內貴下の自由となるべければ、貴國の艦隊を導きて容易く占領せしむるを得む。其時こそまた凱旋の曲とやらむ微妙き音樂を聞得べきを、今より樂みにいたすなり。」
と心優しき言を容れて、尉官は領承の旨を答ふるにぞ、水兵は踴躍して、萬歲、萬歲と三呼せり。爾時尉官は千代太に向ひて、
「汝が故鄕に歸るにつけ、好き土產の出來たるぞ、聞け、我は今渤海に主となりて、其全權を掌握す。敵の水雷は流棄てなむ、敵の榴彈は蹴て棄てむ。はた我が身體は甲鐵の如く、我が艦を庇護せむに、譬ひ十噸の小艦たりとも、單行渤海に乘入りて、平地を行くが如くなるべきなりと、汝歸りて母に傳へよ。母はこれを市人に告げむ。市人はこれを一國に傳へむ。一國はまた天下に